

# 研究紀要

平成29年度

第 33号

創立 40周年記念号



静岡県博物館協会

静岡県博物館協会  
研究紀要  
創立40周年記念号

第33号／平成21年度  
表紙／熱川バナナワニ園のワニ

## 目次

- |    |                                                  |                                                                                                       |
|----|--------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2  | 文化財の宝庫<富士の国、静岡><br>ー静岡県博物館協会40周年を迎えてー            | 静岡県立美術館 館長・静岡県博物館協会 会長 宮治 昭                                                                           |
| 4  | 静岡県博物館協会 創立40周年記念講演会 講演録(抄)<br>これまでの博物館、これからの博物館 | 講師：向坂 鋼二 氏(元浜松市博物館長)<br>西 源二郎 氏(元東海大学海洋科学博物館長)<br>渡邊 妙子 氏(佐野美術館長)<br>司会：日比野 秀男 氏(常葉学園大学造形学部長・前常葉美術館長) |
| 12 | 美術館で働くということー共感の力を磨く                              | 常葉学園大学 教授 金原 宏行                                                                                       |
| 18 | 民俗博物館の展示を少し魅力的にするための一考察                          | フェルケール博物館 館長・学芸員 西野 和豊                                                                                |
| 24 | 原点回帰ーミュージズの館に戻りたい                                | 浜松市楽器博物館 館長 嶋 和彦                                                                                      |
| 30 | 博物館としての熱川バナナワニ園                                  | 熱川バナナワニ園 研究室 学芸員 清水 秀男                                                                                |
| 36 | 博物館の担えること                                        | 奇石博物館 管理本部長 荻原 美広                                                                                     |
| 40 | 公立個人顕彰美術館の今後について                                 | 熱海市立澤田政廣記念美術館 館長 相磯 浩                                                                                 |
| 46 | 今後の美術館・博物館の役割について                                | 上原仏教美術館 学芸員 田島 整                                                                                      |
| 52 | 平成20年度第3回講習会報告<br>博物館における「連携」                    | 常葉学園大学 造形学部長 日比野 秀男                                                                                   |
| 58 | 文政九年住吉浦唐船漂着に関する<br>県東部に残る新出資料について                | 三島市郷土資料館 学芸員 田中 之博                                                                                    |
| 64 | 静岡県博物館協会研究紀要目録                                   |                                                                                                       |
| 67 | 静岡県博物館協会年表                                       |                                                                                                       |
| 72 | 静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程                                |                                                                                                       |

### 編集・発行

静岡県博物館協会(事務局)  
〒422 8002 静岡市駿河区谷田 53 2  
静岡県立美術館  
電 話・054 263 5857 FAX・054 263 5742

### デザイン 有限会社サイズ

発行日 2010年(平成22年)3月31日  
印刷 星光社印刷株式会社

# 文化財の宝庫＜富士の国、静岡＞ ―静岡県博物館協会 40周年を迎えて―

静岡県立美術館 館長・静岡県博物館協会 会長 宮治 昭

静岡県博物館協会が創立 40周年を迎え、誠に喜ばしく思います。県内の歴史や文化・美術、あるいは動植物を含めた自然に関わる館園の地道な努力は、縁の下の力持ちとして県の文化活動に少なからぬ役割を果たしてきたと考えています。

年に数回の集まりであっても、地域セミナーや講習会、講演会、また役員会や総会を通して、ゆるやかなネットが形づくられ、さらには会報や研究紀要が発行され、県の多くの館園の様子がわかることは意義あることです。私は県博協の活動は、県の豊かな自然と文化を知り、守り育てる上での貴重な組織だと思っています。

静岡県は霊峰富士を中心に、風水の上からも景勝の地で、早くから人が住み、縄文・弥生・古墳時代の遺跡は数多い。弥生時代の登呂遺跡は有名ですが、近年、沼津からは日本最古級の古墳、辻畑古墳が発掘され注目を集めています。奈良・平安時代には多くの仏教寺院が建てられ、平安時代に遡る仏像も少なくありません。伊豆河津の南禅寺、湯ヶ島吉奈の善名寺、島田市千葉の智満寺、浜松市三ヶ日町の摩訶耶寺などに伝えられる木彫仏はその代表例です。

万葉の歌人山部赤人や『更級日記』の作者菅原孝標女、また平安末の歌人西行など、みなこの地を訪れ、富士に熱い思いを抱いて歌に文に記しているのは、駿河の風光に心惹かれてのことです。平安時代の美麗な装飾経として名高い『久能寺経』（国宝）を伝えた久能寺はかつて久能山にあり、壮大な伽藍を誇った天台宗の寺院でした。『久能寺経』は鳥羽上皇、待賢門院、美福門院に関わった平安時代屈指の美術品で、当時この地が京と深く結びついていたことを物語っています。

久能寺は山号を補陀落山といい、古くから観音霊場の地として栄えたのです。鉄舟寺観音堂に秘仏として伝わる木造千手観音像は行基作の伝承をもち、平安初期に遡る県下随一の古仏です。久能寺は現在の東照宮のある地に建てられ、隆盛を極めたのですが、武田信玄が今川氏を破ってこの地に城郭を築き、清水・矢部の妙音寺の地に移され、その後荒廃したものを明治初期に山岡鉄舟が再興して鉄舟寺とし、久能寺の寺宝が受け継がれています。

熱海の伊豆山神社も古い歴史をもちますが、源頼朝が挙兵する際に祈願したことは周知のとおりです。伊豆山神社に伝わる男神立像は、平安時代の特異な神像彫刻で、研究者の注目を集めている像です。頼朝は伊豆に流され、北条政子と結婚し、奥州に義経を降し、東国に鎌倉幕府を開きますが、そうした激動の歴史を秘めた仏像も残っています。葦山の願成就院の阿弥陀如来

像と不動三尊・毘沙門天像です。不動・毘沙門の像内から「文治 2年 5月に、時政が寄進し、作者が運慶である」旨の木札が出ており、政子の父北条時政が後白河院に圧力をかけて、義経追討の院宣を出させ、鎌倉に帰着した直後に当たります。果たして運慶自身も伊豆に来て造像したのかどうか議論のあるところですが、運慶の力溢れる造形が時政や東国武士に大層気に入られたことは間違いなくと思います。

富士市・瑞林寺の地藏菩薩坐像は、像内の墨書銘から運慶の父康慶の作になるものとみられ、日本彫刻史のうえで革新をもたらした康慶・運慶の造像を知る上で極めて重要なものです。このほか函南町桑原薬師堂の実慶銘阿弥陀三尊像、同じ実慶の修善寺町修禅寺の大日如来像、また運慶派の南伊豆町正善寺の大日如来像などが知られており、南都と東国を結ぶ慶派の優れた作品を多く有しています。

静岡県は日蓮ゆかりの地でもあり、県下には大きな日蓮宗寺院がいくつもあり、貴重な寺宝を伝えていますし、曹洞宗・臨済宗などの禅宗寺院も多いです。臨済宗中興の祖として名高い白隠禅師は沼津市原の出身で、三島に龍沢寺を開き、庶民とともに歩み、その軽妙洒脱な墨画は素晴らしく、海外でも高く評価されています。

思いつくまま、私の関心のある仏教を軸とした県内の文化財のごく一部を述べてみました。まだまだ未調査のものが埋もれているに相違ありません。静岡県は文化財の宝庫でありながら、その本格的な調査研究はこれからであり、その情報も残念ながら一般の方々にはあまり知られていません。県博協がこうした調査研究や保存修復、情報公開に向けて少しでも役立つことを願ってやみません。

静岡県博物館協会 創立 40周年記念講演会 講演録(抄)

これまでの博物館、これからの博物館

講師：向坂 銅二 氏（元浜松市博物館長）

西 源二郎 氏（元東海大学海洋科学博物館長）

渡邊 妙子 氏（佐野美術館長）

司会：日比野 秀男 氏（常葉学園大学造形学部長・前常葉美術館長）

日時：平成 21 年 10 月 16 日（金）午後 1 時 45 分～ 2 時 45 分

場所：静岡県立美術館 講堂

日比野氏（以下、敬称略）「まず自己紹介を兼ねて、本日の主旨をお話したいと思います。静岡県博物館協会の創立は昭和 44 年でありまして、私はもう少し後、昭和 48 年に県教育委員会に勤めまして、社会教育課あるいは文化課と言いましたが、文化財保護の仕事を担当し、昭和 55 年 3 月までしております。博物館関係の仕事も担当するということで、県博協の総会などに、最初のころ出た憶えがあります。また博物館登録の審査ということで、東の方は池田 20 世紀美術館、富士市立博物館、三島市郷土資料館、ビュッフェ美術館など、いくつかうかがったことがあり、建物を作るときにも関わりました。そのようなことで県内の博物館をずいぶん勉強させていただいたことを憶えています。それから昭和 55 年に静岡県立美術館の準備室ができまして、そこに 6 年勤めて、昭和 61 年に開館し、開館後 4 年勤めさせていただきました。ですからこの講堂の、それこそ椅子の座り具合とか、何席設けるかとか、収蔵庫、展示室すべてのことについて、工事の段階から、ここへはよく通いました。あとは、今日出席いただいた 3 人の先生方にも、昭和 48 年、49 年ごろから存じあげているということで、私が司会進行を担当させていただくことになりました。〈これまでの博物館、これからの博物館〉というテーマについては、今日の先生方は 40 年間前後、博物館関係で仕事をされてきたわけで、そういう方々のご意見をぜひお聞きたいということがひとつと、これから多様な変化の時代にあって、博物館はどうあるべきかとか、若い人にはこういうことを期待したいということなどお話しいただきたいという考えから、こういうタイトルを設けました。経験豊富な先生方ですので、たいへん勉強になるお話が聞けるのではないかと思います。ぜひよろしく願います。」

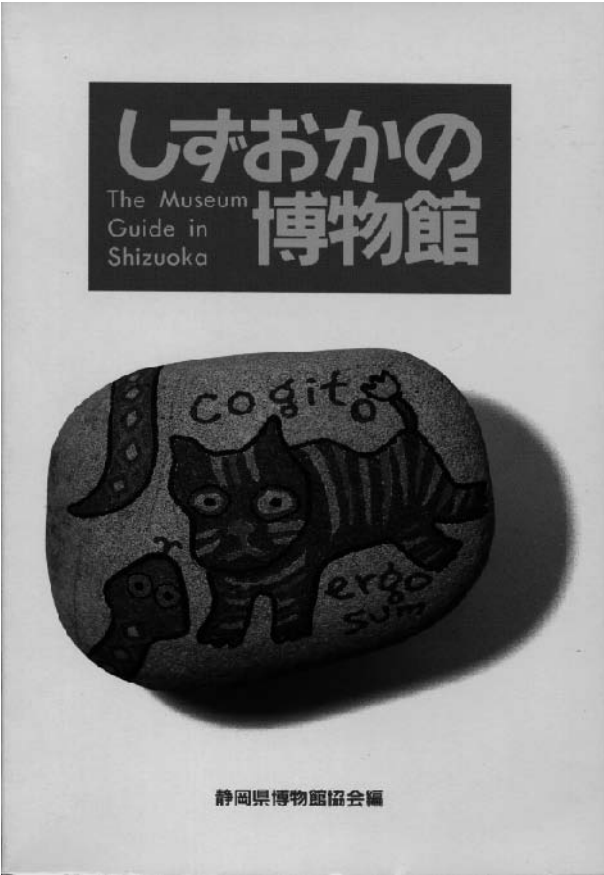
向坂氏（以下、敬称略）「私は浜松市博物館に長く勤め

ましたが、その前身として浜松城の中に、郷土博物館というのがあったのです。それができたのが、昭和 33 年 4 月で、私は 6 月からそこに勤めました。名前は郷土博物館でしたが、名ばかりでしてね、収蔵品としては蜷塚遺跡で発掘されたもの、それには私は学生で参加したのですが、そこで発掘されたものしかありませんでした。伊場遺跡という有名な遺跡がありますが、そこから戦後間もなく発掘された資料が若干図書館にありまして、その二つだけで、あと何もないものですから、あちこち探し回って、空の展示ケースを埋めるのに苦労した憶えがあります。そのころの博物館は、国立のものを除きますと、あんまり地方には博物館はございませんでした。民間のものはありまして、たぶん MOA 美術館さんが、そのころは熱海美術館（のち救世熱海美術館）と言ってたと思いますが、それが前年にできていました。浜松というところは、自己主張の強い街でして、登録博物館にするんだというんですね。MOA 美術館が第 1 号で、私の勤めた浜松市立の郷土博物館は第 2 号なんですよ。そのためには資料がある程度なければいけませんので、一生懸命集めて、とにかくスタートして、かろうじて登録博物館になった記憶があります。つまり、博物館のいわば創生期ですかね。公立ですと、浜松ができる前は、今の登呂博物館の前身であった静岡考古館、磐田の見附学校を利用した磐田市立郷土館というのがあっただけで、公立の歴史系博物館はありませんでしたね。

我々は、今もそうですが、博物館学という学芸員になるための勉強をします。そこで、博物館は社会教育機関であるということを叩き込まれたんですね。でも当時の社会では、博物館というものの認知度はほとんどございませんでして、博物館ってどこにあるんだとか、博物館って何だ、というようなことでございました。博物館の存在感はあまり

なかった頃ですね。ですから、博物館というのができたんだ、博物館とはこういうものなのだとアピールすることから始めましたね。展覧会やるにも、資料がないですから、市のトラックに箱を積んで、箱根を越えて、昔の東海道を走ってですね、東京まで借りに行った記憶があります。当時は自分で梱包しまして、自分で箱に入れて運んで来たものです。今は美術梱包の専門家や専門の業者がいて運んでくれるのですが、そのころは自分でやりました。蜷塚遺跡はそのころ史跡になっていましたが、その草取りから、トイレのお掃除まで、全部、学芸員の仕事でした。ですから学芸員とは言わずに、雑芸員と言った時代でしたね。

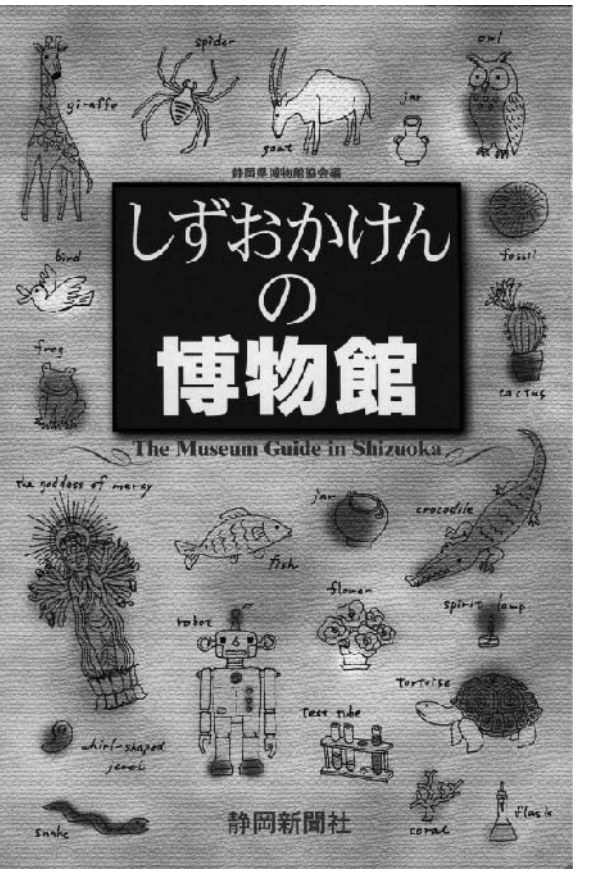
この県博協に関わるようになったのは、それからしばらくしたころでした。そのころ久能山東照宮さんが中心になっていました。そこから話があって、県の協会を作ることになりました。私もその一環として参加しまして、それなりに努力はさせてもらった記憶があります。今、私の手元に「静岡の博物館」13 号（創立 15 周年記念号）があります。これは私が編集をさせていただいたものですが、それを見ますと、設立当初の加盟館は 10 館程度で、年間



「しずおかけんの博物館」 1987(昭和 62)年発行

予算が 46,500 円でした。県の補助金が 3,000 円、寄付金が 23,500 円、会費が一館 2,000 円でやっていたんだと思いますね。その後、この会がだんだんと発展して、今はおよそ 70 館ということですね。当時、私は微力でしたし、若かったのですが、今思えば、たいへんだったけど、良き時代だったかなという感じでおります。」

渡邊氏（以下、敬称略）「今、向坂先生から、登録博物館は 1 番目が熱海美術館、今の MOA 美術館で、2 番目が浜松郷土博物館というお話がありました。3 番目が久能山東照宮博物館、そして 4 番目が佐野美術館です。昭和 41 年 8 月に登録されました。美術館としては草分けだったかなと思います。私も佐野美術館に勤めまして、向坂先生と同じように美術館というのは社会教育機関であると、さんざん教え込まれたんですけど、美術館がオープンしまして、人はまったく来ません。一日 10 人来ればいいほうという時代でした。それでどうしたら美術館の認知度を高められるかなと思ひまして、街の中に出まして、三島の本町の交差点で市民の意識調査をいたしました。日本博物館協会大会でその結果を発表したことを憶えています、



「しずおかけんの博物館」(改訂版) 1999(平成 11)年発行



1,000人ぐらいの調査をしました。そのときに、美術館はあるといいねと言うので、では美術館に行きますかと質問をしますと、今はとにかく衣食住に忙しい、生活に忙しい、だからいつか美術館に行かれるといいねという気分でした。美術館というものの存在は、はるかかなたにある希望のような形で、日夜、生活にひたすら働いているというのが、日本人の全体的な感じではなかったでしょうか。その後、うん十年、静岡県博物館協会も地下水脈のように、地味だけど脈々と力をつけてきたのではないのでしょうか。

静岡県博物館協会ができるときは、私も久能山の方や向坂さんたちと一緒に頑張ったんですが、昭和 44年に静岡県の文化施設をみんなで手分けして調べました。そのときに 32館ぐらいすでにあるんですね。加盟館園は 10館程度でしたが。民間の中に、一生懸命、こういう施設が必要だということでひたすら努力している県民がいたということだと思うのです。ですから、あげられていないところでも、50館弱ぐらい、小さな郷土館とか小さな市民の歴史的なものを集めているとか、いろんな館がありまして、そういうところで地道に長い間続けてきたという県民の意識が、根に深くあったと思うのですね。それが静岡県博物館協会にまとまってきたと思います。

佐野美術館は昭和 41年に創立しまして、それから約 14 5年の間は、1年間平均して一日入場者数 50人前後でした。ですから市民の関心というのは、その程度だったと思うのですね。昭和 54年から、年間 300日ぐらい開館して、一日平均、一拳に 300人ぐらい急に入るようになったんですね。日本中が高度経済成長の波に乗り出して、県民の方たちが精神的にも高揚し、新しいものを求め、衣食住以外に生活の中に何かひとつ求めたいという気力が非常に起きた時代だと思います。それが 10数年経きましたが、平成 6年ぐらいから、足並みが少なくなりまして、200人前後に減ってきます。現在もそれがずっと続いているところですよ。ですから昭和 40年代にずっと低調だったのが、50年代中ごろから急に成長し、ずっと高どまりだったのですが、バブルがはじけてから伸び悩むというのが、だいたい静岡県内の博物館に共通したことだと思います。今は、全国的に博物館の入場者が東京に集中しておりまして、県内がちょっと入場者が落ちている社会的なひとつの現象だと思います。これから後のことは、私たちが大いに考えなければいけないことだと思います。

全国の博物館の関係者が集まって、ディスカッションしたときに、博物館には第 1世代、第 2世代、第 3世代というのがあるという話がありました。第 1世代はまずコレクションすること、第 2世代はそれを整理すること、第 3世代は企画し、そこに市民が参加することだ。本来、将来的に博物館は、市民が参加しいろいろな企画をして活動する。それが博物館の目標だということを、口角泡を飛ばして議論したことがありました。それを眺めてみますと、全体的な流れですけど、コレクションの時代は終わり、整理する時代は私たちにはほとんど与えられなかったけど、第 3世代の時代に現在、突入しているのではないかと。そこに私たちや県民に課せられたひとつの課題があるのではないかと思います。」

**西氏**（以下、敬称略）「博物館協会ができた昭和 44年には、まだ私が勤めた東海大学海洋科学博物館はございませんでした。昭和 45年 5月にできました。それでそれを作るのだというので、海洋生物の飼育の経験者を何人か集めました。私はそれまでは九州の大分のマリンパレスというところに勤めてまして、こちらに来て水族館の開館をするということになりました。聞いてみると、東海大学はその当時、準備しているときにまだどういう名前にするか決めてなかった。「なんとか水族館」になるかもしれないし、「水族博物館」という名前になるかもしれないということだったのですが、最終的には「海洋科学博物館」になりました。実態は、市民の方には三保の水族館とに呼んでもらっていて、そういうふうに感じていただいているんですけど、名前は博物館という名前がつけました。それで学芸員ということと関連してくるわけです。

私は、学芸員の資格を大分のマリンパレスに行ってから取りました。それまでは全然知らなくて、もともとは水産学部の出ですから、美術だとか考古だとかはまったくわからなくて、博物館と水族館は別の世界だと思ってたんですね。マリンパレスに勤めたときに、いろんな水族館の活動の資料を見ていたら、後ろに、「博物館研究」をコピーした学芸員の問題集というのが載っていたんですね。それで学芸員の存在を知ったというようなことで、自分で少し調べて、試験を受けに行って、やっと受かったときに、こちらへ来ることになりました。それで、始めてみたら、博物館という名前になったよと言われ、しばらくしたら学芸員の資格を持っている者はいるのかと聞かれ、私は持っていたものですから、それから博物館の世界と関わるようになりました。

昭和 49年に、日本博物館協会の全国大会を静岡県でやることになりました。当時、久能山東照宮に勤めておられた森さんという学芸員の方が中心になって、そのときに大先輩ともお目にかかって、お知り合いになって、県下から何人か集まって数日かかって準備したことを、よく憶えています。そういうことが後々の静岡県の博物館の活動に非常にプラスになったのではないかと思います。たいへんだったけど、みなさんとお知り合いになれたし、気心がわかって、いろんなことで助けてもらえるようになったという気がしております。そのあと、静岡県博物館協会の仕事を少しお手伝いさせていただきました。当時は編集委員会と事業活動委員会とか、いくつかの委員会があり、その中に「静岡の博物館」という冊子を出す仕事があったりしました。そのうちに私は、大学で博物館学を学生に話すようになりまして、博物館実習で県内のいろんな博物館を見学させていただくということで、沼津の歴史民俗資料館さんとか、裾野の富士山資料館さんとか奇石博物館さんとか、浜松の美術館、博物館、島田の博物館とか、もちろん近くの登呂の博物館とか、各地の博物館を見せていただくことで、全般的にいろんなことを教えていただくことができて、非常によかったなと思っております。

私が勤め始めたころ、当時、全国に水族館が 30いくつだったと思います。それが今、70ぐらいになっています。海洋科学博物館ができたとき、当時、世界一だと言って、深さが 6mの大水槽を持った博物館ができたわけですけど、非常に大勢の方が来て下さいました。さきほど佐野美術館さんは時代が経るに従って増えたという話なんですけど、水族館はわりあい最初からたくさん人が入って、そのあと少し減ってくるという形で、1970年から 90年までは年間 50万人から 60万人が来て下さいました。90年代に全国に大きな水族館ができるようになりまして、この近くですと名古屋港の水族館ですとか、東京の葛西の水族館ですとか、あるいは鳥羽の水族館というのができて、90年度半ばぐらいになると、東海大学の水族館は小さいけれど特徴のある水族館と言われるようになりました。また、水族館ができるときに、テレビのいろんな局が特別番組を組むようになってきたということで、水族館の存在が世の中で非常に大きくなってきたなど、感じております。

40年勤めていて、強く感じるのは、水族館や博物館の存在が世の中で大きくなっているのではないかとということ

す。学芸員という職種を説明するのに、昔はずいぶん苦労したと思うんですけど、最近はテレビのドラマでも学芸員役の人がでてきたりして、世の中に徐々にではありますが、浸透してきたんじゃないかなという気がしております。」

**日比野**「静岡県博物館協会の歴史で付け加えますと、『静岡県の名宝展』というのが、この静岡県立美術館で開催されました。それが平成元年でした。県博物館協会の 20周年記念ということで開催しました。それから日本博物館協会の全国大会の話が出ましたが、これは全国の博物館関係者が 300人ぐらい集まる非常に大きな大会です。今の静岡市役所のあたりにあった県民会館を使いまして、開催したのが昭和 49年です。みんな手弁当で協力して開催しました。また日本博物館協会の全国大会をもう一度、熱海のMOA美術館で開催しましたのが、昭和 60年でした。各地の博物館、美術館、資料館は、昭和 50年代、60年代に多くできて、最近は新しくできる施設が少なくなったというところが現状だろうと思います。



「静岡県の名宝」展図録 1989(平成元年)開催

先ほど、佐野美術館と東海大学海洋科学博物館の入館者の状況という話がでしたが、いつの時代もこのような成長と停滞があると思うわけですが、佐野美術館は何回かの改築をされて、新鮮さを保ち続けられたと思います。」  
**渡邊**「常に変転するというか、そうしてきたように今思います。例えば、昭和 41年に三島市は 6万ぐらいの人口で、今は 113,000人ぐらいですから倍近くなっています。当初、市庁舎は空調がありませんでした。県内の建物で空調のあるところは、ほとんどなかったです。したがって佐野美術館も空調設備がありませんでした。今、博物館で空調設

備のないなんていうのは考えられないのですが、その当時はないのが当たり前でした。暑いとき寒いときは、休めばいいということで閉館でした。季節のいい春と秋だけ開けばいいという状況でした。今も、一年に 2、3 月開けばいいというところがありますが、これは博物館法によって年間 150 日最低開けばいいという考え方によるものなんです。倉田公裕さんという、ICOM（国際博物館会議）の正会員、当時、日本に一人しかいなかった方ですが、その方が縁がありまして、博物館というのはコレクターのためにあるのではなくて、市民の社会教育機関として充足するのが、学芸員の使命であると、頭から教え込まれました。市民は夏も冬も見たいじゃないかと。そこで、オーナーに夏も冬も開けましょと進言したんですね。オーナーはあんたのいいようにしなさいと言うので、それじゃあ開きますと言ったのですが、苦勞するのはこちらの方でして、学芸員の人手も足りないなかで、展覧会をそれだけまわしていくというのは、並大抵じゃないんで、自分で墓穴を掘ったようなものですが、苦勞しました。真夏の暑いときには、建物は空調がはいっていないのでお客さんが困るので、みんなに団扇を一人ひとずつ渡したり、どうしたらいいかと、ひたすら庭に水をまいたり、つまらない苦勞を重ねました。いよいよ 15 周年ぐらいに、建物を改築しなければいけないとなりまして、そのときの三島市長とかけあって、市から特別な寄付金をいただきまして、空調を入れるということをしました。財団法人に公的な機関からお金を入れるというのは、日本中にないそうで、あんたは無謀だとよく言われまして、今も三島市から補助金をいただいて企画しておりますが。それからその後、どうしても展示室のガラスと照明がうまくないものですから、東山魁夷展のときを機会にして、展示室を一部改造しました。それは非常にユニークな展示室になっておりまして、今はだいたいガラスがはめ殺しになるというのが当たり前のようですが、はめごろしは保安上はとてみいいのですが、実は展示にはあのぐらい使いにくいものはないですね。一番使いやすいケースは何かと言うと、全部、壁面ガラスケースはなくなって、広場になってしまうのが一番展示しやすいので、そういうふうにするにはどうすればいいのかと業者と一緒に考えまして、壁面ケースのガラスが全部収納してしまう方法を考えて、今もそれを使っています。展示はものすごく楽です。

そのあと、35 周年のときにも、もろもろの改築をしました。

改築をするたびに、いろんなところからお金を集めておりまして、今迄何をしてきたかと思いましたが、私はひたすらお金集めをしてきたような気がしております。博物館はいろんなことで変わるということはいいいことだと思っております。」

**日比野**「お金集めをするということは、お金を出した人の支援、連携、認識も高まるわけで、ただの金額だけではなくて関心の度合いも高まってくる両面が大きいのではないかと思います。

さて今度は、これから博物館はどうあるべきか、若い学芸員の人たちに期待することなどのお話をお聞きたいと思います。たいへんな時代はいつの時代でもあるわけで、過去の経験が新しい時代に活用、応用できるのではないかと思います。そういう観点から、お感じになっていることをお願いできますでしょうか。」

**西**「これからの博物館について語ることは、非常に難しいですね。どうすればいいかということは、私にもよくわかりません。ただ若い学芸員の人に何かをというので、少し思ったのは、ある美術館の館長が、学芸員に必要ないくつかの資質というのを書いておられるなかに、パーティー好きであれ、人との付き合いが大事だということを書いてありました。私もあまり嫌いな方ではないので、県の博物館の方いろいろ飲みにケーションをさせていただいたりして、知り合いになることができました。ところが、どうも最近の若い人は、そういう人付き合いがあまりお上手ではないのではないかという気がいたしますので、それは学芸員に限ったことではないのですが、どうしても学芸員は自分の専門分野の中で狭い視野になってしまうので。

私は水族館、動物園、自然史博物館のほうに関係しているわけですけど、これからは、自然、野生生物の保存ということが非常に重要になってきます。我々のところでは魚の繁殖ということにかなり力を入れてきたのですが、そういうことが今後、ますます重要になってくるだろうと思います。ちょっと文系の博物館とは違った一面があって、どうしても自然から資料を運び入れるということが必要になってきますので、それがいつまでも許されるわけではないので、自分たちで必要な生き物、資料を増やしていく、そういう努力が必要なんじゃないかと思います。」

**渡邊**「今の西さんのお話はものすごく興味のあるお話ですね。今、佐野美術館で、静岡県富士市出身の井上恒也が描いた作品を展示しております。井上さんは、東南ア

ジアに行って、絶滅危惧種の動物の絵を描いていますが、それを展示しています。お客さんが、これ何と言って、絶滅危惧種に対してすごい関心を持っているんですね。それで思いました。美術館はその作品を美術的なものとして展示しているのですが、これが生物学的にはこういう面があるんだと、もう少し説明をして総合的な解釈、解説が美術館でも行われる必要があるなど。ほんとうにかわいい動物や鳥なんかをいっぱい描いてあって、でもこれは地球上からもうなくなっちゃうんだというので、一生懸命描いているのですが、自然科学と連携して展示していくと、もっと真に迫ってくるのではないかと思います。

話は変わりますが、佐野美術館は公立館とは違っていて、自活していかなければならないものですから、市民との連携を非常に大切にいたしております。入場者数を気にします。展覧会が終わりますと、その収支計算をしまして、そのプラスマイナスを職員全体に意識を喚起して、より潤沢に美術館の収入を増やすように、一人ひとりがよく認識している館で、今日は 3 人も表彰されました。そういうなかで、長く一生懸命働いている幸せな職員たちに私も恵まれております。

平成 16 年ぐらいでしたが、本当にこれから美術館はどうしたらいいのかと、私は頭の毛が抜けてしまうぐらい悩んだことがあります。そのときに、いくら美術館が内部で悩んでいても解決はできないんですね。それで外部の人の意見を聞こうということで、静岡にあります市民の意識調査をしているところに、なけなしの金を大枚払いまして、市民は一体何を求め、どういうものを美術館に期待しているのかという調査を約 1 年かけて、したことがあります。それで調査書が上がってまいりました。そうしますと、非常に市民の目というのは美術館に対して温かいんですね。一番の要求は、自分たちよりはるかに高い所に美術館の意識があるから、自分たちじゃ、ちょっと気おくれをしてしまう。自分たちの美術館になれるようになってほしいなという、市民の意識でした。それでは、もう少し、美術館と市民と、町と美術館の意識が自由に行きかうような形はどういう方法があるのかと、色々と工夫をいたしました。

それよりも少し前からですが、私どもミュージークラブという 500 人ぐらいの会があって、美術館の支援団体ですが、その中の人たちがいろんな意見を寄せてくれるし、お金も出すし、文句も言うという会なのですが、その中から、

中学校、高校の子どもたちが美術館に来るのが少ない。小学校は親が連れてくる場合がありますが、中学校、高校は連れてこないし、親の言うことも聞かなくなる。それをどうやったら、美術館はおらっちの庭よと思うようになるかということで、美術館と高校の PTA と提携しまして、PTA の方から前もって支払っていただいて、その代わり、高校生とその父兄は学生証でフリーパスにいたしました。で、だいぶ高校生が増えました。今、高校との提携が 11 校ぐらい、大学は日大と提携しておりますが、南は田方郡、北は裾野あたりまで学校が広がっています。それはかれこれ 10 年近くたちまして、ひとつ実ってきたかなという感じがいたします。

市民も自分の街を歩くと同じように、美術館も歩いて、街の中のせせらぎ、三島はせせらぎ事業で経済産業省の表彰を受けたようですが、そのせせらぎの流れと美術館もいっしょに散策して楽しんで、時にはちょっとお金払って美術館の中を見ていこうというような、街に一体化することの努力を進めています。展示の工夫の中において、専門家が見る立場ではなくて、むしろ展示品はそれなりの品格の高いものを展示しなければならないですけども、それを見る側が、いろんな形で、いろんな意識で、それを見ることができるような仕掛けをするということだと思います。今、毎回、学芸員は非常に頭を悩まして、苦勞しておりますけども、苦勞すると、苦勞するなりに、市民が答える。市民というのは、この地域の市民が、おらっちの街の誇らしい施設という意識を高めていくということもありますけども、旅行者なり、遠くからの来館者も増やす。非常に難しいことではありますが、いろいろな仕掛けを常にしていくことが、これから求められる、それが企画だと思います。企画を面白くするには、他の館にはない、特別なものの展示方法とか、佐野美術館だから佐野美術館らしいというような、特化したもの、特徴を持つ。そして館から帰るときには、一人ひとりが満足度を高めて帰る、それが次の顧客に結び付く。そういう非常に手間のかかることですけれど、それがこれからは必要かなと思っております。」

**向坂**「最近、あちこち回りますと、たいがいこの町にも、なんとか資料館とか、なんとか記念館とかありまして、看板もよく見かけますから、ひところの、我々の創生期のころの博物館とは違って、その存在は認知されてきていると思いますね。ですが、認知されているわりに、あまり入っていな

いということでした。私は公立の博物館の仕事をしておりましたので、今の渡邊さんの話はすごく参考になりまして、公立の博物館は、民間の手法をうんと勉強する必要はあるなど痛感しました。公立の博物館の場合、予算は大幅に削減されているようです。私が勤めていたころよりも、うんと減っているようですね。

それから最近博物館へ行きますと、何かしらやっていますね、毎月、展示だけではなく、催し物も多い。休んでいるときは展示替えのときぐらいで。ずいぶんたいへんだなと思います。私は、一体そういう展覧会をやるための勉強は学芸員さん、どうやっているのかと気になるぐらいです。それは入館者をうんと重視しているということもあるようです。その点は民営も同じでしょうけど。それから、さらにそこに加えて再編の動きがあるようで、大阪の知事は、博物館を減らそうとしていますね。浜松は博物館施設がいっぱいあるんですね。それを整理統合しようとする動きも一方にあるようです。そういう動きがあるのなら、それが避けられないとするなら、それを大いに逆手に取るようなかたちを考えなければいかんと。じゃあ、どうすればいいかというと、渡邊さんのご意見などを、大いに参考にしたらどうかなと思いました。」

**日比野**「今、お聞きしております、大きな言葉でいえば、連携ということがひとつのキーポイントになってくると思います。西さんがおっしゃったパーティー好きの人間というのは、連携を開拓していくのに適切な学芸員像でありますし、中学校、高校の後援会などと提携してパスを出すというのも、ひとつの連携ということになってくるかと思います。将来的には、大きなテーマは、連携、コラボレーションかと思います。それからもう一つは、専門家の目ではない、顧客満足度と言いますか、そういう視点から博物館を運営していくということを、かなり考えていかなければならない。おそらく 40 年前には学芸員の数も限られた人数でした。博物館も限られた数で、現在は当時から比べれば、何倍かの学芸員の人 が働いているのではないかと思います。そういう意味で言えば、博物館界は発展してきていることは確かであると思います。ただ、浜松市の博物館が、14館ほどあると思いますが、合併して、職員が兼務ということで減らされて、例えば静岡県博物館協会の会費も減って、収入が減ってきてしまうということもあります。

大きな展覧会が、東京、京都、大阪でやると大勢の人

が入るという一面と、通奏低音のように、全国の博物館でも着実に入館者がいるという面も、博物館界には求められているわけです。ひとつは地道に、なおかつ活発化という意味で発展をしていくことが必要ではないかなと思います。」  
**会場から**「文化財を守るために、県立博物館をぜひ造ってほしいと思います。また、博物館のハブ化というのか、大きなところに一つ作って、そこからいろんなところへ情報とか、連携プレイ、ネットワークができるような、キーステーションができればいいかと思います。」

**渡邊**「県立博物館を作るかどうかは、何十年も課題になっております。私は沼津におりまして、教育委員会にも絡んでいるのですが、沼津でも考古史料がいっぱいあって、展示する場所がないというから、小学校の空き教室がいっぱいあるじゃないかと、そこにちゃんと集めて、それは今の博物館のように空調などはないけど、考古史料は空調なしでいけないわけではないから、とにかく集めて、そこで小さいながらの博物館活動を個々にやったらいいという話をよくするんです。ちゃんと博物館施設ができなければ、ものが集まらないとか、すべてができないという考え方は、現代人の頭がちょっと固いんじゃないかと。その地方で、博物館協会ができる前から、すでに地方でいっぱいそういうのがあったんですね。だから、そういうものを集めて、小さいながら、博物館活動を続けたいと思うのです。それから県史編纂のときのものすごい資料があるんですね。今は県立図書館にあるようですけども。そういうのも県立図書館でときどき公開して見せることも必要ですし、そこにとにかく集めて保管する。保管するということは、いろんな方法ができると思うのですけど。」

**日比野**「シェルター、収蔵庫という件については、県会議員の先生方でおっしゃっていらっしゃる方もおられますので、今後、そういう話題が出てくるかもしれません。もうひとつはハブ化ということで行くと、中央集権というか、大きい所に集まって、地方の地域の小さい所は吸収されてしまうということは避けなければならない、そういう問題はあるのではないかと思います。県の博物館協会でも、当面は県内の博物館のセンターと言いますか、災害時の中心的な役割を担っていくわけであります。現在でも毎年、講習会や研修会をしております。ちょうど、もうお時間がなくなりましたので、このへんで終わりたいと思います。どうも本日は、ありがとうございました。」

(参考)

## 静岡県内博物館設立年代（抄）

昭和5（1930）  
昭和16（1941）  
昭和32（1957）1 . 2  
昭和33（1958）  
昭和33（1958）9.22  
昭和38（1963）1.15  
昭和40（1965）3.31  
昭和41（1966）11.10  
昭和41（1966）3.20  
昭和43（1968）7.1  
昭和45（1970）5.2  
昭和46（1971）6.1  
昭和47（1972）4.1  
昭和48（1973）5.3  
昭和48（1973）11.25  
昭和49（1974）  
昭和50（1975）5.1  
昭和50（1975）  
昭和51（1976）  
昭和52（1977）3.25  
昭和53（1978）5.8  
昭和53（1978）7.20  
昭和54（1979）4  
昭和56（1981）4.25  
昭和56（1981）6.15  
昭和57（1982）1.11  
昭和59（1983）10.1  
昭和59（1983）11.3  
昭和60（1984）6  
昭和61（1986）4.19  
昭和62（1987）11.2  
平成元（1989）  
平成4（1992）5.2  
平成6（1994）9.24  
平成10（1998）4  
平成10（1998）

中ノ島水族館開業（→伊豆三津シーパラダイス）  
三津水族館完成（駿豆鉄道の経営となる）  
世界救世教熱海美術館（現MOA美術館）開館  
浜松市立郷土博物館開館  
熱川バナナワニ園開館  
淡島海洋公園水族館開館（→あわしまリンプーク）  
久能山東照宮博物館開館  
佐野美術館開館  
下田海中水族館開館  
戸田村立造船郷土資料館開館  
東海大学海洋博物館・自然史博物館開館  
浜松市美術館開館  
静岡市立登呂遺跡博物館開館  
富士美術館開館  
ビューフェ美術館開館  
沼津市歴史民俗資料館開館  
池田20世紀美術館開館  
浜松市立伊場遺跡資料館開館  
新居町関所資料館開館  
常葉美術館開館  
裾野市立富士山資料館開館  
清水港湾資料館（フェルケール博物館）開館  
浜松市博物館開館  
富士市立博物館開館  
芹沢銈介美術館開館  
MOA美術館開館  
沼津市明治史料館開館  
浜松市立賀茂真淵資料館開館  
焼津市立歴史民俗資料館開館  
静岡県立美術館開館  
藤枝市郷土博物館開館  
平野美術館開館  
島田市博物館開館  
由比町立広重美術館開館  
掛川市二の丸美術館開館  
天竜市立秋野不矩美術館開館

（平成21年10月16日 作成：常葉学園大学 日比野秀男氏）

# 美術館で働くということー共感の力を磨く

常葉学園大学 教授 金原 宏行

## はじめに

美術館や博物館は、館という施設（ハコ）の中に美術館・博物館資料（モノ）があるところで、そこは組織（ヒトとヒト）があって、開催される展覧会は、そこの属する学芸員によって担われている。その活動の要諦は、モノと市民（ヒトビト）を如何に結びつけるかにあろう。

そして、その目的は、よき観衆を作ることによって、現代の社会生活を如何に生きていくか、ということを考えさせるところにあるのではなからうか。

具体的には優れた資料・作品の系統的な収集・保管と、それを展示公開（展覧会）する場所であり、そのためには調査研究が活動の根幹に据えられていなければならない。それゆえ学芸員は、展覧会によって独自の問題提起をしながら、県民・市民に愛される場にしていきたい。こんな志を持って毎日の仕事をこなしていることと思う。

そうした活動に対して多くの市民が価値を認めてくれると、その存在意義も高まり、美術館（以下博物館を含めたミュージアムのこと）は、教育機関、施設であるという枠を超えた生涯教育の場所として、「美しく生活してみよう」と皆が集うことともなり、美を自分なりに求めて体得し、自らの生活に少しずつ肉付けしていくきっかけの場となるであろう。

ここ何年かは日本経済の構造的な経済不況もあって、美術館はどこも元気がないといわれるが、多数の優秀な学芸員が育っており、地域の総合的な文化力を蓄積し、発揮することが出来る装置となりつつある。

それゆえ、モンドリアンがいったように「人が美しく生活できさえすれば、絵画や芸術はいらない」のであるけれども、今そうないないのであるから、これからの美術館活動がますます期待されるのである。

以下、内田六郎氏とともに働いた4年間を中心に、創設されたばかりの浜松市美術館の初期活動をスケッチしながら回顧し、美術館のあり方についても考えていることを綴ってみよう。

## （Ⅰ）内田氏と出会いー共感の力を磨く

私が内田六郎氏（明治25年ー昭和49年、以下敬称を略す）に薫陶を受けたのは、昭和46年4月から同49年9月までの4年あまりで、内田は名誉館長として週に1回、館に来られ、いろいろな問題の相談乗っていただいた。

市制80周年を記念して1971年（昭和46）創設された美術館の開館記念展は「五島美術館名品展」であった。五島美術館竹内順一学芸員（現永青文庫、松本市美術館館長）によって展示の實際を教えられ、美術館の空調や保存については東京国立文化財研究所（現東京文化財研究所）の指導を受けたりした。《紫式部日記絵巻》（重文）がポスターに使われ、多数の名品が出品された。設立に当って浜松市美は、市民からの寄付を受けており、市民の作った県内最初の公立美術館ということであったが、照明や空調設備などの備えるべき施設（ファシリティ）について不十分なところもあった。

私自身は、新設の美術館で働けることは楽しく、日本の国宝や重要文化財などの指定文化財を實際に展示できる喜びは大きかった。それまでは自らの生活実態と離れたところにあるものを勉強しているようで、研究が地に付いていなかったからである。

開館当初、浜松市内頭陀寺にあって民間に流失していた13世紀の刺繍《不動明王二童子像》（国指定重要文化財）を購入し、修復して保存することになった。この時、市文化財保護委員長でもあった内田六郎は、広い視野から、専門的な見識を示され、毎週のようにいろいろと話をしてくださった。自らの体験にもとづくアドバイスは貴重なもので、美術館で働くのに必要な実際的な行動指針を得ることが出来た。

後に述べるように内田は若き頃から柳宗悦の薫陶を得ており、79歳の高齢ながら、若いころからの美術に対する情熱は少しも失われておらず、諄々として説かれる話は説得力があった。それらを貰っていたものは、突き詰めて言

えば、創造性のある美術作品を扱うに当っては、学芸員はクリエイター（美術家など）以上に創造性（クリエイティヴィティ）を持つ心構えにより、常に努力を惜しんではいけないということにあった。こうしたことから、学芸員としては、まず展示する作品研究が大事であり、美術館・博物館という現場の中に研究のモチーフを見出すべきではないかと思うようになった。

内田は、1892年（明治25）に榛原郡吉田村（現吉田町）に代々の造り酒屋、川本曾一郎、くらの6人兄弟の3男（末っ子）に生まれた。川本家が新たにはじめた銀行業が失敗し、姉しずの下へ引き取られるなど、労苦を重ねたけれども、幼少期から負けん気が強く、勉学に励み、1911年（明治44）に榛原中学校を卒業、第八高等学校（現名古屋大学教養学部）を経て、京都帝国大学医学部に進学。在学中の1917年（大正6）に浜松市内の内田令太郎の娘照子と結婚、婿養子となった。義母である内田みつは、大正11年から田町で産婦人科病院を開業し、遠州における最初の女医・産婦人科医として、「おみつさん」といえば、市内では知らないものがない女性であったという。

1919年（大正8）京大医学部を卒業したが、その間、第八高等学校では蓮の研究で名高い教授大賀一郎博士（岡山県出身）や内村鑑三の無教会主義にも影響を受け、また同じ医学の研究者で伊東市湯川出身の木下杢太郎（本名太田正雄）に私淑する（注1）。木下は、森鷗外の弟子で、最晩年に『百花譜』を著した自然科学、芸術、文芸に通じた偉大なるアウトサイダーであった。

（注1）木下は、1916年（大正5）、満州奉天の南満医学堂教授兼奉天病院皮膚科部長となり、かたわら地を利して中国美術を研究した。1920年、教授を辞し、木村莊八と朝鮮、雲崗を調査し、1921年には皮膚科学研究のためヨーロッパに留学、1924年（大正13）にパリを立ってスペイン、ポルトガルに赴き、日本キリシタン関係の文献を調査している。マルセーユから帰国した1924年、愛知医科大学（名古屋大学医学部）、1926年（大正15）には東北帝国大学、1937年（昭和12）東京帝国大学の教壇

に立ち教授を歴任。1908年（明治41）、吉井勇、北原白秋らと「パンの会」を起こし、戯曲「南蛮寺門前」（明治42年）、「天草四郎」（大正3年）を発表するなど当時の南蛮趣味を代表した。

このため内田は、そのキリシタン史を中心とする木下の該博な研究や翻訳に啓発されることが大きく、また大正14年には、黒田源次博士の『西洋の影響を受けた日本画』（大正13年）を読んで、日本のキリスト教の流入にかかわる初期洋画（洋風画）には特に興味を持ち、研究に勤んで収集に生かしていく。

一方、内田は、大学を卒業後、作家の書簡や自伝を集め（紅日書楼文庫として、浜松市立中央図書館に寄贈）、昭和8年からは「層雲」の荻原井泉水に師事して、浜松で「松の会」を主宰し、自由律句を作っている。「うしろすがたの しぐれていくか」で知られる天衣無縫の俳人種田山頭火が、戦後内田の元城町の病院を2度訪ねてきたこともあった。私は、当時の内田の「歩いて歩いて ポストの口」という無季の句を思い出す。

## （2）内田と柳宗悦・池長孟との出会い

1927年（昭和2）、柳宗悦（1889ー1961）が民芸の話をするために浜松に招かれ、座談会が持たれると内田も参加した。内田は30代後半であった。翌日、柳を遠州有玉（当時浜名郡積志村）の素封家高林兵衛（1892ー1950）邸に案内している。高林は、内田と同年生まれであり、時計や新聞の収集家で、後に和時計約120点は東京国立科学博物館に永久寄託され、新聞は東大の新聞研究所に寄付しており、中国の仏像、日本の大津絵なども集めていた。

高林兵衛の父は、高林維兵衛といい、実業家であり、有名な国学者高林方朗が第9代に当る名家である。こうして内田は高林とともに、次第に民芸の魅力に強く牽かれていく。

柳は木喰調査のため、紀州を旅していた1926年（大正15）、高野山で河井寛次郎、浜田庄司と3人で民衆の工芸を民芸と名づけ、全国に民芸の普及活動を展開していた。この運動に共感し、熱心な支持者となった高林は、1928年（昭和3）、東京・上野公園で行なわれた御大礼記念国産振興博覧会に柳が設計し、出展して好評を博



した「民芸館」の建築施工を担当し、遠州の大工や瓦職人を派遣した。好評を博したこの和風の建物は、その博覧会后、大阪の実業家山本為三郎が購入し、自宅の家に移築、「三国荘」と称した。今度の大戦の空襲で、この建物は失われたが、博覧会で、これを見た大原孫三郎が、後に民芸運動に協力し、支持するきっかけとなり、1935年（昭和10）には、大原が東京・駒場に建てる日本民藝館の建設費用を寄贈する。

1929年（昭和4）、柳は東京帝室博物館に、自らの収集品の寄贈申し入れ、民芸の常設展示室を設置してもらいたいという提案を行なったが、博物館側がこれを断った。そのため、これら収集品の新たな陳列場所として、高林兵衛は、浜松郊外の300年を経た自らの古民家を長屋門とともに提供するから、移築して活用したらと柳に申し出、展示と収蔵施設として勧めたのであるが、それを移築せず、2年後の1931年、そのまま高林邸内にわが国最初の民芸品の陳列場が生まれた。

市内に住む小説家藤枝静男も、内田の友人であった。藤枝は志賀直哉の弟子であり、美術書『座右宝』を所持して、雑誌『白樺』流（柳もそこから育っている）の美学を持ち、2階の客間には朝鮮民画や龍門や大同の石仏、仏像が置かれ、ルオーの油絵が飾られ、朝鮮民画を収集していた。内田の存命中であるが、ある時、藤枝から落款とは「款印」の二つをあわせたものを意味すると教えられるなど、『白樺』派の小説家の犀利な眼には学ぶところが多かった。眼科医の心得として手術の際に「眼は鷹の如く（鋭くし）、手は女の如く（柔らかにせよ）」をテーゼとする。これは、そのままあなたがた学芸員、学のある芸人足らんとするキュレーターの箴言なのではないかと自らの書を提示されたこともある。作品や物の扱い方などの心得として、この言葉になるほどと得心したこともあった。

「器は使えることによって美さを増すし、その主は使用することで愛を増す」ということを実践した柳は、民芸作家浜田庄司、河井寛次郎、棟方志功などのほか静岡出身の芹沢銈介を育て、いわゆる民芸作家や民芸の理解者を生んだが、他にも日本民藝館の陳列を任され磐田市に住した鈴木繁男など、作家であるとともに、ものを見る専門家を育てている。わたくしは、現在、大きく見ると「民芸という特殊なものがあるのではなくて、工芸という優れたものがあるだけだ」と思い、これが柳のいう民芸の精神で

はないかと考えている。

いずれにしる浜松の1986年（昭和61）3月に浜松市に寄付された、もう一つの大きな仏像、陶芸を主にする東洋古美術の小杉惣一コレクションとともに、内田コレクションは、その収集した精神を含めて、大事にしていかなければなるまい。

### （3）洋風画家大久保一丘のこと

さて、こうした洋風画絵の関心から、内田が、横須賀藩（現掛川市）のお抱え絵師大久保一丘（生年不詳、没年は1859年）に注目したのも戦前の早い時期であった。何点かの代表作を集め、その中に近代の日本画を見るような新鮮な《富岳図》などがあった。これは現在、静岡県県立美術館の収蔵となっている。



《真人図》（部分）大久保一丘 筆 東京文化財研究所 蔵

一丘は、《真人図》とよばれる「洋風表現による日本最初の上半身像」（成瀬不二雄説）で名高いが、江戸系洋風画として戦前西村貞博士も指摘するように、同じ一丘による横須賀の熊野神社の扁額《駿州富岳の図》を司馬江漢の作品と間違えられたほどの技倆をもっている。西村は、池長に見出された学者で、『日本銅版画史』（昭和16）を著すが、その緒言に「池長美術館の池長孟氏からは、その膨大なる蒐集を自由に著者の調査に委し、

研究上至大の便宜を与えられた」と記している。当時、洋風画家一丘の画業は、注目された発見であった。写真の「真人図」は日本で最初に学界に紹介された。

私は所蔵の東西のガラス絵の調査から、洋風画に興味を持つに至り、掛川藩の御抱え絵師大久保一丘の「真人図」のありかの調査により、伝承性が色濃く画面に残る洋風画がいかに成立したかをトータルに把握する必要があると考え、この人物のなぞを解くべく、「大久保一丘展」（昭和49年9月7日から10月6日）の開催にこぎ着けた。内田の亡くなった年であった。

これは一丘の本格的な展覧会となり、一丘作《弁慶図》（三熊野神社、扁額）は、《真人図》（泉要寺蔵）とともに後に県指定文化財に指定された。この展覧会は、『芸術新潮』などに取り上げられ、成瀬不二雄など洋風画の権威が注目してくださった。美術館での知られざる画家の展覧会は、さまざまな困難を伴うが、意義あることを学んだ。学者が論文で成果を発表するとすれば、学芸員は展示でそれをする。そんな意図を込めた展覧会であった。

同様の問題意識の上から、1983年（昭和58）、赤坂見附にあったサントリー美術館（現六本木）の「名品展」を開催した。生活の中の美を標榜し、それら作品を収集するこの美術館の洋風画とガラス器は注目を集めた。《泰西王侯騎馬図屏風》は、キリシタン大名蒲生氏郷ゆかりの会津若松・鶴ヶ城の障壁画であったとされ、氏郷は、織田信長に愛され、信長の女婿になった大名であり、長崎にも行っており、神戸市立美術館の《泰西王侯騎馬図》とは一対のもので、制作年が1610年（慶長15）を遡ることはないから、蒲生氏郷が作らせたという説は成り立たない。けれども神戸本の《泰西王侯騎馬図》には神聖ローマ帝国の皇帝ルドルフ 2世が描かれて、この皇帝が反宗教改革の急先鋒であり、イエズス会の思想と近い関係にあったことは明らかであるから、宗教的な理由からこの絵が描かれたことは明白である。内田も《世界地図・都市図屏風》をいくつか所蔵していたが、すべて手放している。

いずれにしる、こうした名品展は、展覧会にかかわる関係者の協力なしでは実行できないもので、「MOA美術館名品展」（昭和56年）で、国宝《紅白梅図》を展示できた実績があったからであった。

### （4）コレクションを発展させる展示

浜松市美術館の創設時のコレクションの核は、「遠江

に関する浮世絵版画」と古今東西の「伝統的ガラス絵」であり、開設以来、大井川から浜名湖までの遠州にかかわる浮世絵版画（東海道53次続絵など）とガラス絵（東西古今の伝統的なガラス絵）を2枚看板としてきた。浮世絵版画は、「一杯」といって1度に200枚摺るので、普及し、庶民の芸術といわれるが、実は、多くが江戸土産として武士が土産に買って帰ったものであり、署名があることもあり、民衆絵画ではあるが、いわゆる民画には入れないことになっている。

こうしたこともあって、企画展「高村光太郎展」（昭和 47）、「江戸絵画の巨匠」（昭和 54）開催以前からなどのほか民衆の工芸、民芸というものを内田の収集品、大津絵、佛版画、泥絵、明治の石版画などを活用しながら順次紹介すべきでであると考えた。そこで展覧会の柱の一つとして、1年に1回は民芸に関するものを展示することになった。

1「泥絵と大津絵展」（昭和47年）、2「佛版画展」（昭和49年2月）、3「明治の石版画展」（昭和49年7月）、4「渡部紳一郎氏コレクション江戸の泥絵展」（昭和52）、5芹沢銈介展の収集品による「世界の織りと染め展」（昭和53）、6「河井寛次郎展」（昭和50）、7「微笑の美木喰展」（昭和57年）などである。以下それらを簡潔に紹介してみよう。

1、大津絵は、街道絵の代表的なものとして名高いが、内田の大津絵には優秀な作品が集まっており、一番慈しんでいた旧高林コレクション《藤娘》は、戦後アメリカのコレクターで、日本美術をメトロポリタン美術館に寄贈（一部を売却）した米人ハリー・パッカードと当時医師の需要の大きかった葉ペニシリンと交換した。パッカードが、この傑作といわれた《藤娘》に執心したからだという。先年、メトロポリタン美術館を調査した時には、渡辺華山の水戸彰考館総裁であった《立原翠軒の肖像》（旧浜松市内の個人蔵で、これはバージョンである。正本が国内にある）はあったが、当該の大津絵はなかったのが残念であった。

2、佛版画は古代から江戸時代まで続いており、最初の作品は木版の印刷経文で、法隆寺の小さな百万塔に収められ、天平時代から全国に頒布された。教えを普及するため広がった印佛、摺佛の優品を集めて開催したこれらは、アノニマス（無銘性）な民衆芸術で、生活の中で使われ伝えられてきたものである。

江戸に花開いた浮世絵版画は、よく庶民の芸術といわれるが、実際は、江戸絵と言われるように主に江戸で生産消費（参勤交代での土産になっていた）されたのであるから、当時の士農工商の身分制度の中で、錦絵の多くの武士階級に享受された実態があり、署名があって、アノニマスではないことに留意したい。

3、「明治の石版画展」では、私は下田にあった日本最古の石版画《徳川家康像》（個人蔵）を拝借しようとしたところ、所蔵家が亡くなり、拝借が適わない立場におかれたことがあった。この時、内田から、もう一回出かけて行って頼んでみなさいと諭された。そうして実現した展覧会であった。明治20年ごろまでは、高橋由一（文政11ー明治27）などの手彩色による砂目石版の着色したものに芸術性の高い作品があり、明治20年以後、ジंक版、金属板の石版画に代わられる。一方、銅版画は江戸時代中期に入ってきた技法であり、安田雷州（生没年不詳）の《東海道53駅図》（1844、弘化元）は、小品ながらの優品で、内田が所蔵していたが、最近、静岡県立美術館に収蔵された。この会期中に石版画の収集仲間で、南蛮美術の権威吉田小五郎氏を柏崎からお呼びして講演会を開催できたこともよき思い出となっている。



石版画《東京日本橋之真景》

6、「河井寛次郎展」は、京都国立近代美術館の川勝コレクションによるもので、この時に感じたことは、よい作品は焼きが優れているから、持ってみると重厚ながら意外と重量が軽いということである。学芸員ならではの体験であり、学芸員冥利に尽きるといえよう。

7、「微笑の美 木喰展」は、木喰という五穀（米、麦、粟、稗、豆）や肉を食しない木喰戒を自らに課した修行僧が、遠州路、駿河路、甲斐路を造佛して行脚し、東海道に残し

た木彫の展示であったが、印象に残ったのは、《子安地藏》や《地藏菩薩像》であり、彼の子安観音は、西洋でいうマリヤ観音、母子像ではなかったという仮説を抱かせた。仏を彫ることがそのまま彼の祈りであり、遠州狩宿にも佛家の家に泊まって、一夜で制作造佛したものがある。先輩僧円空の通った場所を注意深く避けていることに信仰に対するライバル意識を見ることができるかも知れない。出品作が三河、遠州、甲府の街道に沿った1800年代初めの作品に限られていたとはいえ、200年前のこの地域の造形の様相と享受を知るよい機会となった。

## （5）その他の展示

内田の中国、日本、ヨーロッパを網羅した伝統的ガラス絵は、日本で最初の近代美術館、神奈川県立近代美術館（昭和26年設立）や高岡市美術館（旧館、現在は公園内に新館が建っている）に個人蔵の時代にも貸与されたこともあり、その時作った木製ケースは現在も浜松市美術館の倉庫に残っている。これからいかに運搬し、展示するかという学芸員として大切な技術を学ぶことができた。また内田の『硝子絵』（1942）は、戦前の紙配給時代の産物であるけれどもガラス絵を美術史に位置づけた労作であり、こうした調査が大事で、展示には、これが一番役立ったからである。

又内田に続いて、柳に、ものの鑑識を徹底的に鍛えられた鈴木繁男からは、ものの美術を教えられた。昭和11年に柳の創設した東京の日本民藝館に住み込んだ筋金入りの人物で、日本民藝館に隣接した柳の住まいには修業した部屋が残されている。内田を介していろんな人との出会いがあった。

2009年の旅行で、フランス・ニースの「素朴派美術館」には東欧の《ガラス絵》が収蔵されており、「絵画における民謡のようなもの」という評価の世界性をいまさらながら実感した。そして収集家には、残された作品に濃い感情を残すものと、そうでない人がいる。内田は、収集家として、選択に色濃い個性を残した人物であったといえよう。

県内で最初に行なった未公開作品による1972年「竹久夢二展」（これら作品は、当時個人の所蔵であり、それから蒲原町所有となり、合併により静岡アートギャラリーに収蔵・保管）は、竹久夢二というよく知られた画家を蒲原の一人の女性が追いかけて収集した、珍しい日記や肉筆、版画、絵ハガキなどを展示したものであり、地元ゆかりの収集家を発掘し、展覧会として結実したものである。若い人のみなら

ず、お年寄りにもファンが多く、掲示した夢二のポスターが盗難にあったこともある。こうしたバラエティに富む展示を、企画展の中に組み込んで展覧会の一つとしたことは、今日考えても意義があるといつてよいと思われる。こうした展覧会は、サブカルチャー等を含めて、われわれの生活の質を問う時代に必要な提案、問いかけであるかもしれない。

これからの地方美術館は、独自の企画をもっと重視とすべきであろう。国際化の中で、1936年（昭和11）開館した日本民藝館が、外国人の見学が日本で一番多い美術館であると聞くと考えさせられる。展示が独特の視点と方法で行なわれており、日本を知るには先ず尋ねるべき場所になっているからである。

柳のいうように、キャプション（題箋）や解説に依って見るのではなく、自分の眼で展示を理解できるようにするところに眼目があり、作品本位に展示しているからである（注2）。

大切なことは、「現代の眼で、生き生きとした展示を構成する」ということであり、その展示の背後に、学芸員の研究が要求されるということであろう。芹沢銈介からは、日本の学芸員の展示は工夫が足らないと意匠家、デザイナーの見地から苦言を提されたことがある。心しないといけないうことである。

（注 2）「美が自然から発する時、美が民衆に交わる時、さうしてそれが日常の友となる時、それを正しい時代と誰が言い得ないだろう。私達は過去に於いてそれがあったことを示し、未来に於いてもあり得べきことを示す為に、此の『日本民芸美術館』の仕事を出発させる」と柳は言っている。

## おわりに

旧長崎県立美術博物館に内田収集のガラス絵や洋風絵がいくつか購入・寄託され、現在の長崎県歴史文化博物館の川原慶賀の《瀉血の図》（重美、写真）は内田の旧蔵品である。内田ガラス絵の優品の多くは、永見徳太郎の『びいどろ絵』（昭和3年、藝艸堂）に収載された永見コレクションであり、それが内田の収集に加わり、一段と充実したのである。

著作には『家蔵江戸版和蘭陀絵』（昭和11）に加え、『硝子絵』（昭和17）がある。

永見徳太郎は、明治23年の生まれで、永見徳太郎の3代目。家業の倉庫業を営む傍ら『長崎乃美術史』など



《瀉血図》（シーボルト手術図）川原慶賀 筆  
長崎歴史文化博物館 蔵

こうしてみると「名品は流転する」といわざるを得ないが、内田は、美術作品の理解の上に「芸術も暮らしに生きてこそ」という信念から、美しく生活するという考え方を大事にしていた。それは今日でも通用することであると思う。

内田も生活を楽しむ（ゲヌスメンシュな）人であり、アリストクラティク（貴族的）とかダンデズムというのは当たらない。手本とした19世紀のイギリスのウィリアム・モリスによる「アート・アンド・クラフト運動」は、民衆に根ざす地に付いた運動であった。これからも内田に教えられた学芸員の精神を大切に生かしていきたいと思う。

# 民俗博物館の展示を少し魅力的にするための一考察

フェルケール博物館 館長・学芸員 西野 和豊

## はじめに

かつて梅棹忠夫氏が昭和 62年 (1987)に出版した『メディアとしての博物館』の中で、「…博物館というものは、すでに機能を喪失した過去の遺物の収容所であり、歴史の冷凍庫であるというふうになります。あるいはまた、博物館というものは、過去においていきいきと生きていたものがその生命をおえて死体となったとき、それをひきとり、安置するための、ひんやりとした霊安室のようなものとかんがえられていた。ということもできるかもしれません。…」と記述されている。この内容は当時の氏の考えでもあり、現在博物館に関係している我々も多少共有していることだが、とにかく博物館は「博物館ゆき」とか、「古色蒼然」といった表現で今なお活気のない、ほこりっぽく、お化け屋敷のような存在になっていることも事実である。断わっておくが、だからといって私がここで理想的な博物館の展示について語れる程の、理知と経験と見識を持ちあわせている訳ではないのが残念である。

しかし、実はこの原稿を依頼された時、私は時間的な問題もあり即座にお断りしたいという衝動と、19年間今の博物館で展示と向きあってきたこともあり、この際今迄の考えを反省をこめて少し纏めておくのも良いのかなどの思いもあり、逡巡の末お引き受けしたのだった。

## 陳列

私が勤めているフェルケール博物館は、33年前に財団として発足して以来、清水港にまつわる歴史や機能を中心に展示していて、貿易（商業）・漁業・観光・工業・渡船のジャンルのほか、荷役・レジャーといったものにもスポットを当てていることから、港の総合博物館と称している。展示は全1階を常設展として多くの部屋（537m<sup>2</sup>）を使い、企画展は狭いとはいえ2階の2～3室（214m<sup>2</sup>～323m<sup>2</sup>）を使っている。

19年まえにリニューアルオープンしてフェルケールの愛称を使い出してより、常時企画展を開催するようになったが、

私が関係した展覧会の中で最も多いのは美術系が 59件（うち 18件が写真展）で、他に歴史系が 21件、趣味系が 20件、民俗系が 14件、工芸系が 11件で、他に民族・産業・考古・演劇などが数回あった。多くの企画展を手がけたことは事実ではあったが、しかし立派に事業を成し得たかという、それは全く違う話である。

なぜ企画展に力を入れたかという、それは初代理事長の鈴木与平氏（鈴木（株）7代 鈴木与平）が「港のことは 1階（常設展）でしっかりやってくれば、2階は港に興味のない人も来れるような企画展をやってみたらいい。失敗したら次から止めれば良い」との、何とも寛大なご指示があったからで、そのお言葉を支えに企画を考えることにしたものの、しかし東京や名古屋でやっている展覧会は真似せず、清水（港）にまつわる内容を出るだけ拡大解釈して、当初は年に6～7件の企画展を開催したのであった。

こうして一応纏めてみると、なかなか内容豊かな企画展が目白押しのように思えるが、初期の頃は本当のところ夜店の店先のような並べ方であった。グループ別にしたたり、時代順にしたたりして一応工夫はしたものの、今考えてみると冷や汗もので展示方法を余り考えず、これで良いと思いこんで並べていた様な気がする。そして何年か経った頃、ハッと気づいたのは、私がやっているのは、「展示」ではなく「陳列」ではないのかということだった。世間では陳列館や特別陳列とかの名称を使っている博物館がある。京都国立博物館では今も「特陳」とか「特別陳列」という表現で常設展示室の一隅で展示している。当然陳列と展示の使い分けを京都国立博物館では以前からされていると思うのである。

というのは、「陳列」と「展示」は明らかに資料の並べ方が違うのである。一般に企画展はまずストーリーが確立していて、その内容で展示され、カタログも造られている。というより、カタログを見ればその企画展の主旨が判り、ストーリーも良く見え、更に展示されている（いない場合もあ

る）多くの資料類も掲載されていて、今では欠かせぬ展覧会の補助ツールになっている（内容満載で分厚すぎるので最近を買うのを止めたという人もいるが…）。展示室では部屋の都合もあり順番通りに展示できなかったり、資料類も借り出せなかったりで、必ずしもカタログ通りには展示されていない場合もあるが、殆どの場合は一定のストーリーが判るのである。

しかし、陳列になると京都も東京も国立博物館の常設展示室内にはストーリー性が余り見られなくて、かろうじて時代の近いものが横に並んでいたりする。江戸期の陶器の横に室町期の漆器があったり、染織が入りこんでいたりして、一種の宝物展のように見えることがあるのは、一品一品が国宝だったり重要文化財だったりしているからである。ここで断わっておくが、陳列が悪いというのではない。我々の側に「展示」と「陳列」を混同してはいないかと問うているのである。いや展示も、陳列も差はなくて同じ意味だと思っている人が今も居ると思うが、私は違うのではないかと考えることにしたのだ。

## 東京ディズニーランド

ところで、皆様は東京ディズニーランド（以下 TDLと略す）がお好きだろか。私が非常勤講師として講義を受け持つ静岡文化芸術大学や静岡大学教育学部のクラスでは、毎年 95～ 100%の学生達が一度は TDLに行ったことがあると答えている。生まれてこのかた一度も近くの美術館・博物館に行ったこともない学生らが、TDLへは 20回以上も行ったというつわもの何人も居るのである。そして彼らが無意識に感じているのは、展示されているものやイベント類や建物などの他に、そこで働いているスタッフの態度や制服や衣装なども気にいったり、また TDL全体の雰囲気を含めた空間そのものが大好きなのである。つまり、スタッフも展示の一員になっているのである。

かなり以前、京都国立博物館（以後京博と略す）の美術室長をしていた狩野博幸氏（現 同志社大学教授）が『芸術新潮』（平成7年 12月号）に「博物館よ、ディズニーに学べ!」と題して 2ページの小論文を寄せている。そこには博物館とアミューズメント施設をごちゃ混ぜにしないという前提で、(a)自分の行きたい目的の場所へまっ先に行く。(b)博物館は子供もおとなとして遇される知的エンタテイメントの場所になるべきだ。(c)安くて早いファーストフード・レストランと高級レストランの両方を揃えること。どち

らかひとつではダメ。(d)エレクトリカル・パレードなどのアトラクションが必須、など数項目の提案を少しおふざけを含めて真面目に説いているのである。京博の方が、こんなにまで踏み込んで博物館に活を入れるのには、余程の事情があると思った人もいるかも知れないが、世の博物館関係者はよくぞ言ってくれたと思った人も多かったのではないだろうか。狩野氏は元々琳派や狩野派の専門家として著名な人物であるが、その後京博を会場にあの「アート・オブ・スターウォーズ」の展覧会を担当した人物としても知られている。京博が変わるのであれば、我々弱小博物館はもっと変わってもいいのではないだろうか。

ところで東京国立博物館はどうだろう。近年売店は売場面積を拡げて数段立派な施設となっているし、聞くところによると、館内を宵の口イベントのため貸出したことがあるという。真偽の程は不明だが、事実とするとこれも今迄では考えられないことが起っている。要するに、我々の頭はコチコチに固まっていて、今迄のやり方でしか物が考えられていないようだ。

## 旭山動物園

一昨年の秋（平成 20年）、縁があって北海道の道立旭川美術館を訪ねた時、飛行機の都合で時間にゆとりが出来たのを機会に、あの有名な旭山動物園を見学に行った。総てがリニューアルオープンと思い込んでいた私は、古い建物と新しい施設が混然として運営されているのを見て、閉園近くまで追い込まれたという過去を垣間見た思いがしたし、またテーマパークのような華やかさや、まともにも今ひとつの感じがしていた。「何だ、テレビの紹介番組とは少し違うな」と思いながら、動物達の様子を観察しはじめると、いろいろなことに気づかされ始めた。

例えば動物園なのにゾウの姿が見えないし、動物園なのに水族館の主役達も居る。しかも動物園と水族館が区分けされていないというのに、それを気付かないほど違和感がなかったことが今も記憶に残っている。そのうち本当に嬉しくなってきたことがある。アザラシが例のアクリルの円筒形の水路を上がったり下がったりして観客の目の前を往き来するのだが、その時は2頭が重なりあって窮屈な空間から我々を興味深そうに見ているのだ。また白熊の水槽では不思議なことに誰も（笛を吹くなど）指示を出していないのに、突然ガラスの向こうの客を驚かそうと飛び込んでいるのである。じっと白熊を観察していると、白熊はこ



まめに背後の客の様子をチェックしていて、かなり人が集まったのを確認した後、水槽に自らの判断で飛び込んでいるのである。アザラシも白熊も、オランウータン（当日は見られず）もこの動物達は自らが客と一緒に遊んでいるのだ。何ということか。私は行動展示とか仕掛けにばかり気を取られていたが、ここの動物達のすごいのは動物達が我々と遊んでくれているのだ、ということに気づいたのである。私が知っている動物園や水族館の動物達は、餌を使った飼育係やショースタッフの合図によって行動していて、人間と動物との絶妙の呼吸が見せ場を作っているのに対して、ここの動物達は自発的に行動を起している。昼寝をしていたり、食事をしていたり、或いは檻の中をせわしなく動き回る猿などは見慣れているが、「私が主役」とばかりに振る舞っているここの動物達の表情は、明確に生き生きしたものだった。世間には多くの動物園・水族館があって、こぞって専門家達が旭山動物園を見学に来たことだろう。そして動物達が自発的に客と遊んでいる姿までを観察して帰り、いずれ自園の展示に反映してくれるだろうと願って帰路に着いた。

## 行動展示

旭山動物園が注目されることで、にわかに行動展示という言葉が目につき出したが、この展示様式はそれ程新しいものではない。民俗系博物館では既に昭和 61年（1986）に開館の千葉県立房総のむらが有名で、江戸時代後期～明治期の房総半島で生活する農業従事者（百姓）の様子が、広大な地域に点在する農家や、丘陵地帯を一面に被う田畑によって実際に現場で展示紹介されている。生きた農民を展示するとはどういうことかという、彼らは全員千葉県の職員で、期間を定めて人事異動でやって来るとのこと。つまりここでの任務は古い野良着を着て農業をやることなのである。朝出勤して、夕方には役所へ戻り、家路に着くという生活だが、私が会話したお百姓さんは、半年前にここに赴任してきたばかりでまだ未熟者ですと謙遜していた。小豆を脱穀する手つきも素早く、手を止めないまま会話に応じてくれるので恐縮していると、手を止めて説明者（解説者）になってはいけないと心がけているとのこと。作業をしているのが展示の一部ですとのことだった。普通、農具や漁具・大工道具などは道具そのものを展示して、映像で使用法を補ったり解説文を付けるものと思っていたが、ここでは（本物の）お百姓さ

んが居るのだとひどく感心したものだった。これは平成 8 年（1996）頃のことだったと思っている。そして平成 12 年（2000）にも思わぬことがあった。

あれは大阪南港に開館した「なにわの海の時空館」という、岸近くの海上にぽっかり浮かんでいる半球形の博物館で、館内一杯に巨大な弁財船である菱垣廻船の原寸大模型が鎮座していて、その偉容は圧倒するものがあった。和船などは、それ程大きなものではないと高を括っている人々の、度肝を抜くには効果的である。5階建ての吹き抜けの建物にすれすれで帆柱（マスト）が伸びていて、帆を広げた姿は感動すら覚えた。そして建物3階の一面を見学した折、ちょんまげをつけた人物が2人、何やらウロウロしているのに気がついた。そうこうしていると、やおら彼らがしゃべり始めたのだ。少し話を聞いていると米の商いが始まったようだ。「お前の店は高い値で買ってくれないので、他の店に売ることにした」、「いやいや始めから話を聞かないで売らないとは何事だ、オレの話もよく聞いてくれ」、「ウチは米問屋から一俵いくらいくらで買っている。それをそれより安い値で売れとは話にならない。人夫や車屋や何人もの関わってきているんだ」、「だったら、それぞれの手間賃を聞かせてくれ」、例えばこんなやりとりを、関西弁で当時は吉本興業の芸人さん達が芸の実験場として務めていたようだ。この様子をいちいち解説文にして壁面に貼るよりも、この会話で活気のある上方浪華の様子を再現しているのだが、劇場に居る気分にもなり、何倍か得をしたように思った。ビデオやマジックビジョンやハイビジョン、コンピューター・グラフィックスなど、最近では多彩な機器を使って見せてくれるが、生きた役者のやりとりは本当に迫力があって、今でもその残像が目の裏に映し出される。

## 動態保存

民俗系博物館では他にも工夫を要する展示物が一杯ある。その中でも例えば本物の電車・バス・トラック・船・飛行機、或いはエンジンなどの機械（マシン）の展示である。当館にも電車が5両あり、うち1両は寄託品で旧国鉄所有の客車があり、メンテナンス料が無視できないものになっているものの、どうにも処置に困っている。劣化しているので全面開放（見学）は不可能だが一度も年内に解放しないと契約違反となり、引き取ってもらうにも数百万円の費用がかかる。本来ならば線路の上を少しでも走る

ようにして保存するのが理想だが、現実はいかんともしがたい状態である。そこで出来るだけ 1/10の模型を作ったり、ジオラマ（立体実景模型）を造って後世に伝える努力をしているが、観客の目は厳しく出来るだけ本物を残せと注文が入っている。彼らからすれば、動かないマシンはそれこそ死体であって、魅力のないものであるらしい。遊園地が人気なのは、そこが決定的に違うのだろう。

## 展示

ところで、ここまで話を進めてきたのに、藪から棒で突然に恐縮だが、もう一度展示について考えてみたい。例えば星座は展示だと言った人がいる。これは神が造った展示物で、写真に撮ってストーリーを作ってパネルを並べれば充分展示になるというのだ。プラネタリウムはまさに天体の展示なのだから。我々の身の回りは展示で溢れている。道往く人々や路傍の一輪の花、街路樹、何でもアリなのだ。私はその昔学生をしていた時、東京・銀座のとある喫茶店で、一人ボンヤリと2階から窓越しに、コーヒーを飲みながら道往く人々を眺めていたことがあった。その内、空が暗くなり、雨が降り出し、稲光が走り、人も駆け出し、ザーザーと雨が暫く激しく降ったのち、空が明るくなり、やがて青空が見えたので、傘を持たない私はようやく帰途に着いたのだが、その間 2時間が経過していた。学生だったからそんな無駄な時間の使い方が出来たのだが、今も街路を往く花柄の傘がきれいだったのを思い出すことがある。そして気付いたのだが、私が見ていたものは、まぎれもなく東京・銀座の風俗を 2時間の行動展示として見ていたことであり、あるいは 2時間のドラマだったのだ。

本来ドラマには、「序・破・急」の法則があるが、この銀座のドラマは全く創作・編集の手間が要らない、自然の演出だけで成立していることになる。断わっておくが、映画・芝居・テレビなど人為的なものも総て展示の範疇に入っていることは前にも述べた通りである。本題に戻そう。本来あるべき展示とはどんなものなのだろうか。例えば判り易い例として美術館で行われる一人の画家の展覧会を考えてみよう。

「少年期に絵を描き始めた頃から、本格的に学ぶため美術学校に入り、基本的な技術を習得し、更に工房に入って技術を磨いた後、著名な画家に弟子入りしたが、まもなく破門され各国を流浪し、やがてパリに辿り着いた。似顔絵描きをしながらそれでも志は高く、独自の画風を確立

してヨーロッパ貴族に気に入られるようになった。晩年は高齢ながら庭の花を描く毎日を送っている…。」といった起伏のある人生を経験したこのような画家は、家庭環境や社会状況の変化によって当然精神状態や心理状態に変化が現れ、画風・作風が大きく変わっていくことがある。一般的に 30～ 40年ほど前までの美術館では、画家が気に入っていた作品だったり、技術的に満足した作品だった場合のみを会場で展示するのが常であったのが、最近では殆んどの美術館でスケッチブック・絵はがき・手紙の他に、余技の作品も含めて展示するようになって、作品だけでなく、画家の人間性や生き方まで展示するようになったのである。つまり、作品だけでなく作家本人のことを知ってもらいたいというのである。なぜそのような作品が造り出されたのか、その背景を知りたい。その上で共感することがあればますますその画家が自分にとって大切な人になっていくのである。多くの人は最も興味ある存在が人間なのである。そのことを人は少しずつ認識しだしたように思うのは私ひとりではないだろう。

## 我思う

哲学者パスカルが人間のことを「考える葦<sup>あし</sup>」であるといったり、デカルトが「我思う、故に我あり」といったと言われている。彼らが何をいいたいのかというと、人間は思考することでこの世に存在理由があるのであって、思考しない者は植物以下かこの世に存在しないのと同様であるというように私は理解している。従って人間は自分のことを知れ!と主張しているのである。

では、自分が自分のことを知るためには何をすれば良いのかというと、ドイツの哲学者ディルタイは「人間は、自分が何であるかということを歴史から学ばなければならない」と説いている。我々はずっと多く歴史を学ばねばならない。例えば石ころは積みば山になるが、部分部分の出来事をいくら積み重ねても歴史にはならない。歴史は川の流れと同じである。大きな人の流れの中に歴史があるというのだ。

以上の説から我々は是非歴史を学び、歴史から過去の人々の生き方を学び、未来を切り開いていかねばならないと言うのである。つまり何を言いたいかといえ、我々民俗博物館は過去の先人達の足跡から彼らの知恵を知り、また勇気をもらい生き方を知った上で自分を見出していけというのである。

かなり最後になって難しい話になってしまった。しかしこ



こで伝えたいのは、映画館に行っても良いし、お芝居を見に行っても良い。コンサートへ行っても名曲を聴くのも良い。また好きな文学書を手にとっても良い。それとも博物館へ行っても自分探しをしてみるのも面白いかもしれない。それらはいずれも人間を直接的・間接的に描いているものだからである。そんなレベルまで人々を博物館になじませるにはまだまだ努力が必要だろう。

### 人間学的展示

では自分を知るために歴史を学ぶにはどうしたらいいのだろうか。我々博物館関係者は、その疑問に応える展示が期待されている。それには人間学という古くて新しい学問が基本になると私は思うようになった。

人間学とは、哲学や倫理学・宗教学を踏まえつつ、現実を生きる人間とその生き方を総合的に考える学問で、人間が人間である限り常に変わらないものもあれば、歴史の流れや環境の変化などのために、いつも新しく変わる可能性のある学問で、近年この人間学が注目され始めている。

かつて昭和 3 年 (1928)11 月発行の『人間学』に白仁武氏 (元 日本郵船会社社長・教育者 杉浦重剛氏高弟) がその序文に次の様に記している。「自分で自分を造り上げる学問、即ち学校における科目の外にして、これを文字にのみ求むべからず。これを見聞にのみ求むべからず。自分で自分を見、自分で自分を矯正し、次第々々に自分を築き上げる。その力量を自分で養い育てるのが人間学なれば、これを今日の学校教育に期待するのは無理なるべく、青年は各自に自己の修養に勉めざるべからず…」。

かなり古い書物に書かれた文章を、金科玉条の如く扱うつもりはないが、その内容は今も新しく教訓的である。ここでも人間学の重要性を指摘している。

### おわりに

「歴史」の主人公は政治の為政者であったり、経済の、文化の、芸能などのその道の達人ないしはリーダーである。彼らの生き方が自分の目指すものなのか、或いは避けるものなのかは人それぞれである。一方「民俗」はそのほとんどが無名であったり、その地域だけのリーダーだったりするが、反って地域差もあり、地域々々に英雄がいて当然である。東京ディズニーランドはなぜ楽しかったり、面白かったり、再び行きたいと思うのだろうか。旭山動物園はな

ぜ動物達が生き生きしているのだろうか。行動展示は動きのない標本展示より、なぜリアルな表現となるのだろうか。動く物は、人の注意を引くという特徴があるのを利用して展示に応用していることもあるが、根底には人がなぜ、どうしてこんな動く作品 (物) を作ったのかを知ることで、その人をさらに好きになったりするものである。そんな展示が出来ている博物館も中にはあると思うが、特に民俗系博物館は単なる陳列倉庫のようにになっていないだろうか。展示品の解説が技法や材料の説明だけになっていないだろうか。それよりもどんな人 (達) がこれを何のために誰のために、どんな思いで造ったのか。生活が便利になるために、また少しでも安く、そして何よりも安全なものを知恵を働かせたことなども紹介出来ているだろうか。もっと展示品と人間の関わりを紹介していくことで、民俗博物館はもう少し人々に興味を持ってもらえる存在になるのではないだろうか。あえて人間を知りたいと思わなくても、人間が生き生きと展示表現されている博物館に、行きたいと考えてくれるようになりたいものである。

当館に関しては、企画展示は出来るだけ人間学を下敷きにしてストーリーを組み立てているところだが、常設展示についてはまだまだ発展途上館である。あれもこれも手直しが必要である。

#### 【参考図書】

- ・『人間学』昭和 3 年 12 月 1 日 二松学書店発行
- ・『メディアとしての博物館』1987 年 (昭和 62) 11 月 30 日 (株) 平凡社発行
- ・『展示学辞典』1996 年 (平成 8) 1 月 30 日 (株) ぎょうせい発行
- ・『現代人間学』1999 年 (平成 11) 3 月 10 日 (株) 春秋社発行
- ・『博物館研究－2009・9』平成 21 年 8 月 25 日 (財) 博物館協会発行
- ・『博物館研究－2009・12』平成 21 年 11 月 25 日 (財) 博物館協会発行

# 原点回帰～ミュージズの館に戻りたい

浜松市楽器博物館 館長 嶋 和彦

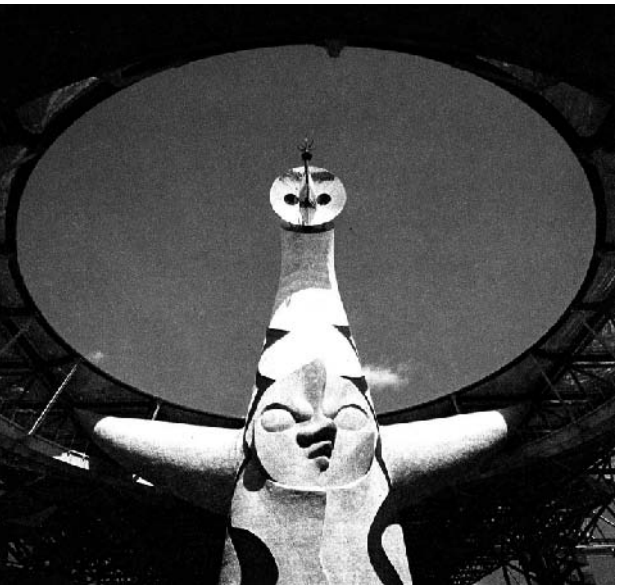
静岡県博物館協会創立 40周年をまずお祝い申し上げたい。そして、この 40年間の、博物館の発展のためになされた先輩諸氏の並々ならぬ努力に対して、大きな感謝と尊敬を捧げたい。

この記念すべき年に、「静岡県の博物館の未来に対する提言などを書いてほしい」という協会事務局の要請をお引き受けしたが、博物館の世界に入ってたかだか十数年である私ごときが、提言などという大それたことを申し上げる資格も能力も無いので、提言については、おそらく同じテーマで筆を執って下さっている先輩諸氏にお任せしようと思う。私が出来ることといえば、生まれてこの方の私の博物館とのかかわりを振り返りながら、博物館を愛するものとして、日頃感じたり思ったりしてきたことを、それも細かなハウ・トゥーはさておいて、博物館の目指す大きなイメージというものを、皆さんに申し上げるということではない。だから、本稿は論文ではなく、博物館の仕事に携わるものの独り言、つぶやき、エッセイと思っていたきたい。

## 日本万国博覧会と国立民族学博物館の衝撃

私が博物館のスタッフとして働き始めてもうすぐ 16年が終わる。それまでは博物館の外の世界にいたので、博物館とのかかわりは外部からのごく普通の見学者であった。博物館や美術館が小さい頃から好きでよく行っていたが、何が展示されているかに加えて、どのように展示されているかに興味と関心を持ち始めたのは、中学 3年生の時である。1970年、そう、日本万国博覧会が開かれた年である。当時は私は大阪の豊中市に住んでいたの、万博会場の吹田市千里丘陵は目と鼻の先。一日中行ったのは 2～ 3回だが、他にも学校が終わってからそのまま電車に乗って 5時からの夜間見学（割引があった）にも何回か行った。「人類の進歩と調和」というテーマは中学生なりにとても感動したし、各企業、各国のパビリオンの展示も素晴らしかった。アメリカ館に 3時間以上並んで「月の石」も見た。フランスやイタリアの展示はとってもおしゃれだった。ソ連はすごかった。

三菱未来館やみどり館の全周囲映像も迫力だった。そんな中で、一番心に残ったのは、実は「太陽の塔」とその地下と内部に広がる、万博のテーマ展示である。



太陽の塔と大屋根

岡本太郎作の太陽の塔は、私はとても好きである。塔は今でも残されていて観光客が訪れる。私はこの塔を見るといつも、当時の夢多かりし自分を思い出し、多くの人がこの塔の存在を今も懐かしがる。しかし、その地下と内部の展示について、思い出を語る人はまずいない。地上の過去、現在、未来の 3つの太陽の顔に加えて、地下にはもうひとつ 4つ目の太陽の顔があった。そして生命についての展示があった。生命といっても動物や植物の標本が置いてあるのではない。もっと根源的なものだったのだ。

それは何かというと、DNAとRNAである。DNAとRNAの大きな分子模型が、暗闇の中で照明に浮き上がっていた。側によって見ると、「あらゆるものの生命の源」みたいなことが書いてあった。中学校の理科の教科書にはまだこの言葉は載っていなかったように思う。分子生物学という学問が産声を上げた時代であったから当然だろう。だから私はこの展示でDNAとかRNAというものを始めて知って感激した

のである。そしてニューギニアの、何というか、生命のエネルギーがはちきれんばかりの仮面がずらりと並べられている。ほんとにすごいと感じた。

さらに太陽の塔の中に入ると、そこには高さ 10m以上の巨大な生命の樹が立っているのだ。生物の進化の系統樹の超大型立体模型。根元には単細胞生物のアメーバみたいなものから始まって、上部に行くにつれて三葉虫とかアンモナイトとかになり、魚になり、恐竜になり、鳥になり、哺乳類になり、最後に人類になる。それをエスカレーターに乗って 30秒くらいで最上部まで登りながら見学するわけである。



太陽の塔の内部にあった生命の樹（生物系統樹）

そしてBGMとして気分を高揚させる音楽が流れている。生命の樹の根元のエスカレーターに乗る空間には原始の声みtainな音楽。ちょうどストラヴィンスキーの「春の祭典」のような音楽。それがエスカレーターで上方に進んで行くにしたがって、だんだんと穏やかになり最後は天使の声のような、グレゴリオ聖歌のような音楽になる。突然変わるのではなく上方に行くにつれて、いつ変わったのかわからないように自然に変わっていくのだ。これにはまたまた感激した。

最上部まで行くと出口で、太陽の塔のある「お祭り広場」を覆う大屋根に出られる。この大屋根も、今は骨組みだけが一部地上に残っているけれど、当時は大屋根の中に未来の生活がパネルや模型を中心にして展示されていた。実のところ私はこの未来の生活の展示にはあまり感動しなかった。しかし、生命の根源から始まって、未来の生活まで、地下から空中へと続く万博のテーマ展示は心憎い演出で

あった。私は特に地下と塔内の展示に感動し、一日に何度も何度も見た。

万博の 7年後、1977年、会場跡地に国立民族学博物館（みんぱく）が誕生した。世界最大級の民族学博物館である。ここでも展示されている民族文化財の圧倒的パワーに衝撃を受けた。アフリカ展示室では、ひょうたん製の容器が高さ 6メートル以上はある壁面におそらく何百個も並べられている。ただの実物の紹介なら 1個並べて、説明をつけておけばよいのに、何百個もだ。でもこれが展示というものの姿だと思う。上の方に飾られているひょうたんなんて細かい文様はわかるはずが無いし、現地で村人がこのようにひょうたんを並べているわけではない。この展示は現実の暮らしとは違う。でも、それでもいいのである。アフリカという文化やパワーが見る人に伝わればいい。その人は、じゃあ一度アフリカに実際に行ってみよう、という気になるだろう。展示がアートになっていた。

博物館は「知」への入り口にすぎない。人の心を「知」の世界へと誘うパワーが大事だと思う。みんぱくも創立 30年以上が経過して、いろいろと展示リニューアルが行なわれている。アフリカ展示もリニューアルされたけれど、かつてのような迫力は無くなった。いろんな人がいろんな意見を言って、現地の人の意見も聞いて、学問的にも正しい展示だというのが、結果は当たり障りのない個性の無い普通の展示になってしまった。みんぱくの大スペースを使わずとも、個人の家でも実現できるようなこじんまりとした展示だ。この展示を見て、アフリカに行きたい、と思う人はまずいないだろう。私は残念なことだと思う。

冒頭に長々と太陽の塔と創設期のみんぱくについて述べてきたが、どうしてかという、その後の私の博物館の展示の基本的価値観というか手本が、この 2つの展示だからである。目で見、耳で聞いて、学問に基づいて、実物第一主義で、短い言葉で、人に何かを伝えて感動させ、「知」への扉を開くこと。博物館が忘れてはならない展示の基本が、この展示にはあると思う。

## 日本初の公立楽器博物館の創設からリニューアルへ

私が楽器博物館の開設に関わったのは 1994年、開館の 1年前からである。とにかく日本で最初の公立の楽器博物館である。西洋楽器製造の、日本どころか世界の中心地である浜松市に、西洋楽器だけでなく世界中の楽器を集めた

博物館を作るというのだ。当時日本に世界の楽器を集めた楽器博物館がなかったわけではない。東京の国立音楽大学、武蔵野音楽大学、大阪の大阪音楽大学には楽器博物館または楽器学資料館なるものがあり（今もある）、それぞれ素晴らしいコレクションを有していた。しかし、3館ともあくまでも音楽大学の付属研究教育機関であり、教員や学生のためのものである。一般市民の見学や利用は想定していないしその義務もない。あくまでもサービスとして週に何日か一般見学を許可しているにすぎない。大学が休みとなる土曜日曜や夏休み、冬休みなどはもちろん休館であるから、市民が、世界の楽器の種類や歴史や文化を知りたいと思っても、利用することは出来なかった。

そんな状況で市民が見学できる楽器博物館を作ろうというのだから、すべてが試行錯誤の連続だった。そのすべてを詳しく述べることは、紙面の都合で出来ないのでもたの機会に譲るとして、一番の基礎となる楽器博物館のコンセプト、それは「世界の古今東西の楽器を同じ目線で平等に展示紹介して、楽器を通して人間の文化の歴史の多様性を紹介する」というものである。

これは凄いことで、楽器博物館発祥の地ヨーロッパでは、こんな考えはまったく無い。楽器は素晴らしい文化であるが、世界中の楽器でヨーロッパの楽器こそ最も優れており美しいものである、というようなヨーロッパ優位の考えが色濃く反映されているのだ。日本も含めて、中国、インドなど東洋の楽器やアフリカ、アメリカなどの楽器は、民族美術品として評価される場合もあるが、たいていはその他大勢の楽器であり、楽器博物館ではなくて民族博物館などに不正確な解説とともに、ヨーロッパの楽器よりも遅れた楽器として展示されていることが多いのである。だから浜松のこのコンセプトは世界に誇るべき画期的なものなのである。

余談だが、2010年4月、アメリカのアリゾナ州フェニックスに私立の楽器博物館が開館する。「世界初の地球規模の楽器博物館」「音楽は魂の言葉である」というのがキャッチフレーズ。一昨年 2008年に館長夫妻が楽器博物館に視察に来られたのだが、「浜松の楽器博物館のことはうかつにも知りませんでした。浜松はもうすでに地球規模の楽器博物館で、アリゾナが世界初ではないですね、そして楽器を文化として展示されていますね。」と驚かれた。

世界の楽器を平等に展示するとはいっても、1995年 4月の開館時には、実は世界の楽器は所蔵していなかった。所蔵していたのはヨーロッパの楽器 500点余りと日本の楽

器 130点ほど。だから常設展はひとまずヨーロッパの楽器と日本の楽器でスタート。その他の地域の楽器は特別展でどこかから借用して展示し、2000年までに順次収集するというものであった。そして世界中の楽器がそろったら改めて展示リニューアルするという計画だった。しかし、バブルが崩壊しその後の社会状況、経済状況は悪化。楽器収集計画もどんどん遅れて、ようやく大規模な収集が完了したのは 2003年、展示室の拡張とリニューアルが実現したのは 2006年である。ここでようやく当初のコンセプト「世界の楽器を同じ目線で平等に展示する」が現実のものとなった。

2005年から 2006年にかけてのリニューアル工事は、全館閉鎖をできるだけ少なくして部分工事で行なった。だから、それまでの展示の大部分を占めていたヨーロッパの



リニューアル前の地階展示。ヨーロッパの楽器が並ぶ。



リニューアル後の地階展示。



アフリカコーナー。

楽器を収蔵庫にしまったり場所を移動して一部のみ仮展示をしていた。その時、「浜松の代表的産業はピアノだからピアノや鍵盤楽器を優先的に展示すべきだ」といった趣旨の意見が市役所に寄せられたことがある。もちろん匿名である。こちらとしてはいくらでも反論できるのだが、匿名なので返事のしようが無い。そのままりニューアルオープンを迎えたが、その後このような意見はまったく聞かれないどころか、展示に対する賞賛の声が多い。

リニューアル以前は展示室への入口を入るとすぐにヨーロッパの美しいチェンバロや弦楽器が目に入ってきたのだが、そのようなヨーロッパの楽器はすべて地下に移り、アジアの楽器がその後を継いだ。インドネシア・ジャワ島の青銅ガムラン、バリ島の青銅ガムラン、バリ島の竹ガムランのジェゴグ、韓国の宗廟祭礼楽の楽器、この4つの金色や極彩色に輝く巨大なアンサンブルが展示室に並んだ。圧巻である。展示室に足を踏み入れたとたんに、多くの人から感嘆の声が上がる。特に 10代 20代の若い世代からは素直に「うわー、すごいねえ!」と。そしてヘッドフォンで演奏を聴いて、楽器をバックに記念写真。アジアの文化の素晴らしさを確かに認識してくれているのだ。これこそが館の目指すところである。いくらお金を使ってピアノ



リニューアル前の入口付近の展示。



リニューアル後の入口付近の展示。

やチェンバロやヴァイオリンを並べたところで、ヨーロッパの本家の楽器博物館にはかなうわけが無いし、かなっても二番煎じでしかない。アジアの端っこの日本に、世界で一番新しく出来る楽器博物館は、ヨーロッパのそれとは価値観の違うもので無ければ意味も値打ちも無いのである。

## 楽器からのメッセージは音楽だけじゃない

楽器というと音楽、音楽というとおたまじゃくし、楽譜。私はどうもおたまじゃくしが苦手、音痴だし、楽器といえはハーモニカくらいしか・・・、という方がいらっしゃるが、そんなことはまったく関係ないですよ、といつも申し上げている。確かに楽器の大きな役割は音楽を演奏することではあるが、そうだとでも楽譜を使っている文化は一握りである。さらには、楽器は物体であるから、素材や構造や装飾など、見て楽しいことがいっぱいある。そこには自然環境や、科学・工業技術や、美意識、宇宙観、価値観、信仰などいろいろなメッセージが詰まっている。音楽そのもの以外にも沢山のことが楽しめるのである。

これはもう楽器博物館というよりは民族学博物館である。みんなくには生活道具が沢山展示されているが、みんなくく展示を楽器だけにしたものが楽器博物館であると認



インドネシア・中部ジャワのガムランに彫刻されたナーガ（龍蛇）は宇宙を支える神獣である。



麒麟に似たミャンマーの想像上の吉祥の動物ピンサツ・ユーパ（中央）と、ゴングの杵に彫刻されたタイの半人半鳥の学芸の神キンナリー。



識している。浜松市楽器博物館の目指すものは（まだ100%実現していないけれど）、「楽器を通しての民族学博物館」である。

浜松の楽器博物館は、ヨーロッパの楽器博物館と同じになることは目指さない。ピアノも竹笛も、楽器を文化財ととらえて、そこに収められた様々なメッセージを解説し紹介していくことを目指している。楽器店に並ぶ西洋楽器と和楽器だけが楽器のすべてではない。広い世界の数多ある楽器の中で、それはほんの爪の先ほどのものでしかない。これだけ情報があふれている社会になっても、世界にはまだまだ知られていない、というよりも、知らされていない楽器や、その音、その音楽、その楽器や音楽が使われる場や目的、習慣やならわしなどの文化がある。それに出会うことは、自分の「知」の世界、「感性」の世界が広がることになるのだ。

### 「知」の殿堂は安易なものであってはならない

博物館の最大の使命は「知」の殿堂になることだと思う。みんなくが開館 30周年の時に出したキャッチコピーは「地の先へ。知の奥へ。」だったが、まさに言い得て妙（現在は「ようこそ、地球シアターみんなくへ」となっている）。地の先には沢山の楽器や音楽があるし、それが持つ知の世界もまた限りなく深い。

「博物館」とは幕末から明治の時期に誰かが英語のミュージアムを訳して作った言葉だと思うが（私は詳しくは知らないで、どなたかご存知であればお教え願いたい）、ミュージアムとは若干ニュアンスが異なると思う。ミュージアムはギリシア語のムーセイオンから来ており、ムーセイオンはムーサイ（英語でミュージズ）の館である。ムーサイとはギリシア神話の学問と芸術の 7人の女神たち。学問や芸術はそれ自体は目に見えないので展示のしょうが無いから、絵とか彫刻とか、物体を置くわけであるが、その物体の背後にある学問や芸術の精神がないと意味が無い。単なる陳列館で終わってしまう。博物館と名乗る多くの施設があるけれど、このことを忘れている施設が多いと思う。博物という名称は広く多くの物という意味でしかないから、ただただ物を沢山集めればいいでしょう、というふうに思われてしまったのかもしれない。

従来のきちんとした博物館でさえも、一般見学者にわかりやすい説明という社会の風潮にしたがって、とても安易な説明が多くなってきたように思う。あるいはただ単に体験とか

体感とかという体験型博物館に陥っているのではないだろうか。学問や芸術は決して簡単な安易なものではない。もちろん一般の人にはわかりにくい専門用語を並べて何が何だかわからない解説も良くないけれど、反対に安易過ぎる説明もいかななものか。見学者が見学し終わって、何か成長したな、と感ずるような展示でないといけない。

30年前からのゆとり教育の弊害が今顕著に現れている。20代～ 30代の若い世代の知識、教養の無さがいろいろな社会問題を生み出しているように思う。テレビのクイズ番組で小学生レベルの問題に大の大人が答えてはしゃいでいる姿は、さらにそれを助長する悪循環だ。見ていて恥ずかしい。博物館はそれにあわせて安易な方向に進むことがあっては決してならないと思う。社会が安易な方向に行っているからこそ逆に、博物館はミュージズの館、知の殿堂、学問と芸術の館であるべきだと思う。このことは決して譲ってはいけない部分だと思う。



リニューアル後の地階ヨーロッパ展示。

### 温故知新こそが博物館の役割

通常の博物館は過去か現在の物体を展示している。未来のものは実際にはないのだから、展示のしょうが無い。展示しても想像で作った模型である。その過去の物体を、過去にこのようなものがありました、という表面的な紹介で終わってしまったら、それ以上どうしようもない。博物館は墓場となる。そうではなくて、過去のものが持っているいろいろな要素を今の時代に生かさないと意味がない。楽器博物館なら、200年前のピアノをただ置いておくだけではなくて、音を出して演奏して当時の音色や響きを今の時代に甦らせて、作品の持つ当時の姿を紹介し、新たな世界を知ってもらうことが大事なのである。そうすれば今のピアノを演奏する時にも響きの理想像が違ってくるのだ。博物館の過去の物体

が今の私たちの生活や人類の文化に貢献できるとすればこの「温故知新」なのであると思う。

その温故知新をいかにして実現するかが博物館の腕の見せ所だろう。私がかつて太陽の塔とみんなくで体験したような、わくわくするような興奮、そう、劇場で芝居を見るようなアナログな興奮が必要だ。今の展示は、どこもコンピューターやデジタルに頼りすぎていると思う。ただ資料を置いて解説をしておけばよい時代ではないことは百も承知。といって大規模な装置を設置する経費もないしそんな必要もない。今ある資料をいかに人間の心に訴えるように展示するかが鍵だろう。資料が食材とすれば展示は料理。腕を振るうのは人間である。博物館全体が入った瞬間に劇場になるような展示がこれからは必要だろう。まさにシアター的展示である。みんなくの現在のキャッチコピー「ようこそ、地球シアターみんなくへ」はなるほどと思う。



1765年製/パリ製のチェンバロを使つてのコンサート。



足踏み式リードオルガンのレクチャーコンサート。



所蔵楽器を演奏したCD。現在 No.2まで出ている。

### おわりに

最後に、私が近年、危惧していることをあげておきたい。国・地方自治体を問わず政治でも、テレビ番組でも、社会活動でも、そして博物館活動でも、今、市民参画、市民参加などの「市民」、外部評価、外部委員会、外部委託などの「外部」、そして民間委託などの「民間」という言葉が大流行しているが、はたしてそれでいいのだろうか。

それはそれで大事な面もあるが、この言葉の裏には、すべて市民は役人＝公務員よりも賢く偉く正しい、すべて外部の人は内部の人＝公務員や博物館職員よりも賢く偉く正しい、すべて民間のほうが公よりも賢く偉く正しい、という考えがあるように感じる。もっといえば、公務員自らが、私たちには能力が無いので、市民の皆さん、外部の皆さん、民間の皆さん、お願いします、と自らの無能力さを認めていることになってしまう。はたしてそうだろうか。

周りを見てみれば答えははっきりしている。確かにいろいろな所で公務員の不祥事がおこっているけれど、なら民間や市民は完璧かといえばそんなことはない。だから、どちらがいいとか悪いとかの問題ではないのだ。博物館は、文化を保存し後世に伝えていくと同時に、その文化によって、今生きている人を育てていくという役割を担っている。それには 1 年や 2 年ではなく何十年もかかるのだ。博物館にかかわる者、スタッフも利用者も、政治家も経済人も、「過去の文化の恩恵があったからこそ今の存在がある。」という大切な事実を忘れてはいけない。皆がもっと「文化」や「知」に対して謙虚になって、良き「殿堂」を築くために、自分は何が出来るのかを考え行動することが大切だ。そして公務員も、博物館の職員も、もっと自信を、それも横柄ではない謙虚な自信を持つべきだし、専門馬鹿にならないで、常に自己研鑽に努めて、広い視野で博物館活動に精進すれば、いろんなことが解決すると思う。博物館をとりまく状況が厳しいのはわかっている。だとすれば、嘆きつつ、抗議しつつも、博物館にかかわる者が知恵を絞るしかないのだと思う。



ガムランを使った展示室でのミニコンサート。



# 博物館としての熱川バナナワニ園

熱川バナナワニ園 研究室 学芸員 清水 秀男

## はじめに

熱川バナナワニ園は伊豆半島の東海岸中程に位置し、ワニと熱帯植物を売り物にする動植物園である。昭和 33 年に設立され、今年で 51 年目を迎え、まさに温泉地伊豆熱川を代表する観光施設として伊豆半島とともに盛衰をともしてきた経緯がある（写真－1）。

バブルのピークには年間 70 余万人の観光客を迎えていたが、バブルがはじけると共に、来園者の長期低落傾向が続き、今年が底か、今年が底かと言いながら 20 万人近くにまで落ち込んでしまった。従業員 60 人で 60 万人の動員が基準となって年中無休のローテーションが成り立っていたのに、人件費の節減を繰り返し、正社員を減らしてパートに置き換えても、年中無休という大前提がある以上、最低限のスタッフ数というのは自ずから決まってくる。動員力が 1/3 になっても、スタッフは 2/3 程度までしか減らせないのである。これが経営にどのような影響を与えるかは説明するまでもないだろう。

博物館相当施設として相応の社会教育活動などと言われても施設が生き残る事が先決である。当園と同規模の観光施設がどうなっているか、説明するまでもないだろうが、早くに閉園した「石廊崎ジャングルパーク」を筆頭に、何度も代替わりを繰り返す「伊豆シャボテン公園」、経営者の代わってしまった「らんの里堂ヶ島」、「伊豆バイオパーク」、「伊豆洋らんパーク」と軒並みである。

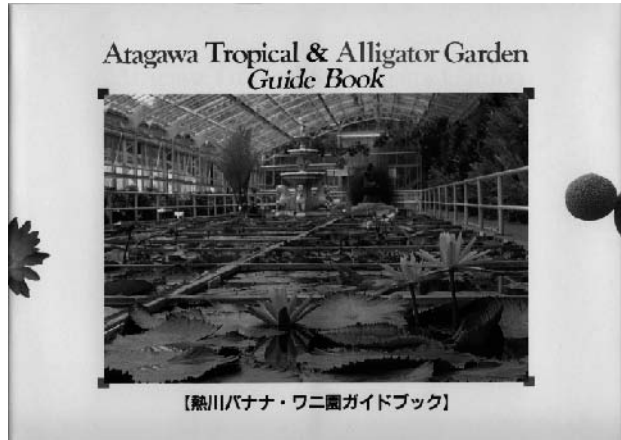
そのような環境の中で、ワニ園の生き残り戦略と言うか、舞台裏がどうなっているかを解説しながら園の実情を紹介したい。

## 熱川温泉に付随した一観光施設

平成 4 年、今から 17 年前に、当園では世界で最も美しいと言われたシンガポール植物園のガイドブックを参考に、オールカラー 48 ページのガイドブックを作った（写真－2）。勿論、私もその編集の一翼を担い、自信满满で 1 万部を製作した。販売は 1000 円だったが、美しい装丁と内容な



（写真－1）  
正月の熱川バナナワニ園入り口風景。  
満開のブーゲンビレアがお客様を迎える。



（写真－2）  
自信满满で製作したガイドブック。  
17 年たった今でも大量の在庫が。

ので、私は飛ぶように売れるものと期待していた。

当初は 3 か所の売店の一番目に付く所に置き、お客様がすぐ手に取れるようにしていた。しかし全く売れない。50 万人のお客様が来ても、日に一冊どころか、年に 100、200 の単位なのである。何故か？

普通我々が博物館や美術館を訪ねる時、また海外の植物園などを訪ねる時、必ずその園の図録やガイドブックを購入して思い出にするとともに、参考資料として持ち帰る。

何故か？それは、その博物館なり植物園を訪ねるのが目的だったからである。

ところが熱川バナナワニ園に来るお客様は違う。熱川や稲取に泊まり、温泉と海鮮料理を楽しんだついでに立ち寄る観光客であり、海水浴や伊豆巡りに来たついでに寄るカップルであり、家族連れである。ガイドブックなどは最初から眼中にないのである。

私がある時点で悟ったことは、「熱川バナナワニ園は熱川温泉に付随した一観光施設に過ぎない」という厳然たる事実である。誤解を招く言い方になるかも知れないが、一般の観光客はこの園に博物館的なものは期待していないという事なのである。

ちなみにガイドブックは今でも大量の在庫があるのと言うまでもない。製作時、出版社の担当者が、「こういう本は売れませんから、製作の日付は入れませんよ。」と言ったとおりになってしまった。悔しいが、長年売店に置けたのはそのおかげである。

## 観光客を喜ばせる

それでは、熱川バナナワニ園の売りは何なのか。勿論、それはワニでありバナナなのだが、それ以前に園内を徹底的に綺麗にするということである。我々はそろそろ「アラ還世代」と呼ばれる歳になるが、若い時に、先代園長に厳しく仕込まれたものである。

その一例を挙げると、「開園するとはどういう事か？」という定義付けがある。

開園するとは、食堂で言えばのれんを掛ける事だろう。その時点で全ての食材の仕込みが終わり、「さあいっちゃい」というのが店を開けるということだ。植物園で言うなら、開園の時点で園内の清掃が終わり、綺麗に水を打って清々しい雰囲気でお客様を迎えるということだ。

それは要するに、言外に就業時間前に来て管理を済ませ、来園者の前で掃除をするような姿を見せるな、ということを要求しているのである。

経営者であれば、従業員に早出を強いるような指導は労働基準法違反になるから出来ないはずだが、園長は決して早く出て来いとは言わなかった。職員の自覚を促し、それぞれの担当部署の管理が開園時間前に片付くように自主的に早出をさせたのである。ベテラン職員がみんなそうなのだから、新卒で入って来る職員は、皆それを見習い、ワニ園の伝統を自然に身に着けてゆく。

現在、園の営業時間は 8 時半から 5 時で、就業時間もそれと同じはずだが、動植物担当の職員は大体 6 時から 7 時を基準に出社している。売店等の担当の女子職員でも 8 時前には出社する。まして昨今の人手不足である。園の屋台骨となっている動植物担当者は、他の職員の負担を減らすため、休日でも朝の管理に來たり、朝夕の水やり、餌作りなど、それぞれが出来る範囲で自発的に園の運営が円滑に行くように努力している。

経営者の立場から見れば、してやったりだろうが、彼らはあくまでも自分の担当する動物や植物に愛着を持ち、また可愛いから出てくるのであって、自分の時間を犠牲にしているなどという感覚などを持たず、ただ淡々と仕事をこなしているのである。

この辺が、多分ワニ園が生き残ってきた最大の理由だろう。規定時間を無難にこなして給料を貰うという感覚ではなく、自分の好きな仕事をさせてもらう以上は、その仕事に責任を持ち、自分の納得の行くまで働くというスタイルなのである。 私自身も、子供の頃から植物が好きで、そのような学歴を積み、植物園作りの現場を経てワニ園に來た人間である。朝起きてから寝るまで植物漬けの生活に不満のあろうはずがない。夜家に帰っても今度は自分の温室にこもり、それをストレスのはけ口になっている人間である。昼も夜も平日も休日も関係ない。全てに植物が優先し、家族や子供を二の次にしてきた。それを許す家族には感謝しなければなるまいが、多くのワニ園従業員はそのような家族に支えられているのである。

慣れとは恐ろしいもので、この生活に慣れると、9 時間際に出勤していく町の公務員などを見かけると、何て怠け者なんだという気持ちなる。当然と言えば当然の感覚だろう。

「ここはいつ来ても綺麗に管理されているわねー!」と言うのは我々に対する最高の褒め言葉である。

## 管理を徹底する

前段では開園前の清掃管理に関して触れたが、当園の場合、温室などの施設のメンテもまたその一環である。暮れの 1 ヶ月以上は園内の大掃除とペンキ塗りなどに追われる。園に 51 年の歴史がある以上、施設も同様に古い建物が多く、それは温室なども例外ではない。だから職員総出で温室のガラスや汚れを洗い、配管などのペンキ塗りをして、リフレッシュした気持ちで新年を迎えるのである。

そのような管理に関しても先代園長の逸話がある。当園には 1500種 1万株を超える原種ランのコレクションがあり、私はよくこの温室を案内している時お客さんに説明する。

先代の園長は厳しく、植物に終わった花や枯れ葉があるのを取るのは当然だが、勿論害虫や鉢の雑草などは言語同断である。草などが生えていようものなら手厳しくしかられる。ましてランの鉢がコケなどで青く汚れていれば、なぜ洗わないんだと責められる。鉢が綺麗になれば棚の汚れが見える。棚が綺麗になると棚下や通路の汚れが見える。なぜ洗わない!すると次はガラスの汚れである。ガラスが綺麗になると今度は外の草が見える。外のフェンスの錆が見える。なぜ草を取らない!なぜフェンスにペンキを塗らないんだとやられる。そう徹底的にである。

そうすることによって、綺麗な環境が出現し、お客さんの目には、植物の背景にある老朽化した施設が一切目にはいなくなり、綺麗に管理された植物とその雰囲気を楽しむことが出来るのである。

## キューの園長の提言

ここに面白い話がある。以前日本植物園協会が、世界に冠たる英国の王立キュー植物園の園長を呼んで講演してもらったことがある。その際、当園にも見学に来ていただいたのだが、園内が余りにも綺麗になっているため、キューから研修生を送りたいと真顔で言われたのである。

綺麗にしてあるという事は、その裏に確固たる学問的裏付けがあり、研究部門なども充実しているのであると思うこませてしまう作用がある。キューと言えば、各国を代表するような植物園の園長クラスをトレーニングする研修コースもある程、世界のトップに君臨する植物園である。その園長の目をも欺く程、当園の管理は行き届き、思わずそんな話題を口にしたのであろう。応対していた我々はただ苦笑いするだけであった。

似たような話がやはりキュー関連であった。1992年 6月、東京池袋の東武百貨店がリニューアルオープンに際し、キュー植物園を呼んで「王立キュー植物園展」を開催した事がある（写真－ 3）。

その際、展示責任者として来日した担当者は事前に当園を視察して、やはりその綺麗さに驚いたようである。勿論、展示会は大成功で、キューの展示の素晴らしさ、デパートなのに室温を 18℃に設定して植物を最終日まで持たせる徹底した管理には、我々も度肝を抜かれた。6月なのに冬



（写真－ 3）  
英国王立キュー植物園が初めて海外で展示会を行った、「英国王立キュー植物園展」のパンフレット。  
キューの名に恥じない素晴らしい展示会だった。

の背広でも寒いような会場温度だったからである。

その担当者が展示最終日の撤収に際し、私に向かって「俺たちが最終日まで枯葉一枚見せなかったぞ!」と言ったのである。何万人のお客様よりも、我々の植物園にライバル意識を持って展示会に取り組んでいたのである。この一言は嬉しかった。

## 楽しんでもらえばよい

当園の基本スタンスは管理を徹底するとともに、お客様に楽しんでいただくということにある。所狭しと飼育されているワニやレッサーパンダ、ゾウガメ、アマゾンマナティーなどの動物を間近に見て喜んでもらえればよいという考えである。

美しい植物に囲まれて、リラックスしたりリフレッシュできたりすればそれでよいという発想である。

そうすることによって、口コミで客を増やし、宣伝費はほとんどかけないという方針で園は 50年余を過ごしてきた。しかし近年の落ち込みは厳しく、小勢のスタッフで必死になって昔の行き届いた管理スタイルを守っていくら綺麗にしても、お客さんが来てくれないという時代になってしまった。

そこで昨年、園は開園 50周年ということもあり、ワニの展示施設を改修し、偽岩で雰囲気作りをした水族館形式の横から見る施設を導入した（写真－ 4）。要するに、これまで上から背中ばかり見ていたワニを、横や下から水中にいる状態のワニを観察できるようにしたのである（写真－ 5）。

これはディズニーランド風の景観でもあり、お客様には大変好評で、動員力もアップし、お客様の滞在時間も確実に延びた。そう、それだけ長時間園をエンジョイしてくれているということなのである。だから、この工事は園の経営にとっても大きなプラスであった。

## 動物にとっては

実は数年前、アマゾンマナティーを飼育していたプールの裏山が崩れ、施設は完全に崩壊し、生き埋めになったマナティーがかろうじて救出されるという大事故があった。

その結果新設されたマナティーの飼育展示施設は、横からマナティーの泳ぐ姿を観察できる水族館形式のプールになって、今回の工事の伏線となったのである。

流石にマナティーは高等な哺乳動物だけあって、当初は怖がって観客に姿を見せなかったものの、次第に慣れて、むしろ人の顔を見て楽しむようになった（写真－ 6）。今日ではむしろ立場が逆転し、マナティーが人をからかって楽しんでいるような雰囲気すらある。

だからワニ池の新築工事に際しても、我々はそのような展開に期待したのである。ところがワニは違った。ワニが臆猛な見かけによらず繊細な神経の持ち主であることは、飼育に携わればすぐわかることだが、その神経質さが想像以上だったのである。

既存のワニ池を壊して新施設を作るのだから、ワニの移動が前提となり、狭い場所に押し込まれたり、同居を強いられたりで、それ自体が全てのワニのストレスになったのが第一歩である。それに続く工事の騒音と振動、それによって昨年、ワニの繁殖には一切成功しなかった。それは今年にまで尾を引いた。

突貫工事で夏休みに間に合わせた新施設は、ワニの移動と同時に 1頭が移動のストレスでショック死するという異常事態からスタートした。

翌日からの一般公開でも、ワニはプールの隅にまとまって動かず、ひたすら観客の視線に耐えているという雰囲気であった（写真－ 5）。

すぐに慣れるだろうという我々の読みは甘く、1年以上が



（写真－ 4）  
バナナワニなる可愛いキャラクターを配し、新装なったワニの飼育展示コーナー。



（写真－ 5）  
このように横からワニの生態を観察できるため、お客様には大変好評なのだが、ワニにとっては大変なストレスらしい。



（写真－ 6）  
愛嬌のある動作でお客様に大人気のアマゾンマナティー。ワニにもこれを期待したのだが、思わぬ展開に。

経過した今でも、ワニにガラス越しに見られるストレスへの慣れは見られないのである。ワニにはストレスを感じる本能はあっても、人を見て楽しむような、マナティーに見られる高等な知能は存在せず、結果的にストレスばかりが蓄積しているのである。

その1番目立つ場所に収容した、当園で最も貴重なワニとも言えるインドガビアルが、3頭のうちの1頭が移動のショックでその日のうちに死に、続く1年の間に残った2頭も殆ど食事をせずに絶食死するという悲劇が続いた（写真－7）。

強制給餌などの手当てを施し、何とか生かそうとしていた飼育担当者にとっては、なんともやりきれない結果である。

動物園的なセンスの良い展示を目指し、またお客さんにとっては観察しやすい、言うなれば社会教育に資するような展示を目指した新施設が、結果としてワニにストレスをもたらし、悲劇的な結末を迎えたことは、動物園的な展示の限界を意識させる出来事でもあった。

学芸員の仕事は

ワニ園に学芸員は2名いる。しかし研究室の担当で学芸的な仕事をするのは私ひとりである。もう1名は現場のトップであり、園運営の全てを統括する立場で学芸員の仕事をする立場にはない。では私は研究室に座ってられるのかと言うと、それは不可能である。朝7時から5時までは分園の責任者として現場を指揮し、率先して作業に取り組み、皆が終業後帰宅して初めて部屋に戻れるのである。

勿論、他の職員同様担当する温室もある。工事、暑中の長時間の駐車場整理などに追われ、その後部屋に戻っても仕事にならない日も多いが、それからが学芸員の仕事である。これが30年近く続く私の日課である。

私の基本的な仕事は動植物のファイル整理、その出入りの管理、記録の保存である。またマスコミへの対応、報道原稿の作成、電話やインターネットで寄せられる各種質問への対応、あらゆるアンケート等への対応、海外への対応。およそ営業、経理と売店、ホームページ関係以外の仕事は全て私の担当である。勿論、日頃からお世話になっているこの静岡県博物館協会への対応、日本動物園水族館協会のワニの種別調整者としての仕事もある。

そんなパタパタでこなしている仕事だから、昨年、コンピュータが壊れて植物ファイルと導入記録が失われた時は大きなショックを受けた。写真などの大容量の記録はちゃんと



(写真-7) 貴重なインドガビアルを、一番広々として陽当たりの良い、最高のプールに移動したつもりだったが、悲劇的な結末を迎えてしまった。

バックアップをしてあったのに、なぜかファイルだけ抜け落ちていたのである。忙しいを口実にバックアップを取らずに続けていた作業が破綻した瞬間であった。

勿論、ファイルに触れたこともない他の職員には、何の痛痒も感じない非日常的な出来事だろうが、私にとっては手足を失ったような感覚である。その後、古いファイルを見つけ出したが、それでも10年分位の記録は完全に失われてしまった。

研究室にはもう1つ大きな仕事がある。それは友の会の事務局としての仕事である。実はこれが私の夜の仕事の大半と言っても良いかもしれない。

熱帯動植物友の会

熱川バナナワニ園には、会費制で、しかも独立採算で運営される熱帯動植物友の会という友の会組織がある。日本全国の熱帯植物の専門家、大学教授、植物園関係者、薬大関係者、熱帯植物業者、ワニ専門家、趣味家を網羅し、会員数は430名余りである。その要に事務局の私がいて、手紙やメール等で情報を交換し、また植物などの寄贈も受けて、友の会自体が園をバックアップする知恵袋的な存在にもなっているのである。

とにかくこの人脈は心強い。私が帰宅後も寝るまでメールのやり取りに追われるのも、殆どはこの友の会会員なのである。これが学芸員としての私の生き甲斐と言ってもいいかもしれない。

熱帯動植物友の会会報

友の会には事務局以外にもう1つ大切な仕事がある。熱帯動植物友の会会報という季刊誌の発行である（写真－8）。

大体各号24ページから28ページくらいにまとめているが、1972年の創刊以来37年を経過し、今日までに143号、延べ2250ページを越える歴史と実績を誇っている。

特にこの会報の表紙にはこだわりがあり、毎号、園内の植物で、国内で初の開花例とか、国内で初めてカラーで紹介される植物等を掲載している（写真－9）。

私は園のスタンスを1観光施設にとらえ、お客様を楽しませればよいと書いてきたが、一方園の博物館的作業の実績は全てこの会報に集約されていると自負している。

一般のお客さんに対しては、博物館云々と言って宣伝する必要も感じないし、そうしようとも思わないが、友の会の会員とこの会報に対しては、私は120%学芸員として接し、またこの会報のハイスタンダードを維持することが、私の使命であり学芸員としての矜持であると自負している。

逆に言えば、不況により園の経営状況が悪化し、どれだけ仕事が忙しくなろうと、この会報の編集だけは手を抜かない。定期に発行して常に会報の充実を模索しているのである。

私が担当するようになって20年を越え、昨年からはオールカラー化も実現したこの会報、博物館相当施設として評価される仕事を、私はこの1点に絞って全力投球してきた。そのために自分の休日のほとんどを研究室で過ごす生活スタイルも苦ではないし、会報の原稿を書き編集することは私の学芸員としての楽しみであると言っても良い。

動植物園という博物館的な仕事を前面に出しにくい民間の博物館相当施設において、このような形での活動が、我々の出来る仕事の限界かとも思うが、国会図書館や王立キュー植物園などにも納本している会報は、ワニ園の存在の証として十分誇りうるものだと思っている。



(写真-8) 私が学芸員としてもっともこだわる仕事、それが37年目を迎えた、この熱帯動植物友の会会報の発行である。例えば最新号のこの表紙の植物、多分国内の図鑑などでは画像を見出せないはずである。



(写真-9) 1998年、日本植物園協会の中国雲南省調査で発見されたバナナの新種ムサ・パラコクシネア。2007年秋、熱川バナナワニ園で初開花し、会報136号の表紙を飾った。勿論そこに私の自慢話が添えられているのは言うまでもない。



# 博物館の担えること

奇石博物館 管理本部長 荻原 美広

## 1 社会教育施設から生涯教育施設への重心の変化

博物館法が 2008年に一部改正された。改正といってもその内容は直ぐに博物館運営に影響するところは無いように思われるが、長期的に見たときにそれは博物館にどの様に影響するのかを博物館の担えることの視点で考えてみたい。

博物館の役割について改めて自問してみるにあたり、博物館とはどのような施設なのかを、来館者側（外側）と博物館側（内側）の認識について再確認したい。試しに広辞苑では博物館を「古今東西にわたって考古学資料・美術品・歴史的遺物その他の学術的資料をひろく蒐集保管し、これを組織的に陳列して公衆に展覧する施設。また、その蒐集品などの調査・研究を行う機関」（第四版）と説明している。それではもう少し踏み込んで博物館法ではどう定義されているのか。同法第 2条で『「博物館」とは歴史、芸術、民俗、産業、自然科学に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関』と定義している。更に、同法第 3条 1項ではこれに続いて博物館の目的を達成するために次の 11号の具体的な事業を挙げている。

- 1 実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等の博物館資料を豊富に収集し、保管し、及び展示すること。
- 2 分館を設置し、又は博物館資料を当該博物館外で展示すること。
- 3 一般公衆に対して、博物館資料の利用に関し必要な説明、助言、指導等を行い、又は研究室、実験室、工作室、図書室等を設置してこれを利用させること。
- 4 博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。
- 5 博物館資料の保管及び展示に関する技術的研究を行うこと。

- 6 博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等を作成し、及び頒布すること。
  - 7 博物館資料に関する講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助すること。
  - 8 当該博物館の所在地又はその周辺にある文化財保護法の適用を受ける文化財について、解説書又は目録を作成する等一般公衆の当該文化財の利用の便を図ること。
  - 9 社会教育における学習の機会を利用して行った学習の成果を活用して行う教育活動その他の活動の機会を提供し、及びその提供を奨励すること。
  - 10 他の博物館、博物館と同一の目的を有する国の施設等と密接に連絡し、協力し、刊行物及び情報の交換、博物館資料の相互貸借等を行うこと。
  - 11 学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助すること。
- また、同条 2項には「博物館は、その事業を行うに当たっては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。」と定めている。

広辞苑の説明と博物館法第 2条の定義は内容的には変わらないもので来館者側からの博物館に対する認識として違和感はないと思われるが、第 3条 1項の 11事業と 2項になるとその中に博物館側の者にしか見えない事業が出てくる。それでも内部の研究事業である 4・5号を除くと、概ね 7号までは来館者側からも博物館の事業として認識されている範疇に入っていると思われるが 8号以降になると来館者側の博物館事業の認識範囲からはずれて、博物館側のみが知る事業となる。

この来館者側から知られにくい事業が近年博物館の事業として要求されている。広辞苑の説明には出てこない博物館の事業が注目されているのである。今回の博物館法改正によって 9号は新たに盛り込まれた条文である。9号以降は博物館に対して他の施設との関係強化を求めた条文である。これは何を博物館に求めているのだろうか。

1988年に当時の文部省は 1945年以来続いていた社会教育局を生涯学習局に改組した。当時、社会構造の多様化や週休 2日による余暇時間の拡大に伴い教育を取り巻く環境が変化し、学校教育とそれまでの社会教育という縦割りでは人の一生に亘る教育を充足できなくなってきた。学校教育を基礎とした上で、その人の生涯に関わる教育全体について考慮しなければならない社会になってきたからである。改組前の 1981年に出された中央教育審議会答申ではそのことを、「今日、変化の激しい社会にあつては、人々は、自己の充実・啓発や生活向上のため、適切かつ豊かな学習機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意志に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自ら選んで、生涯と通じて行うものである。この意味では、これを生涯学習と呼ぶのがふさわしい」<sup>(1)</sup>と述べ「生涯学習」という言葉を使っている。答申では続けて「生涯学習のために、自ら学習する意欲と能力を養い、社会の様々な教育機能を相互の関連性を考慮しつつ総合的に整備・充実しようとするのが生涯教育の考え方である。言い換えれば、生涯教育とは、国民 1人 1人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てられるべき基本的な理念である」と記している。生涯学習と生涯教育という二つの言葉を使い分けて、生涯学習を促進援助するために教育機能を整備充実させるという教育理念が生涯教育であるとしている。筆者はこれを個の立場からみた“学び”が「生涯学習」で社会から見た“学び”が「生涯教育」であると理解している。倉田公裕は生涯教育を「生涯教育とは、一生教育を受けなければならぬといった受け身の姿勢でなく、個人が自発的に（生涯にわたり学習）することが必要であることを自覚することであり、また、社会の変化に適応し、社会をよりよく改善するために、生涯にわたって学習することが必要であることを自覚させる教育であるといえよう」<sup>(2)</sup>と述べている。

以上のような経緯を経て博物館は自分たちの置かれる場所が社会教育機関から生涯教育機関に変わった。博物館は 1949年に制定された社会教育法の第 9条で「図書館及び博物館は、社会教育のための機関とする」と定められて社会教育機関となっていた。従前、社会教育は成人教育を意味し教育から家庭教育と学校教育を引き去ったものとされた。<sup>(3)</sup> 筆者もその様な雰囲気が残る中で博物館学を学んだ記憶がある。展示を含めた博物館事業の主対象は成人で

あり学校教育対象者を意識することは少なかった。これが生涯教育機関になったことで博物館に求められる事業が 7号までの機能以外に広がった。1990年には社会教育審議会の社会教育施設分科会が「今日、所得水準の向上、自由時間の増大、高齢化の進行等に伴い、人々の学習意欲は高まりをみせ、中略 生涯にわたって学習する人々の著しい増加をもたらしている」<sup>(4)</sup>としてこれからの生涯学習時代に博物館が期待される役割を十分に果たすための在り方をまとめた。

今日、9号以降の事業ニーズが高まっているというのはこの様な流れの結果である。この変化は表面的には小さいように見えるが筆者は博物館にとって時間の経過と共に拡大して行くと考えている。それは同じ社会教育機関の図書館や公民館から比べると博物館が社会の変化に対して積極的に順応しているし、順応しないと生き残れないと見るからである。新井重三は 1979年発行の博物館学講座の中で「博物館自身が歴史の流れの中で変化発展してきたし、今後も進化していくであろうと信ずるからである。したがって、現在、多くの博物館学者は博物館は教育機関として位置づけているが、今後この考え方が継続される保障はない。再び保存機能が重視されて研究保存機関になるかも知れないし、また、方向を変えて教える側から発想した教育機関はしだいに変貌して学ぶ側に立って活用できる学習センターへと移行するかもしれない。」<sup>(5)</sup>と述べているが、博物館に 30年ほど身を置く筆者はその言葉の先見性を実感している。

## 2 広がった事業

以上のような変化の波を受けて具体的に行われるようになった事業を筆者の属する博物館の活動紹介を含めて見てみたい。結論から言うならば、博物館法第 3条 1項の 11号に触れられている中で館種により差はあるが、学校との連携強化の事業が顕著になったという事である。しかもその活動は法整備よりも博物館側の活動が先行しているというのが筆者の印象である。

先の社会教育施設分科会の報告には具体的な取り組みの一つとして、学校教育と博物館の関係緊密化を上げ、学校側に学校教育の中で博物館を利用して学習効果を高めることを、博物館側に博物館活動に教員の参加や教員向けの講座開設などを盛り込むことを促している。<sup>(6)</sup>

1996年に生涯学習審議会で「学社融合」という考えが示された。これはそれまでにあった学社連携という概念を一



歩進めて学（学校）と社（本稿では博物館）の活動を重ね合わせて一体となって子供達の教育に取り組んで行くという理念であるが、博物館は概ねこの理念を受け入れる素地を早くから持っていた。大阪市立自然科学博物館（現大阪市立科学館）では設立時の1958年より子供のための教育プログラムとして「子供のための自然観察会」を開催してきた<sup>(7)</sup>し、1994年に開館したミュージアムパーク茨城県自然博物館では設立準備段階から小中学生を強く意識した博物館であった。高田浩次によれば博学連携・学社融合の出版物が1979年から2003年までに37点刊行されている。この内50%が2000年以前に刊行された。<sup>(8)</sup>これは博物館側の意識が早い時期から自分たちは社会教育施設か生涯教育施設かという領域に捕らわれず、あらゆる来館者層を取り込むための活動を展開している結果である。

一方、博物館の学校に向けた活動展開に対して学校側の反応には時間差があるようである。2008年に告示された中学校学習指導要領の理科には「博物館や科学学習センターなどと積極的に連携、協力を図るように配慮すること」という項目が加わった。これは他の科目についても追加された。ようやく学校側に博物館との連携（融合ではない）活動を促す動きが出てきた。

博物館側では最近、ミュージアム・リテラシーという言葉がよく使われるようになった。2009年6月に開催された日本ミュージアムマネジメント学会（JMA）大会では大会テーマを「ミュージアム・リテラシー学校と博物館」として正面からミュージアム・リテラシーを扱った。<sup>(9)</sup>ミュージアム・リテラシーは一言で言えば来館者が博物館を活用するための能力でありそれを高めるための教育プログラムである。今回は学校と博物館間でのリテラシーアップが主なテーマとなった。

2009年7月29日付けネット版読売新聞（YOMURI ONLINE）に「動物園や博物館、教育普及へ連携」<sup>(10)</sup>と題した記事が載った。美術館や動物園を含めた様々な博物館による教育普及活動が広がりつつあるとし、上野動物園と国立科学博物館と東京国立博物館の3館共同企画で開催された「上野の山でクマめぐり」を紹介した。動物園でクマの生態を観察し、科学博物館でクマの骨格標本を見ながら特徴や動物園で見た動作との関連を学び、国立博物館で熊の毛を使った鎧甲や熊の描かれた絵画や陶器を觀賞したとのこと。また、国立科学博物館では「教員のための博物館の日」という行事を設け、「学校の授業等に博物館を役立てていただくためのプログラムや教材を紹介したり、貸出標本など紹

介をしたりします。博物館にいらっやいせんか。<sup>(11)</sup>」として教師に博物館を活用してもらうためのミュージアム・リテラシーを実施している。ここにも博物館側の積極的な動きを見て取れる。



奇石博物館の出前授業風景

当館では2000年より出動石ころ探検隊を組織し、「出前授業」「出前観察会」を近隣自治体の小中学校を対象に行っている（無料）。これはそれまで行われていた学芸員が学校から講師として呼ばれて話をするのと根本的に異なる。出前授業は学芸員が博物館の資料と共に小中学校に出向き教師と一緒に授業を進めるもので、出前観察会は学校近くのフィールドに出て教室での授業を実地観察するものである。授業は学校の理科単元の中の地学の分野に則して当館で準備したワークメニューを組み合わせ、1時限を組み立てている。メニューは噴火実験、火山灰の観察、断層作り実験、地層作り実験、化石作り実験など50余りある。これらは教師のみでも行えるようマニュアル化され冊子「実践活用資料集」となっている。1メニューは長くても30分程度で通常1時限の授業では1〜2メニューを組み合わせで行う。授業の基本方針は(Ⅰ)一方的に話をする授業は行わない(Ⅱ)実験など児童生徒の参加を取り入れた授業にする（実験は全員参加で傍観者を作らない）とした。これは当館が地学という一般に馴染みにくい分野を対象としている博物館で日頃からいかに石の面白さを伝えるかに苦心している中から生まれたコンセプトである。この出前授業も最初から学校との連携がスムーズに行った訳ではない。当館が民間の博物館という事もあり、学校に働きかけるにはまず教育委員会へ事業の

許可をもらうことから始めなければならなかった。教育委員会へ事業企画書を提出し、許可を頂いた後各学校校長宛へ事業案内書を配布して希望校を募集することができた。また、校長会に出席し事業の内容を説明しPR活動を行った。それだけでは現場の教師に内容が十分には伝わらないため、教師向けの説明会を理科担当教師研修会にて実施した。ここでは具体的に行う授業の内容や博物館が持っている資料を公開し、教師に出前授業の活用を考えてもらった。その結果徐々に希望校が増え、現在では対応しきれずに断ざるを得ない学校も出るほどになった。

授業の学習効果については、「自分も将来化石の研究者になりたい。どうすればなれるのか」等の質問が寄せられるほどなので教師のみで行う授業よりは効果が上がっていると認識している。これは博物館の持っている実物資料の説得力が授業という場で効果的に発揮されるからである。子供達は「もの」から興味付けられ、好奇心が湧き、更には向学心へと向かって行く。

以下「実践活用資料集」の表の一部を示す。表は「出前授業」の計画と実施に関する詳細な記録を含んでいる。

| 出前授業 | 実施日時       | 実施場所     | 実施者   | 参加者数 | 実施内容   | 実施結果 | 実施者コメント                                  |
|------|------------|----------|-------|------|--------|------|------------------------------------------|
| 1    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 火山灰の観察 | 成功   | 火山灰の観察は、子供たちの興味を引いた。火山灰の観察は、子供たちの興味を引いた。 |
| 2    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 断層作り実験 | 成功   | 断層作り実験は、子供たちの興味を引いた。断層作り実験は、子供たちの興味を引いた。 |
| 3    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 化石作り実験 | 成功   | 化石作り実験は、子供たちの興味を引いた。化石作り実験は、子供たちの興味を引いた。 |
| 4    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 地層作り実験 | 成功   | 地層作り実験は、子供たちの興味を引いた。地層作り実験は、子供たちの興味を引いた。 |
| 5    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 噴火実験   | 成功   | 噴火実験は、子供たちの興味を引いた。噴火実験は、子供たちの興味を引いた。     |
| 6    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 火山灰の観察 | 成功   | 火山灰の観察は、子供たちの興味を引いた。火山灰の観察は、子供たちの興味を引いた。 |
| 7    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 断層作り実験 | 成功   | 断層作り実験は、子供たちの興味を引いた。断層作り実験は、子供たちの興味を引いた。 |
| 8    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 化石作り実験 | 成功   | 化石作り実験は、子供たちの興味を引いた。化石作り実験は、子供たちの興味を引いた。 |
| 9    | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 地層作り実験 | 成功   | 地層作り実験は、子供たちの興味を引いた。地層作り実験は、子供たちの興味を引いた。 |
| 10   | 2009年7月29日 | 茨城県自然博物館 | 古賀忠道他 | 17   | 噴火実験   | 成功   | 噴火実験は、子供たちの興味を引いた。噴火実験は、子供たちの興味を引いた。     |

実践活用資料集

#### 引用文献

- (1) 平成20年度博物館に関する基礎資料 国立教育政策研究所 社会教育実践センター p340
- (2) 倉田公裕 博物館学講座8 古賀忠道他 雄山閣出版 1979年 p17
- (3) 倉田公裕 博物館学講座1 古賀忠道他 雄山閣出版 1979年 p53
- (4) 平成20年度博物館に関する基礎資料 国立教育政策研究所 社会教育実践センター p67
- (5) 新井重三 博物館学講座1 古賀忠道他 雄山閣出版 1979年 p9
- (6) 平成20年度博物館に関する基礎資料 国立教育政策研究所 社会教育実践センター p69
- (7) 千地万造 自然史博物館 八坂書房 1998年 p164
- (8) 高田浩次 博学連携が博物館を活性化する 博物館研究 Vol.38 No.2 p7
- (9) JMA日本ミュージアム・マネジメント学会会報 No.53 Vol.14 No.2 2009
- (10) <http://www.yomuri.co.jp/kyo/ku/rena/j20090729-0YT8T00299.htm>
- (11) <http://www.kahaku.go.jp/procedure/press/pdf/23253.pdf>一部改変
- (12) 広井良典 定常型社会 岩波書店 2001年 p1
- (13) 新井重三 博物館学講座1 古賀忠道他 雄山閣出版 1979年 p54

博物館と学校教育の連携は社会教育施設の中では親和的であると考えられるが、問題も無いわけではない。それは博物館を学校教育の下請け機関とする様な働きである。生涯学習施設と下請け機関では何が異なるのか。それは学校教育側が博物館と連携し、自分たちの機関では補えない部分あるいは博物館機関でなければ持っていない教育ツールを、自分たちの教育の中で吟味し有機的に結合させて効果度の高い教育に仕上げるかどうかである。当然担当者にその労力が求められる。下請けは自分たちの授業の一部をそのまま博物館に丸投げして終わりとう授業姿勢である。これでは次につながるものが生まれにくい。学校の役割と博物館の役割をお互いに尊重して連携することで学習効果の高い授業を作り出すことが出来る。

最後に博物館は展示・収集・保存・調査研究の基本機能を堅持した上で、他に高齢化社会を踏まえて現役引退者との連携強化や定常型社会（経済成長を絶対的な目標としなくても十分な豊かさを実現されてゆく社会<sup>(12)</sup>）を見据えての地域との連携、更にはサステナビリティの発信など担えることがあると考えている。これは博物館には～しなくてはならないでなく、～できるという明るい可能性が広がっていることを意味する。

「この世に生まれ、こうして生きているという事実」にさらに大きな喜びを見出すための、一過程が教育なのであると言えないだろうか。展示は一点または若干の点にしぼって興味の照明を与えるにすぎないことは明白である。それにしても（中略）より多数の人びとに更に探究をつづけるきっかけを与えることになる。」<sup>(13)</sup>というアルマ・ウイリントンの言葉は博物館たずさわる者として勇気づけられる。

# 公立個人顕彰美術館の今後について

熱海市立澤田政廣記念美術館 館長 相磯 浩

## はじめに

熱海市立澤田政廣記念美術館は、熱海市の市制施行50周年事業として、昭和62年11月3日の「文化の日」に開館しました。熱海市名誉市民であり、文化勲章受章彫刻家である澤田政廣氏の文化的偉業を顕彰するため、熱海梅園に隣接する地に設立されました。

熱海市立澤田政廣記念美術館条例の第3条には、「記念美術館は、澤田芸術を、永く後世に伝えるとともに、美術に関する知識の向上と文化の発展に寄与するため、澤田政廣の作品及びコレクション（以下、「記念美術館資料」という。）の展示及び保管を行う。」とあります。

このように名誉市民の偉業を顕彰する美術館ということで、当美術館の使命（ミッション）はある程度明確なものであると言えると思います。

しかし、このように明確な使命を持つ美術館であるにもかかわらず、開館20年を過ぎた現在、美術館だけの自助努力だけでは如何ともしがたい様々な問題や困難も見えてきました。私は、その問題の多くは、当館が「公立の個人顕彰美術館である」ということに起因するものと考えのですが、本稿では、研究紀要というような大げさなものではなく、今回このような執筆の機会を与えて頂いた一美術館職員の、日々の業務や入館者との係わりの中から得た雑感としてお読みいただければと思います。

## 熱海市立澤田政廣記念美術館の現状について

本稿のテーマが、「公立個人顕彰美術館の今後について」ですので、これから当館の現状について述べる前に、まず当館（熱海市）が顕彰する名誉市民、澤田政廣先生（以下、澤田政廣とする）の経歴を簡単に紹介しなければならぬかと思います。熱海市だけでなく、静岡県が誇るこの芸術家について、すでによくご存知だという方であれば、以下の略歴は読みとばしていただいて構いません。

澤田政廣（さわだせいこう、本名・寅吉）は、明治27年（1894）に熱海町に生まれました。19歳の年に当時在

学していた旧制葦山中学校（現在の県立葦山高等学校）を中退し、高村光雲の高弟で遠縁の木彫家山本瑞雲に師事し、木彫家としての歩みを始めました。大正10年（1921）年、27歳で第3回帝展に木彫レリーフ「人魚」が初入選。大正13年（1924）、30歳の年に第5回帝展で「白日夢」が特選となりました。以後「七姫」、「白鳳」と三年連続して特選を受賞します。昭和7年（1932）、第13回帝展では、「華炎」を出品し政府買い上げとなりました。昭和15年（1940）、46歳の時に三木宗策らとともに正統木彫家協会を結成（昭和19年、解散）。昭和21年（1946）第2回日展に「赤童子」を出品、政府買い上げ。昭和27年（1952）、58歳の年、前年の第7回日展出品作「五木の精」により芸術選奨文部大臣賞を受賞。翌昭和28年（1953）、第8回日展出品作「三華」にて日本芸術院賞受賞。以後も意欲的に制作に取り組み、昭和45年（1970）、宗教法人霊友会本尊「釈迦如来像」を制作。昭和48年（1973）、文化功労者、翌昭和49年（1974）、熱海市第一号名誉市民として顕彰されました。昭和52年（1977）、東本願寺難波別院に「蓮如上人像」、昭和54年（1979）、85歳の年、身延山久遠寺祖師堂に「日蓮上人像」を制作、同年、文化勲章受章。昭和56年（1981）奈良薬師寺西塔の尊像仏四体を制作。昭和57年（1982）東京都世田谷区名誉区民として顕彰されました。昭和58年（1983）新潟県糸魚川市に村野藤吾氏の設計による「谷村美術館 澤田政廣作品展示館」が開館。昭和62年（1987）、熱海市立澤田政廣記念美術館（開館時の名称は「熱海市立澤田政廣記念館」、平成16年に現在の「熱海市立澤田政廣記念美術館」に改称）開館。昭和63年（1988）、急性肺炎にて死去。従三位に叙され勲一等瑞宝章を追賜されました。

この略歴でも簡単に触れたとおり、熱海市立澤田政廣記念美術館は、昭和62年の開設時は、「澤田政廣記念館」という名称でスタートしています。平成16年に現在のように名称変更しましたが、紆余曲折を経ながらも開館して22年

目を迎えることができました。

施設の概要を述べる際、まずはじめとして、施設のハード面について述べさせていただきます。現在、当美術館は建築面積約570㎡の本館以外に、収蔵庫2棟を併設していますが、昭和62年の開設当初といえば、収蔵スペースとしては、本館内にわずかな収蔵庫を有するだけでした。つまり今後館を運営して行くなかで継続的に資料収集に努めるというよりは、開設準備期に購入した当館の代表的な木彫コレクションを核とする、ごく限られた数の収蔵品を通年で展示する施設として構想されていました。そのため、建物内部のイメージが、常設の木彫作品をはじめブロンズなどの彫刻作品1点1点が、アールを多用して設計された壁構造の壁面のくぼみに一つずつ納まるかのようなイメージで構想されました。このイメージは、当館に先立って昭和58年に開設された、新潟県糸魚川市にある村野藤吾氏の設計による谷村美術館を参考にしたものです。「美の本態は極めて素朴なもの」という澤田政廣の言葉をもとに、「外観は大地に置かれた苔むした巨岩のように、内部は曲線で構成された体内のように…」澤田政廣の彫刻作品を優しく包み込む「百年後を考えた文化遺産」として建設されました。

よその自治体の個人顕彰美術館では、しばしば見られるように、顕彰展示スペースと併わせて市民ギャラリー的な展示スペースが澤田政廣記念美術館でもあればよいのですが、先に述べたように展示空間が彫刻作品1点1点を包み込むかのような館内デザインであるため、当館の展示室は、澤田政廣作品の展示のためだけに特化されているとも言えるでしょう。地震などの揺れには強い、つまり耐震性に優れているといわれる壁構造の展示空間ですが、そのためには様々な企画展示に必要不可欠な可動壁面の発想は、当初の構想から除外されてしまいました。

地域市民の公立美術館に対する大きな期待の一つとして、市民あるいは地元作家の作品を展示するギャラリーであってほしい、というようなことがよくあげられます。さらに言えば地元作家の発掘あるいは育成ということも望まれているでしょう。しかし現在の澤田政廣記念美術館では、いま述べたような理由により、物理的にとても困難な状況にあります。

「可動壁面が無くても、市民ギャラリー的な活用ができるではないか」、「絵を掛ける壁さえあればよいのだから市民の作品を展示できないか」などのご意見をよく頂戴します。しかし澤田作品の展示のために特化された内部空間にお

いて、もし仮に、一部の壁面だけだからといって市民ギャラリー的に運用したとしても、有機的にデザインされた内部空間では、澤田芸術と市民作品が混在してしまうかたちとなり、結局メリハリの無い展示になってしまうだけでなく、澤田政廣を顕彰する本来の目的でさえ危ぶまれる結果となってしまうでしょう。

また現在では、開設当初の収蔵資料が少ない頃と違い、収蔵庫も慢性的な狭小状態となっしてしまっています。そのため、展示室の一部分を仮に一定期間だけ市民ギャラリーとして開放するとしても、その撤収した資料の行き場所が十分に確保できないような現状です。

次に、人的なソフト面について言えば、現在、職員は館長である私を含め、常勤職員4名で運営しています。そのうち2名が市の正規職員、他の2名が市の財団法人の職員です。

昭和62年の開館当初は3名体制でしたが、次第に職員数も増え、平成6年度から平成15年度まで5人体制でした。しかし、景気の低迷と同調するかのよう、その後平成16年から現在まで4人体制となっています。今後さらに人員削減とらないともいえない状況です。

美術館の専門職である学芸員についていえば、平成6年に学芸員として着任した私が初めて学芸員資格を有する職員で、それ以前には学芸員はいませんでした。その後も学芸員有資格者は私1名のみとなっています。このことは、開館当初の「記念館」という名称が端的に表していることと全く無関係とは言えないと思っています。つまり、当初に熱海市が購入したコレクションの核となる作品を、そして大きな展示替えもすることなく通年で展示している、ただそれだけの施設（記念館）であるならば、今日のようなさまざまな展覧会を企画立案したり、あるいは他館と作品の貸し借りをを行う際、実務担当として前面に出て業務を行う、そのような意味での学芸の専門職員は、必ずしも必要とされていなかった、ということだったのかもしれませんが。（もちろん学芸員の仕事が、展覧会の企画立案、作品の貸し借りの実務や渉外だけではなく、作品の保存や調査研究等も重要な仕事であることは言うまでもありませんが…。）

先に紹介した当館の条例に見たように、当館のミッションである「澤田芸術を、永く後世に伝える」ということに限って館の運営を考えるとすれば、他館の作品を借りて行う企画展示やその業務を行う学芸員も、開設当初はさほど必要とはならなかったと思われます。

以上、施設のハード面と、館を運営する上での人的なソフト面とに分けて、ごく簡単に述べさせていただきました。このように昭和62年に開設され、当初は地元の熱海市民をはじめ、観光名所である熱海梅園を訪れる来遊客が足を運び、多くの来館者を集めた澤田政廣記念美術館でしたが、数年後にはその入館者数も減少に転じてしまいました。

開館当初の数ヶ年、まずは順調に右肩上がり入館者数であったものの、開館4年目であった平成2年度の49,622人をピークに減少に転じてしまいました。以後、職員の努力にもかかわらず入館者数は毎年減り続け、平成18年度には、13,000人台にまで落ち込んでしまいました。

美術館の抱える問題点

その入館者の減少傾向の理由ですが、私なりに次のような点を考えています。詰まるところ、それらの理由は、当館のミッションと深く関わっているのではないかということです。開館して20年を過ぎた今日、このような入館者の減少傾向に端的にみられる問題点の克服には、今後、館長をはじめとする美術館職員の努力だけでは、根本的な解決が困難もしくは限界があるのではないかと思います。

第一に、当館のミッションそのものとも言えますが、そもそも名誉市民澤田政廣の功績を顕彰するための美術館として開設されましたので、収集・展示資料については、やはり条例による制約があります。ごく限られた予算を執行してまでして他の作家の作品を収集することは勿論のこと、他の作家の企画展示を行うこともいろいろと困難がともないます。少し回りくどい書き方をしてしまいましたが、要するに「澤田政廣に関係なければ、収集もしなければ、展示もしない」ということです。（ミッションによる施設面や人財的な面でのかわりは先に述べましたので繰り返し言及しません。）

今日では、当館の収蔵資料も、20年前の開館当初からは比較にならないほど増やすことができました。それらのほとんどが遺族からの彫刻、油彩、素描、墨彩画、石膏原型、澤田政廣コレクションなどの寄贈作品で、点数から言えば全収蔵資料の90%以上を占めます。その他が、篤志家からの寄贈・寄託、熱海市による石膏原型からのブロンズ鑄造制作などです。ですので、当館では、他館から作品を借りるようなことはほとんどありませんが、当館が収蔵する資料だけで展示替えを行い、定期的に企画展示を行っています。

それらの企画展示の例を幾つか挙げれば、「澤田政廣 仏教の世界展」、「澤田政廣 古事記の世界展」、「澤田政廣 風景画展」、「澤田政廣 彫刻とその下絵展」のように作品の主題をテーマにした企画展、また「澤田政廣 デッサン展」、「澤田政廣 墨彩画展」、「澤田政廣 木版画展」などのように作品の形式（ジャンル）による企画展示などです。

もっとも、「仏教の世界展」で展示した作品が、館内では一年を通じて常設で展示されていたり、「彫刻とその下絵展」の展示作品が「デッサン展」でも展示され重複していたりということは度々あります。しかし、ここで紹介したような、これらの企画展示は、数年おきのサイクルで展示されており、他の企画展示と重複して展示される幾つかの作品も、他の企画展示の時とは異なるアプローチあるいは脈絡で紹介するため、単なる一元的ではない、本来作品が有する多層的意味を展観させた展示となっていたと思います。

しかし、一般市民から見ればどうなのでしょう。当館は、いつも澤田政廣の同じ作品しか展示していない美術館というように思われているのかもしれませんが。実際は、先ほど述べたように定期的に展示替えを行っていますし、澤田氏のコレクションであった他の作家の作品や骨董品なども幾度となく展示しています。ただそのどれもが、澤田政廣と関係のある資料（つまり澤田政廣の個人コレクション）ということになります。それらのいずれも澤田政廣というフィルターをとおして収集されたものであることもあり、澤田政廣のカラーが出ているという点では、一部の人から見ればやはり変わりばえのしない美術館というように写るのかもしれませんが。

たいへん乱暴な例えかも知れませんが、古今東西の美術の様々な表現をトランプのカードに例えるとしたらどうでしょう。澤田芸術は確かに昭和の時代の彫刻を代表する素晴らしい芸術であるでしょう。しかしながらそれは、古今東西の膨大な美術の表現の中のほんの一握りでしかありません。例えば、美術史における澤田芸術の位置を、仮にトランプの一つの絵札に例えたとします。なるほど、その芸術は、特定のジャンルのみならず美術史全体から見ても、それなりに優れたものであると言えるでしょう。しかし、美術愛好家のみならず一般の市民は、その1枚の絵札だけを繰り返し眺めて、いつまでも満足できるものなのでしょうか。ほとんどの人がその素晴らしさは認めたとしても、やはりも

っと他のカード（他の芸術作品）も見てみたいと思うに違いないと思うのです。しかし、その個人の偉業を顕彰する記念美術館となると、いつも同じカードしか展示することが出来ません。地域市民の不満の大きな要因のひとつは、このようなことなのだと思います。クラブの絵札以外にも、スペードやダイヤ、ハートも見てみたいのに、ということなのだと思います。

例えば、同じ絵柄のエースからキングまでを、仮に、ある一つのジャンルの通時的な表現様態（表現の変遷）と考えます。一方で異なる絵柄の同じ数字のカードを、様々な美術表現の共時的様態（表現の多様性）と考えます。一つの美術作品の特徴や素晴らしさを、作品そのものだけで示すのではなく、異なる他の作品と展示する場を共にし、同時に観覧に供することによって、作品の通時性・共時性の観点から、その特徴を明らかにしてゆくという手法は、学芸に携わる者なら誰もが知っていることです。しかし、当館では、そのミッションゆえの様々な制約により、このような通時的・共時的な展示手法は、かなり困難にならざるを得ません。

新たな試みとして

以上のように、本稿では先に当館のネガティブな面ばかり書きすぎたかもしれません。ここまで読んで下さった方の中には、澤田政廣記念美術館は、個人顕彰美術館として、開館から20余年経ってなお旧態依然とした運営しかしていないと思われたかも知れません。しかし、今年度一つの新たな試みを行いましたので、次に紹介したいと思います。

すでに何度も述べましたが、当館は、名誉市民澤田政廣を顕彰する美術館ですので、今まで澤田政廣以外の企画展を行うことはありませんでした。澤田政廣の個人のコレクションであった他の作家の作品を展示したことは、過去に何度もありましたが、澤田政廣以外の他の作家の企画展を行ったことは今まで一度も無かったのです。しかし、今年度、開館して以来初めて、他の作家による企画展を行いました。

それは、写真家、荒 多恵子（あら たえこ）さんによる写真展でした。『『胸神（muna kam i）』一澤田政廣の彫刻に魅せられて一』（平成 21年 10/9から 12/24まで）と題されたこの企画展は、当館が所蔵する澤田政廣の彫刻をモチーフにして、およそ1年がかりで彼女が撮影し

た新作15点を一堂に発表したものでした。熱海市に別宅を持ち東京在住の荒さんは、数年前に乳がんを患い、片胸を失ってしまいました。展覧会のタイトルにある「胸神（muna kam i）」という聴きなれない言葉は、自分の代わりになって逝った失われた乳房のことを指す、荒さん自身による造語です。乳がんを患ってから本格的に写真を始め、日々“生きる証”として写真を撮り続けている荒さんは、前作の『『胸神（muna kam i）』一乳がんになった日から一』で第13回土門拳文化賞奨励賞を受賞しました。今回、当館で開催された『『胸神（muna kam i）』一澤田政廣の彫刻に魅せられて一』は、辛い闘病生活を乗り越え、無事がんを克服した彼女自身の、生きていることへの感謝や喜び、そして澤田政廣作品へのオマージュとも言えるものでした。まず私が感銘を受けたのは、私たち館の職員が毎日見慣れているはずの常設の作品が、彼女のカメラのファインダーを通して作品化されると、今まで気付かなかったような視点、大胆なアングルによって、思いがけない美しさがそこに表現されていたことでした。

この展覧会は、美術館の中二階部分で開催されました。規模的に決して大きいとは言えない展覧会でしたが、二ヶ月を超えるこの会期中、実に多くの反響がありました。同じ病気で苦しんだ方々からの「感動した」、「勇気もらった」、「元気付けられた」などといった言葉が、会場に置かれたノートに数多く残されました。

また、会期中、展覧会に関連させて、荒さんと知り合いのゲストをお迎えしてのトーク・イベントを2回行いました。講座室を持たない当館では、展示室内の等身大以上もある彫刻作品を一時的に移動させて、何とか会場を設営しました。展示室の床にパイプ椅子を並べ、二人分のマイクとプロジェクターを用意しただけの簡単なイベントでしたが、ふだん当館にあまり足を運ばれないような若い女性や、同じような病気を体験された方々が多く見えました。小さいながらも、とても有意義なイベントであったと思っています。

年間を通じて様々なイベントやアトラクションを随時行っている他の美術館からすれば、当館のこのような経験は、取るに足らないごく当たり前のことなのかも知れません。しかし、公立の個人顕彰美術館ということで明確なミッションのもと、ある意味で運営上の自由度が制限されている当館にとっては、小さなイベントではありましたが、とても大きな一歩であったと思っています。



最後に

以上、当館のミッションに深くかかわる問題点と、今年度当館が行なった新たな試みについて述べさせていただきます。

小規模館である当館には、講座室、図書資料室、市民ギャラリーがありません。ですから地域に根ざした美術館であるなら本来当然そうあるべき、市民の発表の機会を作ったり、地元作家を新たに発掘したり、体験型ワークショップなどの活動で市民と交流を図ったり、ということがとても困難です。また、「友の会」や美術館ボランティアを組織することも難しい状況です。

私をはじめ、美術館職員の努力が十分でなかったかもしれないという反省も含めて、敢えて書かせていただくのですが、今日、澤田政廣の芸術の素晴らしさ、あるいはその価値が、今の若い世代の人たちには、いまひとつわかりにくいのではないか、ということがあると思います。

私たち日本の社会は、ここで言うまでもなく、昭和の30年代の高度経済成長期の頃から急速に変化をとげました。家庭での核家族化が進んだのもその一つです。かつては今日とは比較にならないほど多くの家庭で、親子孫の三世代が同居していました。また必ずといっていいほどそのような家には仏壇があり、朝夕の食事は仏壇の前で家族が食卓を囲んだものでした。例えば、食事をいただく前に両手を合わせるようなことは、今日よりずっと一般的であったと思います。

「彫刻家というむずかしい観念にかたまらずに日本人特有の形体を生み出すことに専念してきました。日本古来の神話や伝承の中に主題を求めたのも、日本独特の体質をなんとか造化したかったからに他ありません」、「彫刻の勉強をした者の手による今の時代（昭和の時代）の“ みほとけ ”を創りたい」。生前このように語った澤田政廣が、その生涯をかけて取り組んだ、木彫での日本人独特ともいえるその柔和な表現は、今日の多くの若い世代の人たちにとっては、すでに馴染みにくいものとなってしまっているのかも知れません。

ドッグイヤー（Dog year）という言葉があります。情報技術分野での革新のスピードを表す言葉だそうです。寿命から計算して、およそ人間の7年分が犬の1年に相当することから考えられた概念だそうです。このように、技術のみならず、社会や政治のシステムまでもが目まぐるしく変化してゆく現代にあっては、昭和の時代

の“ 今の時代のみほとけ ”を刻んだ澤田芸術も、すでに共時性を急速に失いつつあるのかもしれません。

本稿のいちばん最初に書いたように、当館のミッションは明確です。「澤田芸術を、永く後世に伝える（こと）」。そのため様々な理由で当館での運営には制約があります。しかしそれゆえ一般市民からは、魅力に乏しい美術館のように感じられているのかもしれません。入館者数の慢性的な減少傾向がそれを裏付けています。しかし開設以来、当館は、その掲げたミッションに対しては忠実に運営されてきたのです。この矛盾をどのように乗り越えればよいのでしょうか。この問題の背景には、一般市民に対して当館のミッションが正確に周知されていない、あるいは正確に理解されていないということがあるのかもしれません。

しかし、負の側面ばかりではありません。当館は小規模館ですが、澤田政廣作品の収蔵数は他の美術館には決して負けません。一部の市民にとっては、あまり変わりばえのしない美術館であっても、澤田政廣の芸術を理解し、愛してくれる人々にとっては、訪れればいつでも澤田作品に出会える美術館として好評を得ています。「澤田政廣作品を見ただけで熱海に行けばいい。」、「熱海に行けば、澤田政廣の代表作品にいつでも会える。」、「熱海梅園のすぐ隣に、小さいけれど心なごむ彫刻の美術館がある。」などとお客様から言っていただくと、職員として胸中とても嬉しいものがあります。

先に述べたように、他の作家による写真展などの新たな取り組みを通じ、今までのような梅園を訪れた観光客がたまたま立ち寄る美術館から、若い女性たちやカップルが当館を目的として来館するというように、少しずつですが新たな入館者層が開拓されつつあるように思います。

しかし今回の写真展やトーク・イベントの開催も、ノウハウが不十分であったため、まだまだ充分にその効果を引き出せていないということも否めませんでした。

よく「美術館（アート）には、異なるジャンルのものを結びつける力がある」と言われます。

今までの当館のように、美術館と観光という結びつきに限らず、やり方次第では、学校教育、社会や福祉の問題、環境問題などとも関連してアプローチすることも可能なのでしょう。そのハードルをひとつひとつ乗り越えることによって、美術館を取り巻く様々な人たちと新たな連携を構築できるのだと思っています。

余談になりますが、つい先頃、美術館の庭の裏手から

熱海梅園に橋が架かりました。熱海梅園は、中央に初川という川が流れており、その川を挟むようにして造園されています。園内は梅園五橋と呼ばれる古くからの橋が五つあり、その橋を渡れば苦勞せずに川を渡り、梅や紅葉などの自然を鑑賞することが出来ます。しかし、梅園に隣接しているとは言え、澤田美術館は梅園のいちばん山側、しかも「梅見の滝」という人工滝の上に位置していることもあり、梅園と美術館との往来は、美術館駐車場横の足場の悪い石積みの階段を通らなければなりませんでした。

この20メートルほどの高低差は、車椅子の方やご高齢者にとっては勿論のこと、一般の方々にも不便をかけていたわけですが、新たに橋が架かってからは、階段を使わずに川の対面からバリアフリーで美術館と往来できるようになりました。より熱海梅園と一体感が増したわけです。

このことは、熱海の最大の観光名所である熱海梅園に、より魅力が増したと言えると思います。熱海は温泉の街ですが、美しい自然（熱海梅園、海など）が共存する街でもあります。温泉浴と自然浴、さらに澤田芸術での芸術浴で、一人でも多くの方に身も心も癒していただきたいものです。

このように澤田政廣記念美術館は、観光地熱海の付加価値としても、今後さらに発展しなければならないと考えています。そのことによって、たとえ少しずつであっても美術館をとりまく様々な人たちとの新たな連携構築が可能となってくるのだと思っています。

今すぐにも地域再生の拠点になろうなどとは考えません。しかし少しでもそれに近づけるよう努力して行きたいと思っています。今はまだ理想でしかありませんが、本来、地域市民（熱海市民）にとって、名誉市民を顕彰する澤田政廣記念美術館は、単なる作品鑑賞だけの場ではないはずです。当館の所蔵作品の中には、熱海で晩年を過ごした文豪坪内逍遙の戯曲「役の行者」から取材して制作された「隠者」（昭和38年）、熱海の手で魚や貝を採って遊んだ澤田自身の原体験が色濃く反映されているといわれる「魚持つ女」（昭和36年）、「すなどり」（昭和37年）、「人魚」（昭和44年）といった作品があります。熱海に生まれ、名誉市民であり、熱海の自然や文化に大きく育まれた澤田政廣の芸術を展示する澤田政廣記念美術館は、単なる公立美術館というだけでなく、熱海市民のシンボルの場であるべきだと強く思います。公立の個人顕彰美術館として名誉市民澤田政廣の芸術の素晴らしさを、たとえ

細くても、いつまでも永く発信し続けられる美術館でありたいと思っています。

最後になりますが、本稿を書いていく中で、館のミッションを堅持すべき立場にある館長としての自分と、広く地域市民に開かれた美術館でありたいと願う自分との葛藤、そして市民により開かれた館の運営を実施するにおいて、さまざまな制約にもなる館のミッションに対して時として懐疑的になる自分、その三者が交互に口を挟むような形で、私の頭の中は混乱してしまいました。そのため、このようなまともに欠く拙稿となってしまいました。本稿を読まれた方の多くは、「では館長は、ミッションを堅持したいのか、それとも市民のニーズに合わせて、新たにミッション策定する方向で考えたいのか、または、現在のミッションを掲げたまま試行錯誤を続けてゆくのか?いったい美術館どうしたいんだ?」と思われることと思います。しかし、どうしたいのか、あるいはどうしたらよいのかは、正直に言ってまだ私にもよくわかりません。しかし、公立の個人顕彰美術館の館長（一美術館員）として、常に様々なジレンマの中に身をおいていることは少しご理解いただけることと思います。そして、私と同じような立場に身をおきながら、日々職務にあたる美術館職員の方も、きっと少なからずいらっしゃることと思うのです。テーマである「公立個人顕彰美術館の今後について」に、本稿では何一つ結論へと導けませんでした。本稿が、公立個人顕彰美術館のあり方について、少しでも問題提起と今後への参考になれば幸いです。

# 今後の美術館・博物館の役割について

上原仏教美術館 学芸員 田島 整

## はじめに

「今、博物館は危機的状況にある」という。ここでいう危機的状況の意味は多義だが、博物館・美術館の存亡という点だけから見ても、現在、博物館・美術館が置かれている状況は厳しい。世界金融危機に端を発する世界同時不況は、博物館・美術館を含む各種の文化施設の財政面に影響をあたえ、中小規模館園においてはその歴史を閉じた館も現れた。また、現在進行中の公益法人改革においても、財団が運営する博物館・美術館の改革が求められている。一方公立館を取り巻く状況も厳しく、「財政の無駄を切り捨てる」のスローガンのもと、教育・文化予算は大幅に削減され、さらに指定管理者制度の導入など、運営方法自体が大きな変革にさらされており、短期的で経済的な成功が喧伝される反面、長期的に見た場合の問題点も多く指摘されている。

もとより本稿はこれらの問題について分析、その功罪を検討することを目的とするものではないが、博物館・美術館が置かれている状況の自覚なしに、今後の博物館・美術館のあり方を真摯に考えることはできないと思われる。博物館や美術館が無用の存在であると考える人は少ないだろう。しかし社会が直面している未曾有の経済危機のなかで、直裁に言えば、博物館や美術館は今、「火急の危機回避的に」社会からリストラされてもやむを得ない存在なのか、あるいはある程度の支出を伴っても、やはり残すべき理由があるものなのかどうか社会から問われているのではないかと思われる。

本稿では以上の意識を持ちつつ、博物館・美術館の主要な活動である「収集、保存、展示、調査研究、教育普及、レクリエーションの提供」などのうち、「収集、保存、展示」に関し、これらの活動を通じて今後の博物館・美術館が社会の中で果たすべき役割について若干の考察と提言を行いたい。様々な活動のなかで、「収集・保存・展示」の3つを取り上げる理由としては、他の社会教育機関の活動と比較した場合、この3つの活動こそが、博物館・

美術館特有のものであり、顕著な特色になっていると考えらるからにほかならない。

なお、筆者の専門上、考察の対象は、歴史系博物館や郷土資料館、美術館に限定されることをはじめにお断りしておく。

## 1. 収集

### (1) 美術館における収集

資料の収集は、博物館や美術館にとって、最も基本的な活動の一つである。近年はコレクションを持たず、企画展や公募展、情報発信、教育普及などに特化した美術館も多く、経済的・財政的理由から収集を行っていない館、すでに完成したコレクションを持ち、新規の収集を行っていない館も多いが、それでも多くの館にとって、資料の収集が、基本的な活動の一つであることに変わりはないだろう。

資料の収集に関しては、古くから「館の目玉になるものを」という根強い意見がある。確かに国宝や重要文化財、あるいは有名作家の作品を収蔵・展示すれば、それを目的に訪れる来館者が現れるのは事実だろう。しかし、国宝や重要文化財はもちろん、現在活躍中の作家を除く有名作家の代表作も、その多くはすでに収まるべきところに収まっていて、収集の機会は得られないだろうし、これらの作品を購入できる潤沢な資金を持つ博物館・美術館はごく少数だろう。仮に無理をして名品を一点収蔵しても、短期的に来館者が増加することはありえるとしても、継続した長期的な集客力やリピーターが期待できるとまでは思えない。事実、1980年代、各地に叢生した美術館の中には一点の名品を購入して話題を集め、多くの入館者を集めたものの、その後、入館者数が激減、立ち行かなくなつて名品を売却したり、閉館した館も出たことは記憶に新しい。

また、一点の名品のみを館のセールスポイントとするなら、その作品を常設展示するか、常設展示が不可能な場合でも、できうる限り定期的にその作品を展示する必要が生じ、

美術館にとって最も大切な、展示プランの自由度を阻害される危険性がある。

ところで、博物館・美術館が「継続して来館し続けてくれる」意味でのリピーターを獲得するためには、競合する多くの施設の中にあつて、利用者に訴えるセールスポイントと独自性を持ち、館の個性を利用者に気に入っていただく必要がある。個性には、館の建物や環境などの側面もあるが、固有のコレクションが最も重要な要素であることはいうまでもない。しかし反面、利用者は変わり映えのしない展示に何度も足を運ぶことはないため、定期的な展示替えが必須になる。集客力を一点の名品に求めるのはこの点で無理があり、館の個性は、ある程度の量を持つコレクション群によって体现されるべきだろう。

このように考えた時、資金によほどの余裕があり、次々に名品を購入することが可能な館でない限り、「館の目玉を購入する」という観点による収集は、避けるべきだと思われる。

「収集は、館の目的や基本的性格に従って学問的、系統的に行われるべきであり、コレクション全体のなかでの、コレクションピースになりうる資料を、長期的視野に立って収集すべきである」という意見がある。こちらが収集のあり方として望ましいだろう。

### (2) 館の特質に応じた収集

当然のことだが、コレクションの方向性は個々の博物館・美術館が持つ、社会的な役割を強く意識しつつ決められるべきである。例えば美術館においては、審美的観点、美的啓蒙の観点から、レベルの高い美術品の収集を目指すことが優先されるべきで、郷土作家の作品を収集しているなどの特別な理由がない限り、収集範囲を地域的に限定することは、コレクションの質の低下を招く危険性がある。また、美術・文化施設の少ない地方において、地域の美術レベルの向上や、啓蒙を図る目的がある場合などには、海外の優れた美術品を収集、展示することが最も効果的な場合もあるだろう。

一方、各地の郷土博物館においては、その土地との関係を持たない有名作家の作品より、全国的には無名であっても、その土地の歴史や文化、地域の発展に貢献した人物に関する資料や、その土地で活躍した芸術家の作品、その土地の人々の営みを伝える民俗資料や考古資料、自然資料の収集を優先すべきだろう。

### (3) 郷土資料館における収集について

郷土資料館は、地域の歴史と各時代の住民の営為、その土地の自然と風土を、実物資料の収集・保存によって後世に伝え、展示によって再現し公開する役割を持つ。この場合、収集資料の中心は、生活用具や衣服、農具・漁具などの民具に代表される民俗資料であったり、考古遺物になる。しかしこれらの収集が時に疑問視され、ひどい時には「郷土資料館にはガラクタばかりが並んでいる」「見る価値のない展示品ばかりで行く意義がない」という酷評を受ける場合すらある。確かにこれらの資料は、美的鑑賞の対象にはなりにくく、一般の関心をひくものでもない。しかし、郷土資料館はあくまで、市民や町民の営みの記憶装置であることを忘れてはならない。郷土資料館が、地域の歴史や文化を保存、教育的配慮をもって公開することを第一義的な目的とする以上、これらの資料の収集・保存・展示こそが、郷土資料館の使命であることが認識されるべきだと思う。

ところで民具は、生活様式の変化に伴って簡単に廃棄されることが多く、一般コレクターの収集対象にもなりにくい。かつてはどこにでもあったものが、いつの間にか完全に失われてしまう危険性をはらんでいる。消滅の危機にさらされているこのような資料こそ、存在するうちに早急に収集する必要がある、ここに郷土資料館の果たすべき役割の一つがあると考えられることもできるだろう。

なお、民具のように生活に密着したモノには、改良が加えられ、各地域や使用集団ごとに独自の進化を遂げている場合も多い。これらの変異は単にデザインの変更にとどまらず、機能改良のための様々な工夫が凝らされており、形に思考と営為が凝縮されている。民具の収集にあたっては、「一揃い揃えれば良い」という考え方は問題で、実地調査と研究に基づき、地域の差異に留意した網羅的で体系的な収集を行うべきだろう。

### (4) 説明責任

以上、郷土資料館においては、民俗資料や考古資料の収集と保存が重要な役割の一つであると述べた。しかし、これらの資料の収集が一般の理解を得にくいことも先述の通りである。この場合、「正しいことをしているのだから良いのだ」というスタンスをとることには様々な弊害があると思われる。

社会情勢や財政状況が厳しさを増し、市民目線の行政

サービスが求められる今日、公の名前で活動し、公の施設を使い、公務員が行う以上、収集や保存も聖域ではなくなりつつある。今後は「何故これを収集（保存）するか」「この資料にどのような価値があるのか」という点について、教育普及活動や館の定期刊行物、講演や新聞への投稿など様々な手段を通じて、広く一般に繰り返し説明し、理解を得て行く必要がある。学術や文化に理解がないことに腹を立てる前に、否定的な態度をとる相手が、自分と同じ情報を共有しているかどうかを考えてみる必要がある。情報が共有できていない場合、情報を持つ側に説明責任があるだろう。

### （5）創作・創造としての収集

収集は多様なモノのなかから、選び取ってゆく営みである。選ぶ基準は、館の目的によって設定された収集方針であったり、個人の審美眼であったりするわけだが、いずれの場合もコレクションは、個々の資料や美術品の単なる寄せ集めではなく、学術的価値を付与された体系的資料群や、個性的な審美眼に裏打ちされた創造物であるべきだろう。

近年、青山二郎・白洲正子・松永耳庵・原三溪など、往年の大コレクターの審美眼や収集そのものをとり上げた企画展が各地で開催されているが、これは収集自体が創作活動であることが社会的に再認識され、評価された結果だろう。

こうした流れをうけ、現代の審美眼による個性的で価値創造的なコレクションを行う美術館が現れるのを期待したい。その際、賛否両論あるとはいえ、従来顧みられることのなかった雑器に美を見出した柳宗悦のように、注目されていないモノのなかから埋もれた美を掘り起こし、その収集を通じて、新しい美意識を提唱するようなコレクションが生まれても良いだろう。先述の通り、博物館や美術館は、失われてゆくものを収集し、保存する役割を担っている。真に創造的な収集は、生まれては消えてゆく様々なモノの集積の中から美や価値を見出し、後世に遺し、価値創造的に評価する側面を持つべきだろう。

## 2. 資料の保存

### （1）評価されない活動

資料の保存は博物館・美術館のうち、最も社会的に認知・評価されにくい活動である。それでも、ピカソやルノアール

の絵を後世に伝えるべく、機能が完備した収蔵庫に保存することに異議を唱える人はいないだろうが、例えば民具や大量に出土する土器の破片の保存に時間と労力、施設を使うことには疑問を呈する人が現れるだろう。「重要ではないもの、重複している資料は古美術市場に売却し、売却利益と管理コスト削減の二重の利益を上げるべきだ」という発言をした国会議員を私は知っている。

しかし、資料の価値には様々な側面があり、美術的・経済的価値の低いものが一方で学術的に重要であることはよくあることである。また、美術作品の評価が、時代によって大きく変化するのも、浮世絵や、ゴッホの例を見るだけでも理解できるだろう。

### （2）創造的保存とデータベース化

博物館・美術館は、恒久的な資料の保存を前提とし、各館の個別事情による制約があるにせよ、基本的には保存のための設備と技術、知識を結集した機関である。

保存は、終わりのない不斷の努力と細心の配慮を課される面倒で根気のいる活動である。しかし実物資料の保存は、他の機関では代替できない博物館・美術館に特有の機能であり、未来に対して責任を負う活動であることを考えた場合、今後、博物館・美術館が社会に対して果たす最も重要な役割の一つとして再認識される必要があるだろう。保存は資料を未来に送り届け続ける営みであり、資料は、未来で活用され、価値を創造する。その意味で保存は、間接的にはあるが、価値創造的な活動といえるだろう。

ただし、資料は単に保存されているだけでは何も生み出さないのは言うまでもない。個々の資料は活用しやすいように整理され、調査・研究され、その成果が容易に検索できるようにしておかなければならず、この一連の作業も保存活動の一部と考えるべきだと思われる。さらにその情報を利用しやすい形で公開するのも、今後の博物館・美術館の重要な役割となるだろう。現在、博物館・美術館・大学・研究機関を包括するデータベースが、様々なレベルで構築されつつあるが、これが完備された時、各館の所蔵品は人類が共有する知的財産として新たな意味を与えられることになるだろう。

### （3）地域に伝わる文化財の保存

私の勤務館（上原仏教美術館）では、開館以来継続

して伊豆の寺院や個人、地区が管理する仏教美術の調査を行い、その成果を企画展として発表している。調査から企画展への流れと、その過程で生まれる寺院・地域と美術館のつながりに関しては、詳しく述べる余裕がないが、このつながりのなかで生まれたのが、仏像・仏画の修理や保存について相談を受け、これに我々美術館側がアドバイスをするという関係である。

寺院が破損した仏像を修復する場合、仏師に依頼する場合がほとんどだが、オリジナルの保存に配慮する意識の欠如や、不適切な材料や手法によって、仏像の宗教的な価値は再現できたとしても、同時に持っていた文化財としての価値は失われてしまうことが多い。

仏師が仏像を修復する場合、腕に覚えのある仏師ほど、彼らから見て拙く見える部分を彫り直し、材は古くても全く新作の仏像に変えてしまう傾向が見られる。資料の修復は、保存修復に関する明確な意識を持ち、適切に修復する能力を持つ機関や専門業者に依頼すべきで、そのためには、機関や業者との間にパイプを確保しておく必要があるだろう。

博物館・美術館の置かれた状況や性格は千差万別であるため、全てかくあるべきとは言えないが、今後の博物館・美術館は自館の収蔵品の保存にのみ専念すべきではないだろう。文化財保護の見地から、保存に関する文化財所蔵者からの相談を受け、アドバイスをを行うのも、保存のプロである博物館・美術館の社会的責務なのではないかと思う。企画展に際し、博物館や美術館が、各地の寺院や個人コレクターから資料を借りる場合も多い。その際、一時的な借用とだけ考えるのではなく、自らが関わった資料としてそれらの将来にわたる保存にも関心を持ち、有効な助言を与えるべきだと思う。より積極的には、博物館・美術館は、各館が立地する地域に伝わる文化財を調査活動で把握した上、展示や講演、執筆活動など様々な方法によってその価値の啓蒙に努め、所蔵者や地域の文化財保存の意識を高めることで、貴重な文化財の保存の一翼を担うことも良いだろう。

なお付言すれば、保存はある時点で終了する活動ではなく、未来にわたって不断に継続されるべき営みである。資料は常に破損の危険性があるし、過去に見いだされ、高い評価を受けたはずの文化財が、所有者の世代交代によって価値が忘却され、不当な扱いを受けているケースも度々目にする。文化財の保存に関するアドバイスは、一

度行えば良いという性格のものではなく、繰り返し行う必要があることに留意すべきである。

## 3. 展示

### （1）仮想と現実が混在する現代

私事で恐縮だが、一昨年夏、東京に住む小学 5年生になる姪と話をしていた驚いたことがある。私が自宅（下田市在住）でカブトムシを捕らえたことを姪に話したところ、姪は「私も捕まえたよ」と言う。東京でよく採れたものだと感心していると、「ヘラクレスオオカブト」を捕まえたという。よく聞くと、バーチャルゲームのなかでの話だった。そこで私が「それはゲームの中の話だね。（私は）本当のカブトムシを捕まえたんだよ」と言うと、姪は「でも私も本当に捕まえたんだよ」と主張したのだ。

姪の主張は、反抗期の心理状況によるものかもしれない、本当は現実とバーチャル（仮想）を区別できていないわけではないかもしれない。しかし、自然が失われた都会の子供たちにとって、バーチャルゲームに登場する外国産の虫と同じ程度に、日本の山に住む野生のカブトムシはリアリティー（現実感）のない存在なのかもしれない。

テレビゲームもパソコンもない児童期を送った世代は、認識の根本に現実感覚を持ち、バーチャルな世界を人工的な架空の世界として把握することができる。しかし、生まれた時からテレビやゲーム機、パソコンに囲まれて育った世代の認識においては、バーチャル（仮想）とリアル（現実）が等価のものとして把握され混在する可能性があるだろう。

ところで、バーチャルリアリティー（仮想現実）という技術自体は、そのまま危険なものではない。しかし、刺激的で多数の嗜好に合い、面倒な人間関係も存在しないバーチャルな世界に耽溺するのは危険だろう。

現実社会のなかで他者と交流し、自らをそのなかでどう位置付け、実現してゆくかということが、子供の人格形成上、必須であることは、多くの論者によって、様々な角度から論じられている。同様に現実存在するモノを認識する際にも、外界との接触方法は重要で、量感や質感を伴った実物を、五感を動員して感じる事が認識の出発点になる。

実物に即さずに映像だけに頼れば、当然モノの認識は不完全なものになる。



このことを私自身の経験でいえば、子供時代に大好きだった大型肉食恐竜の骨格標本を、東京国立科学博物館で初めて見た時に大変失望した記憶がある。理由は、そこに展示されていた恐竜の姿が、東京タワーより大きな怪獣が暴れまわる怪獣映画を見慣れていた私にとって、あまりにも小さく感じられたからだ。これは極めて個人的な経験だが、実物に即さない認識の限界と危険性を示しているだろう。

**(2) 博物館・美術館における  
実物展示の意味と役割**

博物館・美術館の活動はその多くが実物資料を扱うことを前提とするものである。なかでも展示は実物資料を用いた情報発信であり、特に美術館で行われる展示では、オリジナルな実物の美術作品を公開することが最重要視される。

現在、膨大な量の文化財や美術品に関する書籍や図版が存在し、ネット上でも沢山の画像を見ることができる。しかしそれらはオリジナルの複製に過ぎず、実物の一面しか伝えていない。大きさや量感、質感、空間を占める存在感、角度や位置を変えて見るときに変化する作品の表情や印象など、文化財や美術作品が持つ情報や魅力を余すことなく認識し、鑑賞し、学ぶためには、実物に即するしかない。ところが、大多数の人にとって、文化財や美術作品に直接触れる機会は、博物館や美術館の展示以外になく、この点で博物館や美術館の展示が持つ意味と役割は、今後も特別で大きなものであり続けるだろう。

**(3) 生態展示とバーチャルリアリティ**

前項では、認識の根拠を副次的な映像やバーチャルに求めることの危険性を指摘し、正しい認識や鑑賞は実物によって行われるべきであると結論、現物を公開することを前提とする博物館・美術館の展示は、その意味で重要な役割を持つと述べた。しかしその一方で、現実には体験できないことを体感させることのできるバーチャルリアリティの技術は、博物館や美術館の展示に自由度と大きな可能性を与えるだろう。

従来、自然史系や歴史系博物館の専売特許のようになっていた展示手法に、生態展示がある。生態展示とは、ジオラマや背景写真などを用いて様々な環境を展示室内に再現し、そのなかに資料を配することで、それぞれの資

料が、生き、あるいは機能している状態を再現する展示手法である。例えば自然史系博物館において、日本の野山を再現したジオラマのなかに、動物や鳥類の剥製を生きているように配して展示するのがこれであり、歴史系の博物館では各時代の人々の姿や生活の再現に用いられる場合が多い。

生態展示は教育的に効果の高い展示手法であるが、展示作業が、時間的・労力的・費用面で、大掛かりになり、展示替えの際も同様の手間がかかるという欠点がある。ところでこの生態展示にバーチャルリアリティを用いれば、3D映像などを用いて、ジオラマよりもはるかにリアルな生態展示が可能になるだろう。また、映像を切り替えることで展示の変更が可能で、生態展示が持っていた欠点を解消することができるだろう。

近年、生態展示とはあまり縁がなかった美術館においても、生態展示的な見せ方が試みられている。静岡県内に例を求めれば、静岡県立美術館で 2006年 7月 26日～2006年 9月 3日の会期で行われた企画展「コレクション 20年の熱情(情) 時代を超える個性～若冲、クレーから戦後アメリカ美術まで」があげられる。この企画展では展示室の一角に日本間を再現し、展示品の一つである屏風絵を、実際に畳の上に立てて展示した。さらに照度を循環的に変化させることにより、時間帯の変化によって、屏風絵の印象が変わることを見せる展示も行われていた。この見せ方は、屏風本来の機能を、屏風が用いられる時間や空間の中で再現したという点で、生態展示といえるだろう。今後はこのような試みにもバーチャルリアリティーが活用され、従来よりも高い教育・鑑賞効果を挙げることに寄与してくれるだろう。現在バーチャルリアリティーの技術は、触感や嗅覚などを疑似体験させることも可能な段階に来ている。これらの技術により、将来は展示室で、彫刻作品や陶磁器などの触感を体感することができるかもしれない。

**おわりに**

以上、博物館・美術館における収集・保存、展示を中心に、卑見を述べた。私は学芸員歴 8年の若輩者であり、先輩諸氏を前に、意見を述べるのはいかななものかと迷ったが、事務局から「若手学芸員の提言で良い」と声をかけていただき、現時点で思うところを述べさせていただいた。雑駁な文にお付き合いいただいた読者に深く感謝したい。

最後にもう少し風呂敷を広げさせていただけるなら、私は教育・文化・芸術は一体をなすものであり、これらの充実と振興を図ることは、いささか古い言葉ではあるが、「国家百年の計」だと思っている。教育も文化も芸術も、いずれも短期的に見れば経済効果を生まず、現在の社会情勢の中では優先順位を下げられがちである。しかし翻って長期的な視野で見ると、教育は国や地域の永続的な繁栄のためには必須にして最重要なものであり、軽視すべきではない。その教育によって伝承されるべきものは文化であり、その精華が高度な科学技術であり、哲学であり、芸術だと思う。十年後、数十年後、それこそ百年後のことなど現在の火急の前に考慮してはいられないという意見も当然あるだろうが、いずれも確実に到来する将来であり、看過することは大きな過ちだと思う。また、低下した文化水準を取り戻すために膨大な時間と努力が必要であることは、世界史が証明するところだし、文化が復興しても、失われた文化財が戻ることは決してない。

日本は資源を持たない島国である。しかし一方で日本の文化と芸術は近代に至って世界に紹介されて以来、各時代に様々な形で、しかも非常に大きいインパクトをもって世界の文化に影響を与え続けている。多くの識者が指摘するとおり、日本にとって文化は世界に通用する国力であり、戦略的に振興を図るべきだろう。

文化の振興を企図する時、博物館・美術館は他の機関では真似できない形で重要な役割を演じることができる。この面でも、今後の博物館・美術館が果たしうる役割は非常に大きい。

平成20年度第3回講習会報告  
博物館における「連携」  
常葉学園大学 造形学部長 日比野 秀男

はじめに  
博物館における「連携」とはさまざまなことが考えられる。「博物館どうしの連携」「博物館と社会教育施設との連携」「博物館と学校教育機関との連携」「博物館と地域社会との連携」「博物館と地域の人々との連携」などなど・・・。  
博物館運営というものが自館の活動だけでは成り立たなくなってきたり、より一層さまざまな「連携」が必要となってきたのである。このことは意識する、しないは別として各館において自然と実施していることでもある。そこで、今回の講習会ではとくに「地域との連携」という視点から事例報告を聞き、なおかつ各館における状況について情報交換を行い、今後の各館の活動の参考とするために開催された。  
幸いに、出席された方々から原稿をいただいたので、ここにまとめて報告とすることとした。

講習会は事例発表、グループ意見交換、最終報告により実施された。

事例発表例  
「掛川市二の丸美術館と地域の文化団体との連携」  
井村広巳氏（掛川市二の丸美術館学芸員）  
掛川市二の丸美術館で実施してきた地域の文化関係団体と連携した活動についての紹介、課題と今後の展望について説明

事例発表例  
「静岡県立美術館ボランティアによる地域連携事業の展開」  
石上充代氏（静岡県立美術館学芸員）  
地域と美術館を結ぶことを目標に活動続ける“草薙ツアーグループ”についての報告

それぞれパワーポイントを交えて30分程度発表していた。そのあと、グループ意見交換がなされ、5人の参加者のコメントを最後に添付した。

事例発表例  
「掛川市二の丸美術館と地域の文化団体との連携」  
掛川市二の丸美術館学芸員 井村 広巳

はじめに  
当館では、平成19年から掛川の現代美術研究会との連携によって、「掛川現代アートプロジェクト」を実施している。実施2年で試行錯誤しながら進めている状況であるが、ここでその活動を紹介する。  
平成18年10月、掛川の現代美術研究会より、中心市街地活性化及び美術館の集客装置として、美術館を核としての事業の提案を受けたことが、この事業の始まりであった。その内容は、近年美術館を観光資源として街の活性化が進められている事例がみられることから、当館の所蔵品の特徴を生かしながら、現代アートを取り入れ美術館と街なかを活性化していこうというものであった。アートプロデューサー山口裕美氏から企画の提案を受け、美術による街おこし、掛川の街なかと美術館に適した展覧会・イベントを協議し、掛川現代アートプロジェクトは開始された。  
掛川の現代美術研究会であるが、平成14年に発足し、JR掛川駅周辺のモニュメントやブロンズ像の清掃やその説明板の設置などを行っている団体である。

「街なか&美術館 アートコラボ大作戦」  
プロジェクトの一つが「街なか&美術館 アートコラボ大作戦」である。これは街なかから芸術の情報発信をし、商



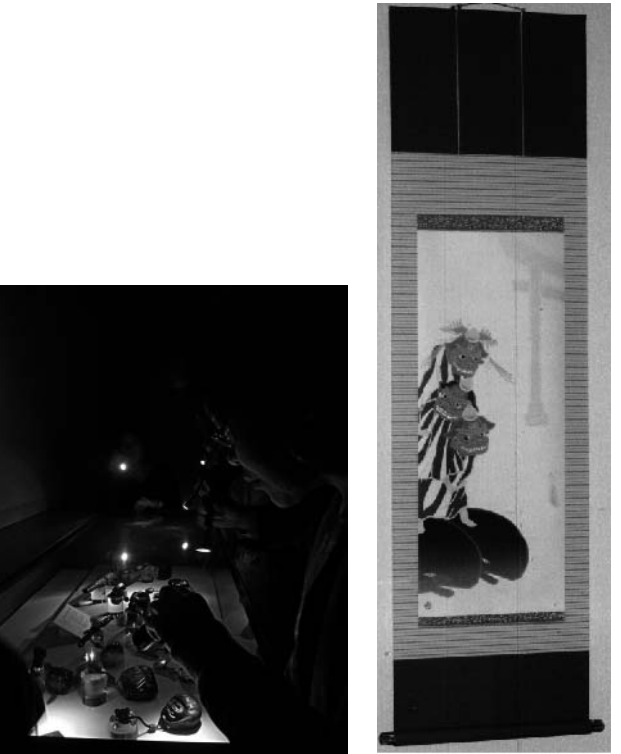
告知板設置風景

店街から美術館への人の流れをつくる、またお店に訪れるお客様との会話のきっかけとして美術館を話題にしてもらうことをねらいとした。平成20年1月から、街なかの商店に共通デザインの美術館展覧会の告知板を設置している。表には展示作品の写真、裏面にはその解説を表示した。参加は、JR掛川駅から美術館までの4軒の商店と市役所内2カ所、個人宅1軒である。告知板の設置とともに招待券5枚、割引券8枚、展覧会ちらしを配布。展示替え期間中に交換をしている。  
また、平成20年9月からは、スタンプラリーを加えて実施した。これは、美術館への一方的な流れでなく、各商店間を回遊しようということを目的とした。展覧会ごとに締め切りをし、商店の商品券(2,000円)、美術館グッズ(図録・クリアファイル)、作品制作作家のTシャツを景品とした。参加店舗には、この企画に参加していることを示す煙をかたどったカットティングシートを掲示している。この形は、当館を代表する所蔵品が煙草道具であることによるものである。また、買い物をするごとに押印するスタンプも煙のかたちの中に店舗名の入ったものを作成した。  
この事業の実施により、美術館と商店街の新しい結びつきができたことは大きな成果であった。商店からは、来館するきっかけができた。お客様との話題ができた。美術館へ行った後、お客様が再来店してくれたなど好意的な意見が多く聞かれた。  
スタンプラリーは、通年の実施ではないが、告知板については、引き続き現在も実施中である。

「夜の美術館と現代アート茶会&トークショー」  
これは、現代アートを活かした二の丸美術館と二の丸茶室を会場とした事業である。茶処掛川であることから、当館の所蔵品や掛川を題材として、若手作家に茶道具を制作してもらい、そのお披露目として茶会を開催しようというものである。作品の制作は、1年1作品として、目標は7つの作品を制作することとした。そして、作品を制作した作家から直接、制作に関する話しや現代アートに関する話題を聞こうと、アートプロデューサー山口裕美氏と作家のトークショーを開催した。

美術館では夜の美術館と題し、通常とは違う演出をし、新規来館者の獲得を目指した。具体的には、展示室の1室は足下を照らすだけの行灯を設置し、来館者は各自LEDライトによって作品を鑑賞するというものである。これは、

収蔵品の木下コレクションが小さく細かい伝統工芸を駆使した細密工芸品であるという特性を活かしたものである。来館者は自らが「作品を見る」ことを意識し、限られた光の中で新たな発見や工芸品の技と美を堪能してもらうことを狙いとした。以下、この2年間の内容である。



夜の美術館風景

掛川現代アートプロジェクト Vol.1  
「如月の宵、掛川の和で遊ぶ 夜の美術館と現代アート茶会～夜咄編～」  
平成20年2月2日(土)、3日(日)  
作 品:ミヤケ マイ「初まり始まり」  
(上右図)

作品に描かれているのは、掛川大祭の三大余興の一つである獅子舞かんからまちの三頭の獅子と日坂地区に伝わる「雄鯨山と雌鯨山」の伝説に登場する鯨、事任八幡宮の鳥居である。

「アートプロデューサー山口裕美&絵描きミヤケ マイトークショー-温故知新:伝統ある掛川と新しいアートの出会い-」  
平成20年2月3日(日)午後1時30分～  
場 所:大日本報徳社 大講堂

掛川現代アートプロジェクト Vol2  
「如月の宵、掛川の和で遊ぶ 夜の美術館と現代アート  
茶会～和魂洋才～」

平成 21年 2月 7日（土）、8日（日）

作 品：中村ケンゴ

「スピーチ・パルーン・イン・ザ・ヒノマル」（棗）



夜の茶会風景

「霜月の宵、二の丸美術館でトークショー 和魂洋才 掛  
川から世界へ発信する伝統とポップカルチャー 美術作  
家中村ケンゴ&アートプロデューサー山口裕美」

平成 20年 11月 8日（土）

今後にむけての課題

まず、この事業にかかわる経費であるが、美術館からの支出もあるが、ほとんどが掛川の現代美術研究会が受けた補助金で実施している。平成 21年度までは、予算の確保が出来ているが、それ以降は目途が立っていない。作品の制作代金が、予算の中でも多くを占めているため、今後予算獲得が事業を続けていけるかの大きな課題となっている。

また、7年続けた後に作品をどのように活用していくかを、現在の段階から考えていく必要があるだろう。作品制作がこの事業の到達点ではなく、作品をどう活用していくかがこの事業の大きな目的につながると考えられる。

また、参加者が一部の限定された人だけのものになってしまっていることも課題としてあげられた。広く市民に利用することを目的とした公共施設では、より多くの参加ができるよう改善していきたいと考えている。

最後に、官民協働による事業を今回初めて実施し、準備段階から様々な問題が起き、何度も話し合いを行ってきた。恐らく美術館だけでは、実施はなかったであろう。現代美術研究会の方々の熱い思いが、この事業の実現に至ったと思う。今後互いの立場を尊重し協力しながら、内容の充実を図っていきたい。

事例発表④  
「静岡県立美術館ボランティアによる地域連携事業の展開ー“草薙ツアーグループ”活動紹介」  
静岡県立美術館 学芸員 石上充代

静岡県立美術館ボランティアの活動の中から、地域連携という点でめざましい活躍を見せる草薙ツアーグループの事例を紹介する。

発足のきっかけと活動理念

草薙ツアーグループの発足は、平成 17年、つなぐNPO（山梨を拠点として地域と博物館とをつなぐ活動を行う）、地域住民、静岡県立美術館ボランティア有志が協力して実施した美術館周辺地域散策「草薙のんびりツアー」をきっかけとする。ここで得た経験とやりがいを経営的な活動につなげるため、コアメンバー 6名+お手伝いメンバー約 20名の有志により、県立美術館ボランティアグループの一つとして「草薙ツアーグループ」が立ち上げられることになった。発足にあたって掲げたグループの活動方針は、以下の 2つである。

- （1）美術館と地域を結ぶことを目的とします。
- （2）「杉山彦三郎記念茶畑」を地域連携の象徴と位置づけ、その保護育成に協力します。

（1）は、県立美術館のある草薙・谷田地区の地域資源を発掘し、地域と美術館との活性化を通じて社会貢献を目指すというグループの根本理念である。（2）で掲げた「杉山彦三郎記念茶畑」は、県立美術館へのアプローチ道・彫刻プロムナードにあるもので、初回ツアーを機にその重要性が再認識されたことから、活動の象徴として継続的に見守っていくこととした。

活動内容

・草薙のんびりツアー

グループ発足のきっかけとなった「草薙のんびりツアー」は、美術館と周辺地域の魅力を知り、館への理解と愛着を深めてもらうことを目的とするもので、第 6回までを開催している。

第 1回 平成 17年秋「旧東海道を歩き、ヤブキタ母樹を  
観て、美術館でロダン体操」

第 2回 平成 18年春「珍しい桜をみて美術館でお抹茶を」

第 3回 平成 18年秋「静岡県立美術館 20周年を散策」

第 4回 平成 19年秋「秋の草薙路を散策」

第 5回 平成 20年秋「美術館まわりの旧東海道 お寺と

神社を訪ねる」

第 6回 平成 21年春「彫刻プロムナードを散策 美術館  
でお花見とお抹茶を」

いずれも、JR草薙駅または彫刻プロムナード入口を出発地とし地域の見どころなどを紹介しながら美術館までの道のりを歩き、最後はお抹茶とお菓子のおもてなしをする内容である。ルート設定のための準備過程（見どころ発掘のための資料調査、地域の方への聞き取り等）も重要な活動となるため、ルートには毎回変化を持たせている。一方で、彫刻プロムナードの作品解説や展覧会紹介は必ず盛り込むようにし、美術館ボランティアならではのツアーとなるよう心がけている。これらコースの見どころや美術館の楽しみ方については、その都度作成・配布するガイドブックでも紹介している。



なお、のんびりツアーに限らずイベントの申込は代表者が主に電話で受け付けているが、事前に話をする中で生まれる安心感や信頼感が、当日のスムーズな参加を促す一因になっているようである。代表者の負担は大きいですが、こうしたきめこまかな対応の積み重ねが、草薙ツアーの活動を他にはない魅力あるものとしているといえよう。

・杉山彦三郎記念茶畑の保護育成

記念茶畑管理のため、グループメンバーは草取りや施肥といった地道な作業を行っているが、長期的な保護を考えるならば、敷地の管理者、茶樹の専門知識を持った農家、日常的な世話をする地域の人々など、様々な立場の協力者が不可欠であり、そのネットワーク作りも重要である。この点でも、組織としての柔軟性があり、コミュニケーション能力の高い草薙ツアーグループの力が生かされている。彼らが関わることで茶畑保護の体制はかつてよりも整ってきており、茶畑そのものも、県立農業高校に格別のご協力をいただき、隣接地に若木を植えることで次世代への継承を図ることができた。これも、茶農家、県立農業高校、県立美術館の間を結ぶ草薙ツアーグループなくしては実現できない事業であった。

茶畑を活用したイベントとしては、平成 18年から毎春市



新しいお茶の楽しみ方を提案し、お茶にまつわる活動はさらなる展開を見せている。

・活動についての特記事項

幅広く新鮮な活動を続ける草薙ツアーグループであるが、注目すべき点を 2点挙げておきたい。

ひとつは、グループが行う様々なイベントやグループの存在そのものの広報に関して、非常に積極的なことである。ボランティアの多様で活発な活動を知ってもらうことが、美術館の新しい楽しみ方を伝えることにつながる、との認識のもと、イベントごとに地元の新聞社、テレビ・ラジオ局等に直接出向いて広報活動を行っている。たとえ実際の取材に結び付かないとしても（結び付くことも多い）、美術館を熱心に応援する人の姿が相手に直接見えるということのアピール効果は大きい。

もうひとつは、発足以来の多岐に渡る活動についてこまめに記録を残し、そのつど報告書としてまとめている点である。反省を今後に生かすという意味も勿論あるが、記録を残していくことによって、活動が一過性のものではなく、理念に基づく継続的・発展的な活動であることが広く認識されるようになっている。草薙ツアーグループのこれまでの展開と将来展望を考える上でも、この点は大切な要素であろう。

まとめ

多くの市民活動がある中、あくまで「県立美術館ボランティア」であることを軸に活動を展開する草薙ツアーグループの事例は、美術館の今後のボランティア像を考える上でも非常に勇気付けられるものである。



ただ、活動資金の確保（現在はコアメンバー 6 名による月 500 円の積立を主な活動費としている）など、これからの展開を考える上での課題はいくつかある。美術館としても、県立という公の機関のルールに則りながら、ボランティアの創造的な活動をどう支援していくか、助成金獲得なども含めて活動資金確保のための方策をどうしていくか、様々な課題があるが、これまでに構築されてきた互いの信頼関係や外部の支援者の存在を力とし、より充実した活動につなげていきたいと考えている。

最後に草薙ツアーグループの意義を改めて考えるならば、「公」ではとすると見落としがちな所までおもてなしの心を尽くすことによって、美術館にボランティアならではの新鮮な風を送り込む点にあるだろう。そのことが、気負いなく美術に親しみ、美術館を身近に感じてもらえる環境を作ることにつながっていく。彼らの活動は「地域とともにある美術館」という館の存在意義自体を、設置者の側からではなく、利用者、あるいはボランティアの立場で地域の中から作って、いこうという試みであり、社会における美術館の位置、役割を考える上で重要な意義を持つものといえる。

グループ意見交換

事例発表を聞いた後、参加者が 8～9 人の 3 グループに分かれ、事業推進グループのメンバーの司会進行により意見交換がなされた。3 グループ参加者が異なることから参加者の意識の違い、館の性格の違いなどさまざまな相違があるにもかかわらず、「連携」ということの重要性については強く意識しており、事例発表についても関心を持って聴講していた。次に参加者の感想を以下にまとめることとする。

(1) 静岡アートギャラリー学芸員 石井佑佳

今回の研修会に参加して、地域の文化団体やボランティア、学校などとの連携が美術館や博物館にとって今後とても重要になっていくことがわかりました。掛川市二の丸美術館と静岡県立美術館の事例発表の後、行われたグループに分かれての意見交換会では、各館の現在の連携の状況を知ることができ興味深かったです。私の参加した A グループの各館では、学校との連携の報告が最もよく聞かれました。学校での授業の時間を使って学外授業として学年やクラス単位で来館してもらい、生徒達に展示を鑑賞してもらうというものです。クラス等の単位で来館することで一気に来館人数が増え、来館した生徒が後日親を連れてくる可能

性もあると考えると、この連携が来館者を増やすことに効果的なことがわかります。また、事例発表にもありましたが、職員だけでは人手が回らないため不可能な事業も連携により人数やネットワークが広がることで可能になるということも連携による大きなメリットだと感じました。

(2) 磐田市旧見付学校 神谷健司

博物館における「連携」というテーマの基本に2つの美術館からの事例発表がありました。1つは街なか&美術館アートコラボ大作戦と題し、商店街買い物と美術館入館を結び抽選による賞品付きのスタンプラリーや地域の文化関係団体と連携した活動（茶会等）の実施。もう一方はボランティアグループによる施設周辺ロケーションの設備等有効活用（ボランティアならではの新鮮な風）の実地事例。いずれも博物館施設と地域の様々な文化コンテンツと連携を結び活動の活性化を図るにはどうすれば良いかを学ぶための内容でありました。続く意見交換会でも短時間ではありましたが、施設との「連携」取り組みとして、連合町内会、民間では住宅会社、旅行会社の企画するツアーへの後援参加、学校への出前講座の実施等様々な事例が発表され連携のヒントがありました。感じたことは具体としてどこ、だれと連携をするかであり、一方で公の施設（弊館）であることの限界を超える必要性を感じた内容の講習会でありました。

(3) 磐田市旧見付学校 山中健太郎

議題を「博物館における連携」とした今回の講習会では、主に地域社会との連携についての事例発表がなされました。街なかから美術館へ人の流れを創出しようという、掛川市の「街なかアートコラボ大作戦」、県立美術館のガイド組織の一員でありながら、独自の活動を展開し美術館の運営に貢献する「草薙ツアーグループ」の活動内容など、他館の興味深い活動報告を聞くことができました。

その後に3グループに分かれて行われた意見交換についても、短時間ではありましたが、他館が力を入れている点、また苦しいと感じている点について聞くことができました。

私は常日頃、博物館の広報活動と集客について苦勞をしています。今回意見を交換する中で、それが共通の苦しみであると分かり、少し安堵しました。そして、それを克服するための他館の活動内容も聞くことができたため、今後の館運営に役立てることができるでしょう。情報の共有と

いう点で、非常に意義ある講習会でした。

(4) 掛川市吉岡彌生記念館 専門職員 牧野宏美

博物館と他機関の連携という観点からグループ意見交換を行い、他館の活動例や学芸員の方々の話を聞く中で感じたことは、どういった“ 連携 ”においてもまずそのきっかけとなるのは、やはり“ 人と人とのつながり ”であるということ。これは博物館に限ったことではないかもしれないが、学校との連携もまず教員とのつながりから始まる。日常の来館者とのコミュニケーションからも、ちょっとした会話がきっかけとなり、ネットワークが築かれていくこともあるのではないかと思う。今回の講習をうけ、博物館の連携をより活発にしていくために、まず日常の中で関わる人たち、地域住民とのコミュニケーションを積極的にはかることの重要性を改めて考える機会となった。とくに当館のような小規模な館では、来館者と私たち職員の距離は近く、直接会話を交わす機会は多い。館の性格をうまく活かし、様々な連携の可能性へとつなげるためのきっかけづくりを今後も心がけていきたい。

(5) 静岡市芹沢銈介美術館 館長 菊池 保朗

近年、博物館を取り巻く環境も大きく変わり、一般市民もボランティアとして参加する地域連携が叫ばれるようになりました。従来の一本釣的な個々の市民の協力を得て博物館活動を展開してきた時期もありましたが、二の丸美術館、静岡県立美術館のように、博物館が組織的に方向性を持って市民と連携し、事業を展開していき、成果を上げられていることは特筆すべきことと考えています。

どの館も一律に同じ方式というわけにはいきませんが、館の持つ独自性、周辺の住民意識、地域制等考慮しながら、今後は同じような方向に向かっていくことと考えています。いかに市民から評価されるか、自らもどう評価するのかと相まって、閉ざされた博物館からの脱却が今、当館においても進むべき課題となっています。

講習会を終えて

この講習会に参加していただいた方々から原稿をいただきまとめることができた。終わりに次の三点について記しておきたい。

まず第 1 点は「連携」というテーマは今日の博物館にとつてきわめて重要な課題であるということである。知らず知らずの中で各館が実施している「連携」について他の博物

館の人と意見交換することにより、自館の反省と新しい情報をうるることにより、より積極的な「連携」のアイデアが生まれるきっかけとなるということである。今回の講習会に出席いただいた方々はコメントをいただいた方と同様の感想を持っていたことと思われる。何らかの収穫があるとしたならば企画した一人として大変うれしいことである。

次に2点目は、出席された方のコメントにもあったが意見交換によって一層参画した意識を持つことができたということである。今回の講習会は事業推進グループの皆さんの意見もあり、3グループに分かれて意見交換会を行うこととした。全体会ではなかなか意見が出なかったが、小グループではそのようなこともなく自ら意見を述べなくてはならず、その点も参加した意識の向上に役立ったと思われる。

3点目は活動を記録に残すということである。博物館協会の講習会には各館の事情により参加したくても全員が参加することは可能ではない。そこで参加できなかった人にもある程度の情報を提供することが可能な状況にしておくことが必要と思われる。そこで今回は私がレポートをまとめることとし、関係した方から原稿をいただいた。記録として残すことにより今後さまざまな意味で各博物館の活性化の一助となることが期待できるように思われるのである。

おわりに、お忙しい中、原稿をいただきました皆さんには心から御礼もうしあげます。

【記録】

平成 20 年度 第 3 回講習会

「博物館・美術館と周辺地域との連携」

日 時 平成 21 年 2 月 26 日（木） 13: 30- 16: 30

会 場 掛川市立中央図書館 会議室

内 容 上記のとおり

参加者 26 人

その他 講習会の前に各自で掛川市二の丸美術館で開催していた「平野美術館所蔵 近代日本画名品展」を鑑賞した。

（各投稿者名のある部分以外は日比野が執筆した。）

# 文政九年住吉浦唐船漂着に関する 県東部に残る新出資料について

田中 之博

## はじめに

江戸の後期、日本近海に外国船が出没することが多くな  
った状況に対し、幕府は文政八年（一八二五）二月に文  
政の打払令を発令した。その翌年の文政九年正月、榛原  
郡吉田村住吉浦（現在の榛原郡吉田町住吉）の沖合に  
異国船が出現し、当時一橋家の領地であった住吉村は田  
中藩を上げての騒動がもちあがり、近隣諸藩にも警備の連  
絡が飛び交った。いわゆる「文政九年浜固め」である。  
後に、この異国船騒動の発端は、長崎に向かうはずだった  
唐船が遭難し、遠州住吉浦沖に漂着したものと判明した。  
当時の状況を伝える資料によれば、「文政九年丙戌正月  
元旦早天、遠州榛原郡一橋御領地下吉田住吉明神の社沖  
合に、奇怪なる大船見へ、十四五人穢位櫓に出で幡を以て  
人を招き、鐘太鼓を鳴し、おかしげなる笛を吹、鉄砲を放ち、  
さもかしましく聞へけり、所の者共遙に之を打見やり、扱も危  
しき次第哉、必定異国の夷共逆心にて日本へ襲ひ来る者な  
らんと、肝魂も落つかず、早速一橋波津陣屋へ具に言上」（『唐  
船漂流記』※1）したという。その報告を受けて「文政九年

丙戌正月元旦暁、遠州住吉浜一橋様御領所江、異国船  
相手見申候に付、三日暁七時前、御目付より只今罷出候旨  
申来、則罷出候処右之趣ニ付御人数御領分惣左衛門浜江  
出張候ニ付、筆談之方可相勤内達有之」（『浜固出役日記』  
※2）とその対応の準備が進められた。

この漂着船は、文政八年十一月二十四日、杭州湾口の  
乍浦（Thapu、中国浙江省）から長崎に向けて出帆した  
が、暴風に遭遇して太平洋を漂流した得泰船という交易船  
である。この船には中国人一六三名のほかに日本人の漂  
流民三名が乗船していた。その後、江戸幕府の命によって  
一旦清水湊に曳航されて停泊、修理等出航の準備を整え、  
三月九日に長崎へ回航された。

本稿では、駿河湾の対岸に位置する県東部に残るこの  
得泰船に関する新出資料を紹介する。

## 新出資料『文政九年三月沼津漂着之唐船圖』 及び『文政九年遠州住吉浦漂流之唐船陳情』

本稿で紹介する新出資料は、三島市在住の河辺  
和年氏が所蔵する『文政九年三月沼津漂着之唐船圖』  
（図1-1）及び『文政九年遠州住吉浦漂流之唐船陳情』  
（図2）である。両資料は「文政九年三月沼津漂着  
之唐船圖 豆州三島河邊本家蔵（印）」と記された二つ  
折りの厚紙に収められている（図1-2）。

『文政九年三月沼津漂着之唐船圖』は、描かれた時期  
は不明であるが、おそらく幕末から明治頃に描かれたものと

思われる。縦六〇・二×四十二・三センチの彩色が施され  
た絵図で、図の左上に「文政九丙戌三月沼津に漂流之唐  
船図」という墨書きがある。船首を右向きに描いた停泊中  
の図で、船尾には常明堂、錨を降ろした船首上部に鬼神  
のような絵が描かれている。帆を降ろしたマストが三本、マ  
スト上では幡がたなびく。梯子付近と中央の帆上に各一人  
ずつ、船内の中央に数名の唐人の姿が描かれている。

得泰船が描かれた絵図として現在知られているものに、  
次のものがある。

- (a)「唐船絵図」都立中央図書館近藤海事文庫所蔵  
（図3・※3）
- (b)「唐船の絵」都立中央図書館近藤海事文庫所蔵  
嘉永年間の写（図4・※4）
- (c)久保田智恵氏所蔵資料の唐船の絵図（※5）
- (d)「扇面かわら版 得泰船図」（※6）
- (e)錦絵「唐船」神戸市立博物館所蔵

いずれも船首を左向きにした構図で描かれていて、新  
出資料の絵図の向きとは異なるが、船の特徴は同様である。  
この得泰船の形状などの詳細については、(c)の久保田智  
恵氏所蔵資料に詳しく述べられている。

それによれば、

- 一、船長三拾間余 幅拾間 高拾間
- 一、船中廊下造両方部屋あり 部屋下に荷物積置  
みなはこに猪鳥の類生置あり
- 一、舳やひより五段なり 上段に燈明堂あり 夜は火  
をとす也
- 一、帆柱三本、中柱大木にて造り如図、銅輪がけ帆  
引上車あり 大綱小綱ハツあり 柱上に小ばた  
立あり 時により取かへ立候事あり 是は風見  
の心にて立置なり
- 一、帆かこの様にあみ 中へ芳のかはを入両方より  
ありや 竹二ツ割にてとふふちにあて一枚宛て

ふつる糸をつけ 屏風の如く引上る時 延引下  
る時は畳候なり

一、舳の方ひより板子より三間はしごかけあり 是は  
日本のはしご同様なり 碇は木にて造り候 勿  
論鉄よりは重きも木にて鉄木と名付あり

一、船両頬に四角半月模様あり 是は用立候 穴  
には無之かじわ水中に入 外よりは見へ不申  
上廻り如図略す

とあり、船尾の上段の燈明堂、船の側面の四角半月模  
様など、唐船の特徴が新出資料の絵にもあてはまる。全  
長三八・四メートル、幅一二・八メートル、深さ七・八メー  
トルという鳥の形をしたいわゆる鳥船で、概ね四、五千石く  
らいといわれ、当時としては大きな船であろう。

この絵図に付随する写本『文政九年遠州住吉浦漂流  
之唐船陳情』は、縦二十四・五×横十七・四センチの六  
丁二ツ折の袋綴で、明治期に附せられたと思われる便箋  
の表紙を有し、その中央に「文政九年遠州住吉浦漂流  
之唐船陳情」と書かれている。最初に船名と主な乗組員  
の名と年齢、出身地名、総人数が記され、続いて「文政  
九丙戌正月元日遠州大井川下近所住吉浦へ漂着の唐船  
百十六人乗内日本人三人乗合居駿州清水湊にて口書の  
写」とあり（図5）、口書（供述書）の写しであることがわ  
かる。口書の内容は、得泰船に乗船してきた邦人三人の  
のいわゆる漂流記的内容で、本文には校閲の朱の書き入  
れがある（別掲の釈文参照）。ほぼ同様の内容を有する  
文献がすでに紹介されており、『通航一覽続輯』巻七十  
八の諸厄利亜国 属島ペロウ部十五の「長崎志続編」、  
「唐船漂泊一件」、『甲子夜話続編』、『南部叢書』第十  
冊「パラウ漂流記」などがその例である。

この写本の冒頭には、本文と同筆で沼津方面に得泰船  
が漂流したという次のような記述がある（図6）。  
「文政九年丙戌正月朔日遠州住吉浦漂着ノ唐船、同下旬

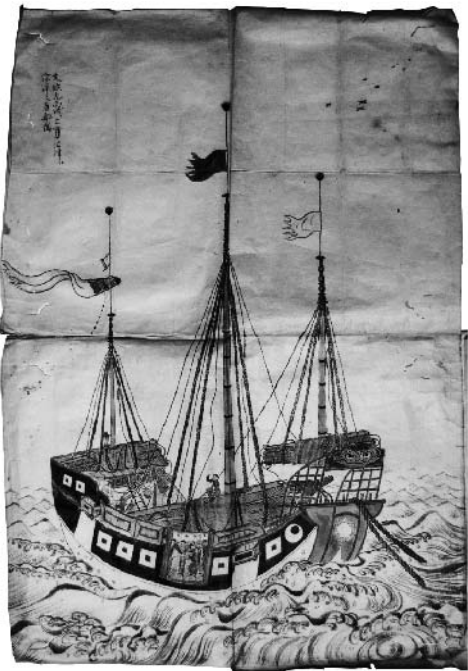


図 1-1



図 1-2

図 2



図 3

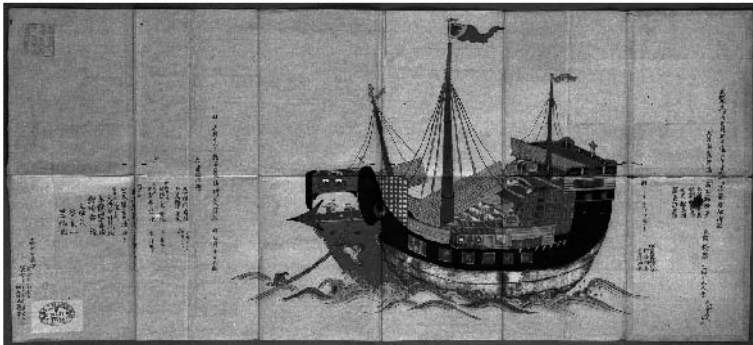


図 4



図5

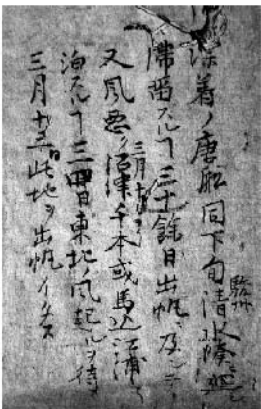


図6



図7

駿州清水湊ニ廻シ滞留スル事三十余日、出帆ニ及ンデ又風悪ク、三月十日ヨリ沼津千本或馬込江浦ニ泊スル事三四日、東北ノ風起ルヲ待、三月十三日此地ヲ出帆イタス」すなわち、唐船が三月十日より沼津千本或いは馬込江浦に停泊し、三月十三日には出帆したことが記されているのである。この冒頭の記述と絵図に記された「漂流之唐船図」という書き入れから、この得泰船が清水湊出帆後に長崎とは逆方向に位置する沼津に漂流してきたことが知られる。

さて、漂着した得泰船が江戸幕府によって長崎へ回送される長途の間に、日本側の通訳野田希一（秋嶽、※7）と得泰船の責任者らとの間に交わされた公私にわたる筆談記録として『得泰船筆談』（『文政九年遠州漂着得泰船資料』関西大学東西学術研究所資料集刊十三 二に所収）がある。清水湊出帆前後から長崎着までの間（三月七日から四月三十日）の記録で、前半は日付順の公的交渉に関する記述、後半は私的談話が綴られている。前半の長崎に向けて清水湊を出帆した翌日の三月十一日の条に、次のような記述がある。

聖孚云 本船總管又云

聖孚云 此地如有魚菜 望給付些爲感 後刻具單呈上

秋嶽云 等到江浦給付 少停時

魚菜があれば給付していただきたいという中国側の申し出に対して、通訳の野田希一が「江浦」に到着したら給

付すると伝えたやりとりの記述である。

この「江浦」について、『文政九年遠州漂着得泰船資料』にある注釈には、「この地名は、同じ駿河湾内の、清水港のはるかな対岸、伊豆半島内浦湾岸にみえるが、それでは地理的に矛盾する。野田氏らが持っていた当時の地図が誤っていたか、駿河湾の南西側に同名の入江があるのか」とあり、長崎方面とは逆方向の地名があることに疑問を呈し、地図の誤りや同名の入江があったのではと推測している。確かに江浦は目的地とは反対方面の地名ではあるが、得泰船が出帆した三月という時期は気候的に強い西風が吹くことで知られている（現在でも清水方面からの漂着物が江の浦に流れてくるとも珍しいことではないと地元漁民から伺った）。

ところで、この沼津漂着を裏付ける文書が沼津市明治史料館に保管されている。年号は不明ながら三月十二日の日付を有する廻状（図7・※8）で、「此度清水湊ニ懸り候唐船」という書き出しからはじまる。

此度清水湊ニ懸り居候唐船、去ル十日同所出帆之處、風並悪敷、今十二日、江浦湊引入風待滞船ニ付、見物等者勿論漁業船たり共、堅ク御差留之段、先達而御懸り中よりも御触出し有之義ニ候之間、猶又此上猥リニ見物船等差出候而者不相濟義ニ付、此段船持之者共江不洩様急度可申付候 此廻状、村下令請印早々順達從留村相返候 以上（句点は筆者による）

江浦村御用先湯山藤四郎から多比村、口野村の名主、与頭、百姓代に宛てられたもので、停泊中の唐船に見物船を差し向けたり、漁業船であってもみだりに唐船に近づいてはならないことを船の所有者らに洩らさず伝達するよう伝えている。「水湊ニ懸り居候唐船、去ル十日同所出帆」とあるところから、得泰船と考えて間違いなく、日付も合致する。この廻状によって、得泰船が三月十日に清水湊を出帆したものの風波悪く十二日に江の浦の湊に風ぎ待ちのために引き入れた事実が確認でき、『得泰船筆語』の江浦の地名が沼津の江浦であることが裏付けられよう。

### 県内での得泰船漂着時に関する文献について

県内に残る得泰船漂着に関する文献は、あまり数が多い。ここで、時系列的に主なものを紹介する。

明治四十三年（一九一〇）に刊行された『榛原郡時報』（現在、原本不明）に、後藤肅堂氏による「住吉沖に於ける寧波船漂着記事」があり、「唐船漂流記」「本間楽年日記」「寧波船簡牘写」の三資料をもとに紹介されている。肅堂氏の発表した内容は、後に大正五年（一九一六）に刊行された『静岡県榛原郡誌』上巻（静岡県榛原郡役所編纂、昭和六十二年に臨川書房より復刻発行）第一沿革第七章近世時代（其二）「一三 唐船漂着」に引用掲載された。続いて昭和七年（一九三二）刊行の『相良史』（山本吾朗著 相良史蹟調査会）第六章藩政時代第十二節雑録「（六）唐船漂着」の項にも引用掲載されているが、ここには当時唄われた唐船漂着に関する手鞠唄（※9）が新たに加えられていて興味深い。昭和四十五年（一九七〇）には『榛原郡吉田町史資料』（榛原郡吉田町史編纂委員会編）第四集に「唐船漂着関係資料」として久保田智恵家所蔵の文書（卷子仕立）が一部写真入りで紹介されている。地方史における海防問題としての観点から得泰船漂着を取り上げたものに、昭和四十五年（一九七〇）に『藤枝市史上』の「第一節海防問題の高まりとその対応」、昭和五十二年（一九七七）に『地方史研究大井川創刊号』（大井川地方史研究会）に掲載された鈴木武雄氏の「郷土と唐船の問題」、平成九年（一九九七）に『静岡県史 通史編4 近世二』（第2編近世から近代へ第1章天保期の村と町）の＜「文政九年浜固め」とペリー来航＞などがある。

それ以後、得泰船漂着そのものに関するものは報告され

ていないようであるが、日中交流というグローバルな観点から地方史を含めた得泰船に関する豊富な関係資料の収集と調査に基づく詳細な考察が関西大学東西学術研究所の田中謙二・松浦章両氏によって行われ、昭和六十一年（一九八六）に『文政九年遠州漂着得泰船資料』（「江戸時代漂着唐船資料集二」関西大学東西学術研究所）が出版され、現在、得泰船に関する基本資料となっている。この資料集には、上記の静岡県内の文献資料も網羅されている。

### おわりに

本稿において、駿河湾の対岸に位置する県東部に残る得泰船に関する新出資料を紹介し、沼津に残る地方文書とも照らし合わせ、この得泰船が長崎に向けて清水を出帆したものの、強風によって県東部の沼津千本、馬込、江浦まで流され、数日間江浦で風待ちしたことを紹介した。

地元静岡県内に残る関係資料を調査する中で、所在不明となっている原本資料が以外にも多いと痛快した。後藤肅堂氏が「住吉沖に於ける寧波船漂着記事」で取り上げた「唐船漂流記」、「本間楽年日記」、「寧波船簡牘写」はもとより、久保田智恵氏所蔵の原資料が所在不明のため実見することができなかったのは、残念なことであった。殊に絵画資料を含んでいる場合は尚更である。そうした状況のなか、得泰船に関わる今回紹介の資料を見い出せたことは幸運といえよう。

本稿をまとめるあたり、得泰船に関わる文献資料を広く収集・調査した関西大学東西研究所の多大な業績の恩恵に浴するところが大きかった。殊に久保田智恵氏所蔵資料の再翻刻、得泰船図のカラー掲載など、同資料が所在不明である現在、その功績は大きいといえよう。そうした状況を踏まえ、地域の歴史・文化に携わる学芸員の責務として、地域の歴史・文化を語る上で欠くことのできない資料の保全、調査・研究に、より一層努力する必要性があると強く感じた次第である。

最後に、所蔵資料の調査を快諾してくださった河辺和年氏には心から御礼申し上げる。また、沼津明治史料館並びに東京都立中央図書館特別室には快く架蔵資料の掲載許可を賜った。新出資料の写本並びに回状の釈文については三島市古文書読習会の渡辺敏子氏の手を煩わせた。ここに深く感謝の意を表します。

（たなかゆきひろ 三島市郷土資料館 学芸員）



文政九内戌正月朔日 遠州住吉浦漂着ノ唐船 同下旬清水湊ニ廻シ  
船名得泰 滞留スルコト二十餘出帆<sup>⑩</sup>及ンテ  
船主 劉景筠 年五十四 杭州人 又風巻<sup>⑪</sup>沼津千本或馬込江浦ニ  
全 楊啓堂 二十七 平湖入 泊スルコト三四日東北風起<sup>⑫</sup>待  
財副 朱柳橋 四十八 杭州人 三月十三日此地ヲ出帆イタス  
全 劉聖亨 三十一 候宮人  
夥長 洪廷叔 五十三 長樂人  
船工 鄭資淳 四十一 閩縣人  
全 郭光桂 四十 同安人  
傳照使 四十六 長樂人  
曹發生 三十 同安人  
傳分使 三十六 寧波人  
陳忠信 四十八 候宮人  
以下 閩縣 同安 候宮 候安 平湖 長安 福清 寧波 郵縣  
惠安 長樂 蘇州 杭州ノ人々 年二十一<sup>⑬</sup>六十マデ  
姓名略之外ニ平湖人護送通事載言寶年三十一  
総計人数百十六人乗  
文政九内戌正月元日遠州大井川下近所住吉浦へ  
漂着の唐船百十六人乗内口木人三人乗合居  
駿州清水湊ニ口書の写  
① 南部大膳大夫領分  
② 奥州閉伊郡 山田村 長吉 戊 三十六才  
③ 山田村 百姓 長吉 三十六才  
④ そけい村 万之介弟 同 二十五才  
⑤ 大上領 大槌領（上閉伊郡）  
⑥ 船浦＝船越浦「越」が脱字  
⑦ 炊 かしき 食事係  
⑧ 鹽肴 しおざかな  
⑨ 南部大膳大夫 陸奥国盛岡藩の藩主  
⑩ 奥州閉伊郡 岩手県沿岸中部  
⑪ 山田村 岩手県下閉伊郡山田町  
⑫ そけい村 磯鶏村で現岩手県宮古市（旧東閉伊郡）  
⑬ 大上領 大槌領（上閉伊郡）  
⑭ 船浦＝船越浦「越」が脱字  
⑮ 炊 かしき 食事係  
⑯ 鹽肴 しおざかな

私共義店船へ乗組遠州へ漂着の上常湊へ御引入ニ  
相成此度元船において始末御糺し御坐候此段私共儀  
人土領船浦黒沢屋六之介船沖船頭平之丞乗主主  
倉参清助 亀之介久兵衛伊勢参久助 久米治 私共  
三人并 炊柴助共 都合拾式人乗組 右六之助商荷物  
柏油大豆鹽肴并大つち領村々御領主へ納候  
ろしき姿ニ大勢駆集り何角さゝやき奔走致し  
候処間もなく役人跡之者も可有之哉 吾人罷越差圖  
致し食用として私共へ芋之様のものたへさせ 吾軒ニ  
吾人ツゝ引取養ひ臥候節ハ小屋迄軒兼請取  
拾入迄所ニ臥扶食は前書之品をツツ宛ニ行  
候ニ付當座ハ給足り不申候得共 追々腹中も馴レ飢ニモ  
及不申 衣類も追々着候候得共 寒暑之差別もなく  
凡四年程も石場所ニ罷在候何事も不仕 扶助而已  
更罷在候内久兵衛久助柏果候間木の葉ニ船席ニ  
包上中へ埋申候言語之義ハ一向不相分候得共 ハハラ  
とか申よふも相聞候嶋ニ候夫より未年七月中頃  
にも可有之哉 見馴ぬ大船罷越船翌年八月  
初頃ニも可有哉 右大船出帆之體ニ付手拙等度相  
頼見 右船へ乗ひ出帆之節 石之嶋形海出より  
見及候処 凡堅ニ二十四五里も可有之島と相見へ中候夫より  
八日程も西の方へ走りメレランと申処 湊へ着船上陸致し  
間も無唐人跡之者罷越候間 乗組の内より日本人ノ由  
書付遣候処 人家へ引入 大切ニいたわりくれ申候 石場所  
之義 家居之様子 瓦葺ニ四壁は石ニ砌たゝみあけ  
相應ニ人家有之候去ル六月三日唐船参り候間  
のせ貰ひ 其節八人之者へ丸々金四拾枚貰受  
それより出帆 同月十七日船中ニ伊勢松病死致し  
候處 船ニ難差置候ニ付 無據海中に捨 七月十八日  
厦門と申所へ着船いたし 同所取扱を請候処 石場所  
之義ハ 家居 瓦葺 四壁ハ漆喰ニ人家も相應有之候  
同廿九日竹ニ編候かこの様の物ニ乗せられ役差添  
継送られ 其節も丸金を人ニ付式枚ツゝ貰ひ請 九月  
九日福州と申処へ着 同所取扱を請 古衣類等貰ヒ  
請罷在候 九月十四日同所出立 同所役人付添 陸  
路を歩行 或は川船ニ下り道中いたし 十月十五日  
右浦に付 同所取扱を請申候 衣類羽折等迄も日本  
風ニいたし貰ひ請候義ニ 同所罷在候内 長崎商船  
出候間 倉参 清助 久米治 柴助 右四人ハ十一月十九日  
別船ニ乗り出帆致し 私共三人ハ唐船乗船致し

- ※1 『榛原郡時報』（明治四十三年刊）の後藤肅堂氏による「住吉沖に於ける寧波船漂着記事」に引用されている文献。後藤肅堂氏架蔵。原本資料が所在不明のため、引用されている部分のみしかわからず、その全体像については現状把握されていない。
- ※2 『浜固出役日記』熊沢惟興著。熊沢惟興（一七九一～一八五四）は田中藩の家臣、田中藩学問所の世話役で藩校日知館の教授。
- ※3 紙本彩色、一枚物。寸法五六・七×四四・二センチ。上部左側に唐人四人が描かれる。
- ※4 紙本彩色、折帖。寸法二三・七×一八・〇センチ（見開き 四七・二×一〇六・〇センチ）
- ※5 『榛原郡吉田町史資料』（榛原郡吉田町史編纂委員会編）第四集に「唐船漂着関係資料」所収。
- ※6 <扇面かわら版「駱駝渡來図」および「得泰船図」について>鈴木浩平氏（『浮世絵芸術』会報八十二号）。船名と漂着経緯が書き込まれた色刷り瓦版。草色、鼠色、水色、朱色の四色が使われ、瓦版としては稀な扇面であるとともに色摺りという一種豪華な作品。江戸の好事家の要望による出版を思わせる、報道の即時性のない瓦版として紹介されている。
- ※7 野田希一（一七九一～一八五九）、名を逸、通称希一郎、字明、号を笛浦・秋嶽。丹後の人、幕府昌平黉の儒官古賀精里に学んで文章を能くし、齋藤拙堂・篠崎小竹・坂井虎山とともに四大文章家に数えられた。丹後田邊藩に仕え、藩治文教に貢献した。当時二十八歳の新進気鋭の学者。この筆談では相手は主として中国船主の楊啓堂、財副（事務長乃至次長）朱柳橋である。
- ※8 「口野 足立家文書」（A・b 92）沼津市明治史料館保管。
- ※9 手鞠唄の内容をは次の通り。  
一つとせ、戌の正月戌の年、唐人船が住吉へ、さあ住吉へ  
二つとせ、ふざんかいどの港から、風にかはれて流れ来た、さあ流れ来た  
三つとせ、三とこ四とこの陣屋より、行列そろへて磯ばたへ、さあ磯ばたへ  
四つとせ、鎧かぶとで大名が、住吉濱へと陣を張る、さあ陣を張る  
五つとせ、いくら唐人ろきんでも、日本国にはかなやせぬ、さあかなやせぬ  
六つとせ、むりな船だよあの船は、弓や鉄砲でかざりわけ、さあかざりわけ  
七つとせ、難儀な船だと云ひながら、世間のぎしやくてきをばらす、さあきをばらす  
八つとせ、屋敷屋敷の御用持ち、追々御馬で城の越し、さあ城の越し  
九つとせ、こよいはこゝで供死んで、あすは腹さる田中様、さあ田中様  
十つとせ、とほうに暮れて唐人も、西も東も白浪だ、さあ白浪だあ

上着類之由樽詰紙紙包共 江戸御屋鋪へ被差出候分  
吉面之荷物共 江戸問屋へ相居候分 一同積入 七ヶ年以前  
去ル辰年十一月廿六日 大士領出帆 順風にて十二月七日  
仙臺領とうなん湊へ入津滞船 同九日出帆 同十二日  
雨雪ニ地方を見失ひ 房州沖ニ漂 同夜戌亥風  
強ク 沖中へ被吹流 同十三日夜あかの道付候間 無據  
荷打いたし 同十四日大時化ニ櫓も切捨候処 方角見  
失ニ何方より吹候風とも不相解被押流 同十五日風少し  
静りあかの道ふさぎ 同十六日桁を帆柱ニいたし  
陸の方を志し 走り参候処 又候 同十九日戌亥風強ク  
風吹流 同廿一日雨雪ニ時化ニ成 同廿二日大荒ニ又  
荷打致候 同夜櫓を折船中の者共力落し 一同  
神佛を祈り 綱を相ニいたし 流次第ニ相成り 翌  
日年正月六日丑寅の風に而押流候処、沖中ニ至

暖氣と相成 奥州邊の六七日頃之時候同様ニ  
然る処 船中追々香水無之 難義致候処 同十九日  
雨降 漸々香水を取り 猶又廿日大時化ニ相成 同夜  
俄に波音聞付候間 地方へ付候と心付錠を入候得共 保  
兼磯へともを當候間 一同上陸之支度致し 船頭平之丞ハ  
浦賀御番所御切手 海上届ケ手形持参でんまをおろし  
乗移り、同乗込候処 磯懸敷元船破船 糲米其外共  
相捨てんま船も水船に相成 乗組十二人之もの共の内  
平之丞 亀之助 溺死致し 残十人之者共漸ニ命を  
助り上陸いたし候処 兩人 死骸成とも見付度 海辺

種々相尋候得共 何分見當兼候内 間も無夜明  
廿日同様ニ相尋候へ共 不見當 人家も不見候間  
其夜ハ無是悲草木有之山へ打臥 廿二口山へ  
登り見候処 遠方に小屋相見へ候ニ付 尋参候處  
木の葉ニ厚サ二寸位ニ屋根を葺 四壁共同品ニ  
囲ひ置 丸竹を敷置小屋ニ男ハ丸鉢 女ハ木  
は様の物腰へ巻 男ハ手首より先迄 腰より下 而足  
くろふし迄入墨いたし 女はかひなより爪先迄 堅筋ニ  
入墨いたし 腰より下 而足くろふし迄 堅筋ニ入墨致し  
男女共顔へ赤上様之ものをぬり 鬼形の如くおそ

参り内 沖中ニ難風ニ逢 此度漂着仕候義ニ御坐候  
尤丸金貰ひ請候分 彼地ニ而而替いたし 追々遣ひ  
拂 當時は着用衣類 并 遣ひ残り之錢少しは  
所持仕罷在候義ニ御座候 且私共三人之内 長吉  
龜泰は女房有之 喜太郎は獨身ニ御座候

長吉 左大指爪印  
喜太郎 同断  
龜泰 同断  
羽倉外記様  
竹垣庄蔵様

- ⑨ 難儀 ミシロやコモに包んだもの  
⑩ あかの道 赤瀬  
⑪ 無據 よんどころなく  
⑫ 荷打ち 難破時、積荷を海へ捨てる事  
⑬ 大時化 おおしけ  
⑭ 櫓 帆柱の意  
⑮ てんま 伝馬船 木造小型和船  
⑯ 先ニ指先「指」脱字  
⑰ くろふし 墨 足のくろふし  
⑱ かひな 二の腕のこと

静岡県博物館協会研究紀要目録（第1号～32号）

| 号  | 刊行年度              | ページ                  | 執筆者名  | 所属・職名                      | 題名                                           |
|----|-------------------|----------------------|-------|----------------------------|----------------------------------------------|
| 1  | 1977<br>(昭和52) 年度 | p. 1                 | 松浦国男  | 静岡県博物館協会会長                 | 会長のあいさつ                                      |
|    |                   | pp. 3 - 7            | 角田力松  | 富士美術館館長                    | 新古今の一断面                                      |
|    |                   | pp. 9 - 16           | 金原宏行  | 浜松市美術館学芸員                  | 浜松における初期民芸運動                                 |
|    |                   | pp. 17 - 23          | 清水 実  | 久能山東照宮博物館学芸員               | 修験道本山派の組織化について                               |
| 2  | 1978<br>(昭和53) 年度 | p. 1                 | 松浦国男  | 静岡県博物館協会会長                 | 会長のあいさつ                                      |
|    |                   | pp. 2 - 14           | 中村武久  | 熱川バナナ・ワニ園研究主任              | 植物園の生きた文化財＝第一回文化講演会より＝                       |
|    |                   | pp. 15 - 24          | 杉村 斉  | 三島市郷土資料館学芸員                | 「日本の暦」展報告＝三島暦関係資料から＝                         |
| 3  | 1979<br>(昭和54) 年度 | pp. 1 - 6            | 鈴木克美  | 東海大学海洋科学博物館管理部次長           | 博物館的水族館の資料収集・保管と研究                           |
|    |                   | pp. 7 - 14           | 井出 孝  | 井出コレクション代表                 | 道中記考                                         |
|    |                   | pp. 15 - 25          | 金原宏行  | 浜松市美術館学芸員                  | 明治・大正期南画の再検討―山下青崖を中心に―                       |
|    |                   | pp. 26 - 44          | 渡邊妙子  | 佐野美術館副館長                   | 後藤家十四代揃金具について                                |
| 4  | 1980<br>(昭和55) 年度 | pp. 1 - 9            | 森本 豊  | 堂ヶ島洋らんセンター                 | バプア・ニューギニア旅行                                 |
|    |                   | pp. 10 - 22          | 大村和男  | 登呂博物館学芸員                   | 登呂博物館の教育効果について<br>―展示ストーリー「登呂のむら」の作成導入案―     |
|    |                   | pp. 23 - 32          | 金原宏行  | 浜松市美術館学芸員                  | 明治の石版画―その作家と美術史的位置―                          |
|    |                   | pp. 33 - 42          | 高倉達夫  | 富士美術館学芸員                   | 錦絵 水野年方筆「三十六佳撰」について                          |
| 5  | 1981<br>(昭和56) 年度 | pp. 1 - 10           | 大村和男  | 登呂博物館学芸員                   | 登呂博物館の教育効果について（承前）<br>―展示ストーリー「登呂のむら」の作成導入案― |
|    |                   | pp. 11 - 18          | 金原宏行  | 浜松市美術館学芸員                  | 松崎儼堂年譜（未定稿）                                  |
|    |                   | pp. 19 - 45          | 小野真一  | 加藤学園考古学研究所々長               | 神道考古学上から見た静岡県                                |
|    |                   |                      |       |                            |                                              |
| 6  | 1982<br>(昭和57) 年度 | pp. 1 - 10           | 齋藤 新  | 浜松市博物館学芸員                  | 地域の歴史博物館における「地域性」の課題―とくに歴史叙述の方法について          |
|    |                   | pp. 11 - 19          | 金原宏行  | 浜松市美術館学芸員                  | 静岡県美術風土記補遺                                   |
| 7  | 1983<br>(昭和58) 年度 | pp. 1 - 10           | 藤浦正行  | MOA美術館学芸員                  | 出雲地方の平安仏について                                 |
|    |                   | pp. 11 - 14          | 堀沢光栄  | 富士美術館学芸員                   | 「重美・鹿秋草蒔絵硯箱」の一考察                             |
|    |                   | pp. 15 - 27          | 清水 実  | 久能山東照宮博物館学芸員               | 近世久能山東照宮の祭祀施設について                            |
| 8  | 1984<br>(昭和59) 年度 | pp. 1 - 32           | 中野 宥  | 静岡市登呂博物館                   | 静岡市域の古墳の分布について（前）                            |
|    |                   | pp. 33 - 42          | 藤浦正行  | MOA美術館                     | 伝岩佐又兵衛筆物語絵巻について―浄瑠璃物語絵巻の構成と作者―               |
|    |                   | pp. 43 - 44          | 斉藤秀治  | 伊豆シャボテン公園                  | 伊豆半島のウミウ                                     |
|    |                   | pp. 45 - 72          | 日比野秀男 | 静岡県立美術館準備室                 | アメリカ大陸美術館紀行―サンフランシスコからボストンへ―                 |
|    |                   | p. 73                | 小木 香  | 浜松市博物館                     | 浜松市博物館における入館者について                            |
|    |                   | p. 74                | 金原宏行  | 浜松市美術館                     | 本郷新彫刻展（59年7月）を開催して                           |
|    |                   | p. 75                | 山下善也  | 静岡県立美術館準備室                 | 静岡県蔵 狩野山雪「富士三保松原図屏風」六曲一双について<br>…表現内容を中心に…   |
|    |                   | p. 76                | 藤浦正行  | MOA美術館                     | 又兵衛筆歌仙絵をめぐって<br>―その独創的表現と「又兵衛様式」の成立について―     |
|    |                   | p. 77                | 下山 肇  | 静岡県立美術館準備室                 | 自画像の本質                                       |
|    |                   | p. 78                | 小林 明  | 久能山東照宮博物館                  | 『无上法院殿御日記』について                               |
| 9  | 1985<br>(昭和60) 年度 | pp. 1- 48            | 中野 宥  | 静岡市登呂博物館                   | 静岡市域の古墳の分布について（後）                            |
|    |                   | pp. 49 - 64          | 樋口雄彦  | 沼津市明治史料館学芸員                | 「沼津版」覚え書                                     |
|    |                   | pp. 65 - 70          | 安達めぐみ | ベルナール・ビュフェ美術館              | ベルナール・ビュフェ―初期作品を中心にして―                       |
|    |                   | pp. 71 - 102         | 日比野秀男 | 静岡県立美術館準備室                 | 続 アメリカ大陸美術館紀行―ニューヨークからロサンゼルスへ―               |
| 10 | 1986<br>(昭和61) 年度 | pp. 1 - 19           | 佐藤由紀男 | 浜松市博物館                     | 静岡市丸子セイゾウ山・佐渡遺跡 出土土器の再検討                     |
|    |                   | pp. 20 - 30          | 金原宏行  | 浜松市美術館                     | ガラス絵―中国・日本における展開                             |
|    |                   | pp. 31 - 38          | 立花義彰  | 静岡県立美術館準備室                 | 水彩画家 石川欽一郎                                   |
|    |                   | pp. 39 - 40          |       | 静岡県博物館協会 学芸職員研究紀要No.1～9の内容 |                                              |
| 11 | 1987<br>(昭和62) 年度 | pp. 1 - 23           | 志村 博  | 富士市立博物館                    | 後期古墳に於ける特異な石室構造について 富士市域を中心として               |
|    |                   | pp. 24 - 34          | 樋口雄彦  | 沼津市明治史料館学芸員                | 「沼津版」覚え書・補遺                                  |
|    |                   | pp. 35 - 42          | 堀沢光栄  | 富士美術館                      | 私の見たソ連・韓国の博物館                                |
| 12 | 1988<br>(昭和63) 年度 | pp. 1 - 14           | 飯田孝子  | 佐野美術館                      | 松田家本 五秘密曼荼羅図について                             |
|    |                   | pp. 15 - 29          | 藤田洋子  | 佐野美術館                      | 『北斎漫画』の奥付―浦上コレクションによる―                       |
|    |                   | pp. 30 - 45          | 宮下知良  | 浜松市博物館                     | 市町の祭り―浜松市笠井町春日神社の祭礼に関して                      |
| 13 | 1989<br>(平成元) 年度  | pp. 1 - 6            | 土屋泰久  | 下田海中水族館                    | タッチング型式の展示について                               |
|    |                   |                      | 蛭田 密  | マリンワールド海の中道                |                                              |
|    |                   | pp. 7 - 19           | 白根敏昭  | 富士美術館                      | 米原雲海と近代日本木彫 I ―米原雲海とその作品―                    |
|    |                   | pp. 20 - 28          | 瀬川裕市郎 | 沼津市歴史民俗資料館                 | 堅魚木簡の集成                                      |
|    |                   | pp. 29 - 40          | 向坂綱二  | 浜松市博物館                     | 静岡県下の土器棺                                     |
| 14 | 1990<br>(平成2) 年度  | pp. 1 - 6            | 藤浦正行  | MOA美術館                     | 機織図屏風をめぐって 一職人尽絵と婦女風俗図の間―                    |
|    |                   | pp. 11 - 17          | 柴 正博  | 東海大学自然史博物館                 | 東海大学自然史博物館のサマースクールについて                       |
|    |                   | pp. 18 - 24          | 中村則江  | 東海大学海洋科学博物館                | 東海大学海洋科学博物館に於ける作文コンクール顛末記                    |
|    |                   | pp. 26 (19) - 44 (1) | 小川雅弘  | 浜松市博物館                     | 博物館における教育活動                                  |

| 号  | 刊行年度              | ページ                   | 執筆者名       | 所属・職名                        | 題名                                                             |
|----|-------------------|-----------------------|------------|------------------------------|----------------------------------------------------------------|
| 15 | 1991<br>(平成3) 年度  | pp. 1 - 9             | 斎藤秀治       | 伊豆シャボテン公園                    | 東海・関東の漂着信仰の形態                                                  |
|    |                   | pp. 10 - 21           | 藤田洋子       | 佐野美術館                        | 北山寒巖についてのレポート                                                  |
|    |                   | pp. 22 - 29           | 木村 博       | 城ヶ崎文化資料館 顧問                  | 伊豆における「信州石工」の諸問題                                               |
|    |                   | pp. 30 - 45           | 白根敏昭       | 富士美術館                        | 米原雲海と近代日本木彫 II ―近代日本木彫の伝統と革新―                                  |
| 16 | 1992<br>(平成4) 年度  | pp. 52 (1)            | 大山卓司       | 東海大学海洋科学博物館                  | マグロ類の長距離輸送                                                     |
|    |                   | pp. 1 - 13            | 澁谷昌彦／置塩 甲  | 島田市博物館                       | 森 証外と置塩棠園との交流について                                              |
|    |                   | pp. 14 - 24           | 山本義孝       | 浅羽町郷土資料館                     | 浅羽町岡山山の神祭り考                                                    |
|    |                   | pp. 25 - 29           | 小木 香       | 浜松市博物館                       | 〈仮称〉浜松市楽器博物館について                                               |
| 17 | 1993<br>(平成5) 年度  | pp. 40 (1) - 30 (11)  | 柴 正博       | 東海大学自然史博物館                   | 東海大学自然史博物館の一九九二年度展示改修の経緯について                                   |
|    |                   | pp. 1 - 13            | 山本義孝       | 浅羽町郷土資料館                     | 遠江国浅羽荘の荘園鎮守社とその祭祀                                              |
|    |                   | pp. 14 - 20           | 中村邦明       | 浜松市美術館学芸員                    | 水野以文と近代日本の水彩画                                                  |
|    |                   | pp. 21 - 24           | 日置勝三       | 東海大学海洋科学博物館                  | ロシアへ行った「海を知らないウマノミ」                                            |
| 18 | 1994<br>(平成6) 年度  | pp. 25 - 31           | 西野和豊       | フェルケール博物館                    | リニューアルオープン三年を経て                                                |
|    |                   | pp. 1 - 8             | 大村和男       | 静岡市立登呂博物館学芸員                 | 登呂博物館における常設展示の更新<br>―「参加体験型ミュージアム」の導入とその評価をめぐって―               |
|    |                   | pp. 9 - 21            | 渡邊妙子       | 佐野美術館副館長                     | ある美術館の選択                                                       |
|    |                   | pp. 22 - 46           | 玉蟲玲子       | 静岡県立美術館学芸員                   | 今日の「博物館実習」を考える―当館の場合を出発点として―                                   |
| 19 | 1995<br>(平成7) 年度  | pp. 60 (1) - 47 (14)  | 山本義孝       | 浅羽町郷土資料館                     | 行者道を通して見た遠江の修験霊山<br>―光明山・本宮山の事例を中心として―                         |
|    |                   | pp. 1 - 8             | 手島英真       | 東海道広重美術館館長                   | 東海道広重美術館について                                                   |
|    |                   | pp. 9 - 26            | 白根敏昭       | 富士美術館学芸課長                    | 一九〇〇年・パリ万国博覧会と明治の工芸<br>―富士美術館所蔵赤塚自得作「菊時絵文台・硯箱」を中心に―            |
|    |                   |                       |            |                              |                                                                |
| 20 | 1996<br>(平成8) 年度  | pp. 41 (22) - 27 (36) | 山本義孝       | 浅羽町郷土資料館学芸員                  | 里修験寺院の形態―遠江の事例を中心として―                                          |
|    |                   | pp. 49 (14) - 42 (21) | 杉村 斉       | 三島市郷土資料館館長                   | 提案・「博物館の連携と地域」                                                 |
|    |                   | pp. 62 (1) - 50 (13)  | 山本六三       | 静岡県立美術館                      | 「ID&V美術館構想」<br>～データとビジョンの重視による静岡県立美術館の研究                       |
|    |                   |                       |            |                              |                                                                |
| 21 | 1997<br>(平成9) 年度  | pp. 1 - 13            | 杉村 斉       | 三島市郷土資料館館長                   | 三島暦研究・調査報告―三島暦の弘暦について―                                         |
|    |                   | pp. 29 (32) - 14 (47) | 山本義孝       | 浅羽町郷土資料館学芸員                  | 遠江における山岳修験の成立（上）                                               |
|    |                   | pp. 38 (23) - 31 (30) | 萩原宗一       | 下田海中水族館イルカ担当マネージャー           | イルカを使用したふれあい展示について                                             |
|    |                   | pp. 50 (11) - 39 (22) | 栗原雅也       | 細江教育委員会社会教育課                 | 「わが町にふさわしい博物館」運営の試み<br>…1996年度細江町立歴史民俗資料館講座の紹介…                |
| 22 | 1998<br>(平成10) 年度 | pp. 60 (1) - 51 (10)  | 柴 正博／石橋忠信  | 東海大学社会教育センター                 | 東海大学社会教育センターにおけるホームページの開設                                      |
|    |                   | pp. 1 - 10            | 安達めぐみ      | ビュフェ美術館参事                    | ビュフェ美術館の版画館について                                                |
|    |                   | pp. 11 - 21           | 柴 正博／石橋忠信  | 東海大学社会教育センター学芸文化室博物課学芸員      | 博物館におけるホームページの活用と展開                                            |
|    |                   | pp. 22 - 33           | 小木 香       |                              |                                                                |
| 23 | 1999<br>(平成11) 年度 |                       | 嶋 和彦       | 浜松市楽器博物館学芸員                  | 普化尺八をめぐる一連の取り組みと考察                                             |
|    |                   |                       | 村瀬正巳       |                              |                                                                |
|    |                   | pp. 34 - 64           | 山本義孝       | 浅羽郷土資料館学芸員                   | 遠江における山岳修験の成立（下）                                               |
|    |                   | pp. 2 - 21            | 白根敏昭       | 富士美術館学芸課長                    | 太田聴雨の画業 一伊豆下田時代を中心に                                            |
| 24 | 2000<br>(平成12) 年度 | pp. 22 - 31           | 久野 彰       | 掛川市二の丸美術館副館長                 | 掛川市二の丸美術館について                                                  |
|    |                   | pp. 65 (2) - 32 (35)  | 山本義孝       | 浅羽郷土資料館主任                    | 遠江国十一院内の比定                                                     |
|    |                   | pp. 2 - 15            | 荻野裕子       | 富士市立博物館学芸員                   | 富士・沼津・三島3市博物館共同企画展のあゆみ                                         |
| 25 | 2001<br>(平成13) 年度 | pp. 16 - 31           | 飯田 正       | 豊田町香りの博物館館長                  | 気構えず気軽に立ち寄れる夢ある博物館を目指して                                        |
|    |                   | pp. 2 - 12            | 切池 融       | 新居町役場・主査・元新居閣所史料館・職員         | 近世の今切湊―出入廻船の動向を中心に―                                            |
|    |                   | pp. 23 (2) - 14 (11)  | 柴 正博／石橋忠信  | 東海大学社会教育センター学芸員              | 静岡県博物館協会インターネット活用研究会の活動                                        |
| 26 | 2002<br>(平成14) 年度 |                       | 泰井 良       | 静岡県立美術館・学芸員                  |                                                                |
|    |                   | pp. 2 - 10            | 戸塚和美       | 掛川市二の丸美術館・学芸員                | 青木達弥について―「青木達弥展」の作品から                                          |
|    |                   | pp. 11 - 19           | 堀切正人       | 静岡県立美術館・学芸員                  | 宮芳平《椿》について                                                     |
| 27 | 2003<br>(平成15) 年度 | pp. 2 - 32            | 白鳥誠一郎      | 静岡市立芹沢鉦介美術館学芸員               | 農林省積雪地方農村経済調査書と芹沢鉦介                                            |
|    |                   | pp. 33 - 46           | 内田昌宏       | 富士市立大淵小学校教諭・<br>前富士市立博物館指導主事 | 市民参加型写真展「20世紀写真のなかの富士―学び舎のあの日―」<br>をふりかえって―博物館と学校との連携を視野にいれながら |
|    |                   | pp. 47 - 54           | 日比野秀男      | 常葉学園大学・常葉美術館                 | NPO法人”文化財を守る会”の設立を目指して<br>―災害時における博物館のネットワーク作り―                |
|    |                   | pp. 55 - 66           | 友田千恵／山口聡太郎 | 山口麿仁堂                        | 志賀重昂『日本風景論』と明治二十年代の油画について                                      |
| 28 | 2004<br>(平成16) 年度 | pp. 55 - 66           | 村上 敬       | 静岡県立美術館学芸員                   | 志賀重昂『日本風景論』と明治二十年代の油画について                                      |
|    |                   | pp. 2 - 8             | 二村 悟       | 金谷町お茶の郷博物館主事                 | 金谷町お茶の郷博物館のイベント参加を通じた                                          |
|    |                   |                       | 小松知子       | 金谷町お茶の郷博物館学芸員                | 茶の葉普及啓蒙活動について                                                  |
|    |                   | pp. 9 - 17            | 二村 悟       | 金谷町お茶の郷博物館 主事                | 子供向け企画展「ばくもわたしもお茶博士 世界のお茶を旅しよう」<br>をふりかえって                     |
| 29 | 2005<br>(平成17) 年度 |                       | 小松知子       | 金谷町お茶の郷博物館学芸員                |                                                                |
|    |                   | pp. 18 - 24           | 日比野秀男      | 常葉学園大学教授・常葉美術館長              | 博物館の災害時における対策研究事業について<br>―災害発生時の県内ネットワーク―                      |
|    |                   | pp. 26 - 29           | 三浦定俊       | 東京文化財研究所協力調整官                | 災害から文化財を守る                                                     |

| 号                    | 刊行年度               | ページ                   | 執筆者名                    | 所属・職名              | 題名                                                 |
|----------------------|--------------------|-----------------------|-------------------------|--------------------|----------------------------------------------------|
| 28                   | 2004<br>(平成16) 年度  | pp. 2 - 10            | 日比野秀男                   | 静岡県博物館協会           | 災害対策チェックシートの作成を終えて                                 |
|                      |                    |                       |                         | 災害対策ワーキンググループ代表    |                                                    |
|                      |                    | p. 2                  | 清水秀男                    | 熱川バナナワニ園           | 1、地震対策ワーキンググループのスタンスについて                           |
|                      |                    | p. 3                  | 荻原美広                    | 奇石博物館              | 2、災害対策ワーキンググループ感想                                  |
|                      |                    | p. 3                  | 田中之博                    | MOA美術館             | 3、災害対策ワーキンググループに参加して                               |
|                      |                    | p. 4                  | 今田 徹                    | 浜松市美術館             | 4、災害対策ワーキンググループに参加して                               |
|                      |                    | p. 5                  | 飯田 真                    | 静岡県立美術館            | 5、災害対策ワーキンググループ今後の方向性                              |
|                      |                    | p. 5                  | 友田千恵                    | NPO文化財を守る会         | 6、災害対策ワーキンググループの感想                                 |
|                      |                    | p. 7 - 10             |                         |                    | 地震対応 自己診断チェックシート                                   |
|                      |                    | pp. 11 - 18           | 友田千恵                    | NPO文化財を守る会         | 災害における文化財被害の実際と救済活動について<br>―福井・伊豆の文化財被災報告―         |
| pp. 43 (1) - 20 (24) | 松井一明               | 袋井市教育委員会              | 遠江西・中部地域の中世石塔の出現と展開     |                    |                                                    |
|                      | 太田好治               | 浜松市博物館                | ―静岡県下における中世石塔の研究1―      |                    |                                                    |
|                      | 木村弘之               | 掛川市教育委員会              |                         |                    |                                                    |
|                      |                    |                       |                         |                    |                                                    |
| 29                   | 2005<br>(平成17) 年度  | pp. 2 - 11            | 山本義孝                    | 袋井市立浅羽郷土資料館        | 勝間田院内（修験者・陰陽師）とその資料                                |
|                      |                    | pp. 33 (47) - 12 (68) | 立花義彰                    |                    | 静岡近代美術年表 稿 大正編                                     |
|                      |                    | pp. 43 (37) - 34 (46) | 特定非営利活動法人<br>NPO文化財を守る会 |                    | 紙プログラム報告 〜和紙を通して文化財の保存を学ぶ                          |
|                      |                    | pp. 79 (1) - 44 (36)  | 松井一明                    | 袋井市教育委員会／浅羽郷土資料館   | 遠江中・東部地域の中世石塔の出現と展開                                |
|                      |                    |                       | 木村弘之                    | 磐田市教育委員会／見付学校教育資料館 | ―静岡県下における中世石塔の研究2―                                 |
|                      |                    |                       | 溝口彰啓                    | 牧之原市教育委員会          |                                                    |
| 30                   | 2006<br>(平成18) 年度  | pp. 2 - 21            | 山本義孝                    | 袋井市立浅羽郷土資料館        | 天竜院内（修験者・陰陽師）とその資料                                 |
|                      |                    | pp. 55 (23) - 22 (56) | 松井一明                    | 袋井市教育委員会／浅羽郷土資料館   | 駿河中・西部地域の中世石塔の出現と展開                                |
|                      |                    |                       | 木村弘之                    | 磐田市教育委員会／見付学校教育資料館 | ―静岡県下における中世石塔の研究3―                                 |
|                      |                    |                       | 溝口彰啓                    | 牧之原市教育委員会          |                                                    |
|                      |                    |                       | 篠ヶ谷路人                   | 島田市教育委員会／島田市博物館    |                                                    |
|                      |                    |                       | 椿原靖弘                    | 藤枝市教育委員会／藤枝市郷土博物館  |                                                    |
|                      |                    | pp. 77 (1) - 56 (22)  | 立花義彰                    |                    | 静岡近代美術年表 稿 明治編（下）                                  |
|                      |                    | 31                    | 2007<br>(平成19) 年度       | pp. 2 - 29         | 松井一明                                               |
| 木村弘之                 | 磐田市教育委員会／見付学校教育資料館 |                       |                         | ―静岡県下における中世石塔の研究4― |                                                    |
| 溝口彰啓                 | 牧之原市教育委員会          |                       |                         |                    |                                                    |
| pp. 30 - 39          | 立花義彰               |                       |                         |                    | 静岡近代美術年表 稿 明治編（上）                                  |
| p. 40                | 渡邊妙子               |                       |                         | （財）佐野美術館館長         | 文官石像                                               |
| p. 40                | 山田一幸               |                       |                         | 東海大学海洋科学博物館学芸員     | クマノミ水族館リング水槽                                       |
| p. 41                | 西野和豊               |                       |                         | フェルケール博物館館長        | 模型船「神奈川丸」                                          |
| p. 41                | 田島 整               |                       |                         | 上原仏教美術館学芸員         | 紺紙金銀字交書阿毘達磨俱舍論卷 第二十六（中尊寺経）                         |
| pp. 42 - 47          | 日比野秀男              |                       |                         | 常葉美術館              | 朝鮮通信使展への道                                          |
| pp. 48 - 51          | 海野一徳               |                       |                         | 藤枝市郷土博物館           | 藤枝市郷土博物館 第75回企画展「藤枝宿と朝鮮通信使」                        |
| pp. 52 - 53          | 森谷紗世               | 静岡アートギャラリー学芸員         | ―「クリエイティブメッセージ」の取り組み―   |                    |                                                    |
| 32                   | 2008<br>(平成20) 年度  | pp. 2 - 23            | 松井一明                    | 袋井市立浅羽郷土資料館        | 遠江・駿河地域の中世石塔の出現と展開                                 |
|                      |                    |                       | 木村弘之                    | 見付学校教育資料館          | ―静岡県下における中世石塔の研究5―                                 |
|                      |                    |                       | 溝口彰啓                    | （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所   |                                                    |
|                      |                    | pp. 24 - 29           | 稲森幹大                    | 静岡市立登呂博物館          | 歴史系博物館における体験学習活動の在り方<br>―体験指導員としての活動を通じて―          |
|                      |                    | pp. 30 - 31           | 中井喜子                    | NPO文化財を守る会         | 【報告】NPO文化財を守る会の活動報告                                |
|                      |                    | pp.32-35              | 高林晶子                    | 富士市立博物館学芸員         | 【報告】富士・沼津・三島三市博物館共同企画展の歩み、<br>並びに朝鮮通信使400周年記念展について |
|                      |                    | p.36 (13)             | 嶋和彦                     | 浜松市楽器博物館館長         | ブランシェのチェンバロ                                        |
|                      |                    | p.36 (13)             | 土森智典                    | 上原近代美術館学芸員         | アンリ・マティス《赤い屋根のある風景》                                |
|                      |                    | p.37 (12)             | 田島整                     | 上原仏教美術館学芸員         | 阿弥陀如来立像（鎌倉時代）                                      |
|                      |                    | p.37 (12)             | 荻原美広                    | 石の博物館（奇石博物館）学芸員    | キャニオン・デアプロ隕石                                       |
| p.47 (2) 38 (11)     | 山本義孝               | 袋井市立浅羽郷土資料館           | 当山派修験 遠州中泉組 月光山神護寺とその資料 |                    |                                                    |

## 静岡県博物館協会 年表（昭和44年～平成21年）

| 年度              | 会長               | 総会等                                                                                                       | 学芸員研修会等                                                                                                                                                                                          | 加盟館園数 |
|-----------------|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| 昭和44年<br>(1969) | 白井光男             | 6月27日<br>静岡県博物館協会設立打合会<br>(静岡県博物館協会創立)<br>総会<br>(東海軒会館)                                                   |                                                                                                                                                                                                  | 44    |
| 昭和45年<br>(1970) | 白井光男             | 理事会・総会<br>(佐野美術館)                                                                                         | 歴史考古部門の研修会を<br>日本博物館協会と共催で開催<br>第1回：学芸職員の役割は何か<br>(佐野美術館)                                                                                                                                        | 44    |
| 昭和46年<br>(1971) | 白井光男             | 理事会・総会<br>(三島市楽寿園)<br>東海地区博物館連絡協議会<br>(東海大学海洋科学博物館)                                                       |                                                                                                                                                                                                  | 44    |
| 昭和47年<br>(1972) | 白井光男             | 理事会・総会<br>(駿府博物館)                                                                                         |                                                                                                                                                                                                  | 44    |
| 昭和48年<br>(1973) | 白井光男             | 理事会・総会<br>(浜松市美術館)                                                                                        | 学芸職員研究会：博物館の現状と課題<br>(駿府博物館)<br>第5回：企画展について<br>(浜松市美術館)                                                                                                                                          | 24    |
| 昭和49年<br>(1974) | 白井光男<br><br>松浦国男 | 緊急役員会<br>(駿府博物館)<br>松浦国男氏（久能山東照宮博物館長）を<br>新会長に選任<br>総会・全国博物館大会役員会<br>(駿府博物館)<br>第22回全国博物館大会<br>(静岡市)      | 第6回学芸職員研究会<br>(富士美術館)                                                                                                                                                                            | 24    |
| 昭和50年<br>(1975) | 松浦国男             | 理事会・総会<br>(久能山東照宮博物館)                                                                                     | 第7回：「静岡の博物館」No. 2について<br>(駿府博物館)                                                                                                                                                                 | 24    |
| 昭和51年<br>(1976) | 松浦国男             | 理事会・総会<br>(駿府博物館)                                                                                         | 第8回：協会主催企画展について<br>(佐野美術館)<br>第9回：博物館資料の整理について<br>(沼津市歴史民俗資料館)<br>第10回：博物館の広報活動について<br>(浜松市美術館)<br>第11回：博物館の教育活動について<br>(東海大学海洋科学博物館)                                                            | 24    |
| 昭和52年<br>(1977) | 松浦国男             | 理事会・総会<br>(駿府博物館)<br>東海地区博物館連絡協議会<br>(熱川バナナワニ園)<br>第25回全国博物館大会<br>(熱海市)<br>神奈川県博物館協会共催合同研究部会<br>(救世熱海美術館) | 第12回：博物館友の会―その組織と活動―<br>(三島市郷土館)<br>第13回：ポスターについて<br>(ベルナール・ビュフェ美術館)<br>第14回：東海大学海洋科学博物館の<br>水族館部内に於ける解説について<br>(駿府博物館)<br>第15回：8ミリ映画による郷土資料の記録と紹介<br>(富士美術館)<br>第16回：企画展における出品交渉について<br>(登呂博物館) | 24    |
| 昭和53年<br>(1978) | 松浦国男             | 理事会・総会<br>(駿府博物館)                                                                                         | 第17回：パネルと展示品解説の作製<br>(池田二十世紀美術館)<br>第18回：アンケート調査について<br>(静岡市文化財資料館)<br>第19回：資料収集に関する情報交換<br>(久能山東照宮博物館)                                                                                          | 31    |



| 年度              | 会長   | 総会等                                                                                 | 学芸員研修会等                                                                                          | 加盟館園数 |
|-----------------|------|-------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| 昭和54年<br>(1979) | 松浦国男 | 理事会・総会<br>(駿府博物館)<br>神奈川県博物館協会共催研究交換会<br>(浜松市美術館)<br>館長会議(浮月楼)<br>県立美術博物館設立に対する意見交換 | 第20回:井出コレクションの鑑賞について<br>(井出孝氏宅)<br>第21回:地震対策について<br>(駿府博物館)<br>第22回:博物館の照明について<br>(救世熱海美術館)      | 35    |
| 昭和55年<br>(1980) | 松浦国男 | 理事会・総会<br>(駿府博物館)                                                                   | 第23回:資料蒐集の方法と情報交換<br>(清水港湾博物館)<br>第24回:博物館の年間行事計画について<br>(駿府博物館)<br>第25回:「日本の暦」展報告<br>(三島市郷土館)   | 36    |
| 昭和56年<br>(1981) | 松浦国男 | 理事会・総会<br>(駿府博物館)<br>臨時総会<br>(駿府博物館)                                                | 第26回:来年度発行予定の<br>県内博物館要覧について<br>(駿府博物館)                                                          | 42    |
| 昭和57年<br>(1982) | 松浦国男 | 理事会・総会<br>(浜松市美術館)<br>東海地区博物館連絡協議会<br>(浜松市博物館)                                      | 第27回:静岡県の祭祀遺跡<br>(加藤学園考古学研究所)<br>第28回:教育普及活動について<br>(登呂博物館)                                      | 45    |
| 昭和58年<br>(1983) | 松浦国男 | 理事会・総会<br>(富士サファリパーク)<br>臨時役員会<br>(駿府博物館)                                           | 懇話会:博物館におけるレファレンス<br>(東海大学海洋科学博物館)<br>第29回:アメリカの美術館を見て<br>(静岡県庁西館)<br>第30回:ビデオの解説について<br>(佐野美術館) | 51    |
| 昭和59年<br>(1984) | 松浦国男 | 総会<br>(静岡県教育会館)<br>創立15周年記念事業<br>特別講演会(樋口清之氏)開催                                     |                                                                                                  | 53    |
| 昭和60年<br>(1985) | 松浦国男 | 総会<br>(駿府博物館)                                                                       | 第1回学芸職員大会<br>(静岡県立美術館)                                                                           | 54    |
| 昭和61年<br>(1986) | 松浦国男 | 事務局が久能山東照宮博物館から<br>静岡県立美術館へ移転<br>総会<br>(静岡県立美術館)<br>役員会<br>(静岡県立美術館)                | 中部地区(静岡県立美術館)と<br>東部地区(熱川バナナワニ園)の2ヵ所で開催                                                          | 55    |
| 昭和62年<br>(1987) | 松浦国男 | 理事会・総会<br>(静岡市・たちばな会館)                                                              | 東部地区(佐野美術館)、<br>中部地区(静岡県立美術館)、<br>西部地区(浜松市博物館)<br>の3ヵ所で開催                                        | 55    |
| 昭和63年<br>(1988) | 松浦国男 | 総会<br>(静岡県立美術館)                                                                     | 第1回(静岡県立美術館)、<br>第2回(佐野美術館)開催<br>文化講演会:青木繁夫氏<br>(焼津市歴史民俗資料館)                                     | 56    |
| 平成元年<br>(1989)  | 松浦国男 | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>創立20周年記念事業<br>記念展覧会「静岡県の名宝展」、<br>特別講演会(渡辺文雄氏)開催                  | 研究会:新しい博物館作りを目指して<br>(静岡県立美術館)<br>研究会:博物館の目指すもの<br>―教育普及活動を通して―<br>(浜松市科学館)                      | 60    |
| 平成2年<br>(1990)  | 松浦国男 | 総会<br>(静岡県立美術館)                                                                     | 研究会:博物館における展示活動<br>(伊豆三津シーパラダイス)<br>研究会:体験学習(サマー・スクール)について<br>(沼津市明治史料館)                         | 60    |

| 年度              | 会長    | 総会等                                              | 学芸員研修会等                                                                                                         | 加盟館園数 |
|-----------------|-------|--------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| 平成3年<br>(1991)  | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)                                  | 研究会:学校教育と博物館<br>―ワークシートの作り方と利用法―<br>(焼津市文化センター)<br>研究会:映像資料の管理と写真撮影について<br>(浜松市美術館)                             | 64    |
| 平成4年<br>(1992)  | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>東海地区博物館連絡協議会<br>(静岡市・たちばな会館)  | 研究会:コンピューターによるデータベースについて<br>(静岡県立美術館)<br>文化講演会:笠谷和比古氏<br>(浜松市美術館)                                               | 65    |
| 平成5年<br>(1993)  | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)                                  | 研究会:今博物館を考える〜学芸員の将来像〜<br>(東海大学海洋科学博物館)<br>研究会:今博物館を考える〜学芸員の抱える問題について〜<br>(静岡県立美術館)<br>文化講演会:宇田川武久氏<br>(静岡県立美術館) | 66    |
| 平成6年<br>(1994)  | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)                                  | 研究会:博物館における地震対策<br>(静岡県地震防災センター)<br>特別講演会:山口昌男氏<br>(静岡県立美術館)                                                    | 69    |
| 平成7年<br>(1995)  | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)                                  | 第1回:美術館・博物館と耐震対策<br>(MOA美術館)<br>第2回:学校教育と博物館園・美術館<br>(アクトシティ浜松)<br>特別講演会:鷲塚泰光氏<br>(静岡県立美術館)                     | 69    |
| 平成8年<br>(1996)  | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)                                  | 第1回:学校教育との連携をめざして<br>(静岡県立美術館)<br>第2回:学校・教育委員会との協力体制<br>(沼津市明治史料館)<br>特別講演会:遠藤友麗氏<br>(アクトシティ浜松)                 | 71    |
| 平成9年<br>(1997)  | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)                                  | 第1回(浜松市楽器博物館)、<br>第2回(伊豆三津シーパラダイス)開催<br>特別講演会:内山淳一氏<br>(静岡県立美術館)                                                | 73    |
| 平成10年<br>(1998) | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)                                  | 第1回(浜松市楽器博物館)、<br>第2回(伊豆シャボテン公園)開催<br>特別講演会:松木寛氏<br>(静岡県立美術館)                                                   | 73    |
| 平成11年<br>(1999) | 松浦国男  | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>創立30周年記念事業<br>記念講演会(吉岡健二郎氏)開催 | 第1回(浜松市楽器博物館)、<br>第2回(富士市立博物館)開催                                                                                | 79    |
| 平成12年<br>(2000) | 吉岡健二郎 | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>吉岡健二郎氏(静岡県立美術館長)を<br>新会長に選任   | 第1回(天竜市立秋野不矩美術館)、<br>第2回(上原近代美術館)開催<br>特別講演会:木下直之氏<br>(静岡県立中央図書館)                                               | 79    |
| 平成13年<br>(2001) | 吉岡健二郎 | 総会<br>(静岡県立美術館)                                  | 第1回:「今後の博物館を考える」<br>(浜松市楽器博物館)<br>第2回:「今後の博物館を考える」<br>(富士市立博物館)<br>特別講演会:鈴木直義氏<br>(静岡県立美術館)                     | 81    |

| 年度              | 会長    | 総会等                                                                                                                                                                                                       | 学芸員研修会等                                                                                                                     | 加盟館園数 |
|-----------------|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| 平成14年<br>(2002) | 吉岡健二郎 | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>東海地区博物館連絡協議会<br>(静岡県埋蔵文化財調査研究所)                                                                                                                                                        | 第1回:博物館の評価について<br>(掛川市立中央図書館)<br>第2回:災害発生時の県内ネットワークについて<br>(静岡県立美術館)<br>特別講演会:志賀秀孝氏<br>(静岡県立美術館)                            | 77    |
| 平成15年<br>(2003) | 吉岡健二郎 | 総会<br>(静岡県立中央図書館)                                                                                                                                                                                         | 第1回:災害からお客様を守る<br>(熱川バナナワニ園)<br>第2回:災害対策ワーキンググループの活動報告<br>(豊田町香りの博物館、豊田町立図書館)<br>特別講演会:小和田哲男氏<br>(静岡県立美術館)                  | 77    |
| 平成16年<br>(2004) | 吉岡健二郎 | 総会<br>(静岡県立美術館)                                                                                                                                                                                           | 研修会:保存科学研修(入門編)<br>(静岡県立美術館)<br>特別講演会、災害対策講習会を開催                                                                            | 79    |
| 平成17年<br>(2005) | 西源二郎  | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>西源二郎氏(東海大学海洋科学博物館長)<br>を新会長に選任                                                                                                                                                         | 研修会:博物館教育とは<br>(三島市民生涯学習センター)<br>地域セミナー、講演会・シンポジウムを開催                                                                       | 74    |
| 平成18年<br>(2006) | 宮治昭   | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>宮治昭氏(静岡県立美術館長)を<br>新会長に選任                                                                                                                                                              | 研修会:博物館における展覧会の現状<br>(掛川市立中央図書館)<br>地域セミナー、講演会、災害対策講習会を開催                                                                   | 75    |
| 平成19年<br>(2007) | 宮治昭   | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>東海地区博物館連絡協議会<br>(静岡県立美術館)                                                                                                                                                              | 講習会1:博物館の顧客満足度(CS)向上にむけて<br>(パルコ静岡店・駿府博物館)<br>講習会2:これからの博物館運営について<br>―指定管理者制度と新公益法人制度―<br>(富士駅南公民館)<br>災害対策講習会、地域セミナーを開催    | 70    |
| 平成20年<br>(2008) | 宮治昭   | 総会<br>(静岡県立美術館)                                                                                                                                                                                           | 講習会1:文化財の防災と被災文化財の応急措置<br>(沼津市立図書館)<br>講習会2:新公益法人制度・指定管理者制度について<br>(静岡県立大学)<br>講習会3:博物館・美術館と周辺地域<br>(掛川市立中央図書館)<br>地域セミナー開催 | 71    |
| 平成21年<br>(2009) | 宮治昭   | 総会<br>(静岡県立美術館)<br>創立40周年記念事業<br>記念講演会<br>①鼎談「これまでの博物館、これからの博物館」<br>講師:向坂鋼二氏(元浜松市博物館長)、<br>西源二郎氏(元東海大学海洋博物館長)、<br>渡邊妙子氏(佐野美術館長)<br>司会:日比野秀男氏(常葉学園大学造形学部長・前常葉美術館長)<br>②特別講演会「静岡の仏像」<br>講師:伊東史朗氏(和歌山県立博物館長) | 講習会1:「博物館の評価をめぐって」<br>(掛川市立中央図書館)<br>講習会2開催                                                                                 | 69    |

## 静岡県博物館協会 研究紀要投稿規程

### 1 投稿を受け付ける原稿

#### (1) 内容規定

加盟館園職員が従事している職務（展示・調査研究・保存、教育普及・その他）に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等  
※専門分野に関するものに限りません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

#### (2) 執筆者規定

加盟館園職員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。複数人による場合、全執筆者の 1/3が加盟館園職員であることを条件とします。

### 2 入稿規定

#### (1)

日本語による原稿を基本とします。

#### (2)

デジタルデータと印字原稿、必要なら図版（ポジ、印画紙写真、デジタルデータ、図面等）等を併せて提出して下さい。  
デジタルデータは OSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータは JPEGに統一して下さい。  
※万一の場合に備え、原稿提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

#### (3) 分量

| ページ数目安（1ページ当たり） |         |  |  | 事例報告等（1～4ページ分程度） |             |         |  | 事例報告等（1/2ページ分） |             |        |  |  |
|-----------------|---------|--|--|------------------|-------------|---------|--|----------------|-------------|--------|--|--|
| 論文 縦書き          | 写真無しの場合 |  |  | 2,000字           | 縦書き 写真無しの場合 | 2,000字  |  |                | 縦書き 写真無しの場合 | 1,100字 |  |  |
|                 | 写真有りの場合 |  |  | 1,600字           |             | 写真有りの場合 |  |                |             | 900字   |  |  |
| 横書き             | 写真無しの場合 |  |  | 2,000字           | 横書き 写真無しの場合 | 2,000字  |  |                | 横書き 写真無しの場合 | 1,100字 |  |  |
|                 | 写真有りの場合 |  |  | 1,600字           |             | 写真有りの場合 |  |                |             | 900字   |  |  |

#### (4) 文字原稿（印字原稿は次の書式でご提出下さい）

字数（1シート） A4版 40字×30行  
※誌面レイアウト・フォーマットに揃えた入稿も歓迎します。レイアウト見本をご希望の方は、事務局にお問い合わせ下さい。

#### (5) 図版原稿（1ページの版面はA4）

カラー（巻頭図版）掲載希望があればご相談下さい。  
モノクロ すべて挿図として扱います。

- a カラー図版原稿には、目次用のデータを明示して下さい。
- b 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
- c 挿図原稿のコピーもしくは印刷された挿図原稿に、掲載希望範囲を、製版作業の支障にならないよう、明示して下さい。
- d レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- e 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

#### (6) 図版の著作権申請

写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。

#### (7) 執筆者の表示

原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地（それぞれ〒、Tel、Fax 番号）・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をふって下さい。  
成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。

### 3. 原稿の送付先

原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田53-2 静岡県立美術館内  
静岡県博物館協会事務局  
Tel.054-263-5857  
Fax.054-263-5742

### 4. 日程および申込・校正手順

#### (1) 日程

申込締切 平成22年11月末日  
入稿締切 平成23年1月末日  
発行予定 平成23年3月末日

#### (2) 申込方法

申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。

- ・執筆者（複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記）
  - ・題名（仮題で可）
  - ・分量見込（レイアウト見本による全ページ数で表示。図版、表等の希望も含む。）
  - ・縦書き、横書きの希望
- ※分量は、1本の論文当たり15ページ以内を基本とします。

#### (3) 申込の確認

静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて紀要製作の見積もりを行ないます。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

#### (4)

入稿は、上述2の「入稿規定」に従って、上述3の「原稿の送付先」に送付するか、ご持参下さい。4-（3）で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込みより増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

#### (5) 校正

入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文字校正2回、図版校正2回を行なうことが出来ます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

#### (6) レイアウト

レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

### 5. その他

#### (1) 文責

原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表記等の問題について静岡県博物館協会及び静岡県博物館協会事務局は、一切の責任を負いません。

#### (2) 執筆者への成果品割当

執筆者には、30部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて90部を上限として贈呈することが出来ます。

#### (3) 抜き刷りの作成

執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。